GAME BOOK

悪魔城伝説

真正バンパイアハンター

レッカ社編

井上尚美著

双葉文庫

れ

01—43

P430

FUTABASHA
GAMEBOOK
SERIES

カバーイラスト／松下徳昌
カバーデザイン／ハーブスタジオ

悪魔城伝説

真正バンパイアハンター

井上尚美著

FUTABASHA ADVENTURE GAME BOOK SERIE

双葉文庫

ファミコン冒険ゲームブック

悪魔城伝説
真正バンパイアハンター

井上尚美／RECCA社

双葉社

悪魔城伝説

真正バンパイアハンター

CONTENTS

プロローグ

　よどんだ、息詰まるような闇がえんえん続き、そのあまりの胸苦しさに喘ぎだしたころ、凄まじい雷鳴がとどろきわたる。音は聞こえない。びりびりした空気でそれとわかるのだ。稲妻が狂ったように闇を切り裂く。廃虚の村。陰鬱な森。霧をまとった古城。脈絡なく浮かびあがるのは見たこともない風景だ。だがそれをたしかに知っている…。巨大なハンマーとなった閃光が砕くのは石積みの塔だ。おそろしくゆっくりと崩れ落ちる。奇怪にも、その光景は瞬きのたびになんどもなんども繰り返される。あたかも塔は数限りなくあり、それが次々に落雷によって崩壊していくように。ふと闇が戻る。だが終わったのではない。いやな、とてもいやな感じだ。それをどう言いあらわせばいいのかわからない。体じゅうの毛穴がふつふつとあわだち、冷たい汗がにじみだす。気がつくと闇の底を見つめている。なにかある。大きな棺だ。はじめからそこにあったのだ、と思う。とてつもなくいやな感じはそれがここにあるからなのだ、と。棺の蓋がことりと鳴る。見えない手が心臓をぎゅっとつかむ。なかからなにかあらわれるのだ！　恐ろしい予感が突き抜ける。だめだ。蓋をあけさせてはいけない。そいつをそこから出してはいけない!!　だが体は動かない。凍りついたように身動きひとつできないのだ。棺の蓋は静かに、ゆっくりと持ちあがる。そ

プロローグ

して青白い指が棺の縁をつかむ――。
夢はいつもそこで終わった。

月が雲間からのぞいた。うっすらと漂う霧が隠しきれない秘密をほのめかせてときおり光る。ワラキア地方のはずれ。ここ百年ばかり足を踏み入れたものはないだろう。廃墟の村。荒れ果てた小さな広場にたたずむ四つの影をのぞいては。

「あの夢を？」

「ああ。毎晩毎晩うなされちまったぜ」

「ではみんなが同じ夢を見たわけなのですね」

「わたしたち四人だけが、ね」

埋葬されないままに年月を経た村人たちの骸骨を眺めながら、互いに見知らぬ同士は奇妙な挨拶の言葉をかわした。それでこと足りた。はじめて会う相手ではあるが、何者かは知っているのだ。

「ベルモント一族だな？」

抜け目ない視線をぼくのムチに当てたのは、小柄だが全身バネのような体つきのやつだ。

「シド…」ぼくはムチ同様ベルモント一族に伝わるロザリオをひっぱりだして見せた。「シド・ベルモント。そっちはダイナスティだろう？」

じいさんかひいじいさんがグラント・ダイナスティだということは、柄の短いオノです
ぐにわかる。

「俺としちゃあこんなものはぶらさげておきたくはないんだがな」彼もまたロザリオ…ぼ
くのとはやや形が異なるが…を示す。「ロウだ」

「ズーク・ベルナンデス」

痩せて背の高い僧侶はバイブルとロッド…彼はその先にロザリオの十字架をくっつけて
いる…を持っていた。魔術を伝えるサイファの血筋だ。となると、残るひとり…やや冷た
い美貌が独特の雰囲気を秘めている娘はアルカードの後裔。

「レイラ」とだけ言った。そのロザリオの十字架はいささか変わった形をしている。

名乗りあうと、だれもがとまどいを隠さず、村の背後に横たわる黒々とした森のほうを
見やった。その向こうに〝悪魔城〟と呼ばれる館があるはずだ。主はヴラド・ツェペシュ。
通称ドラキュラ。ありとあらゆる黒魔術を駆使し、悪魔の力でこの世を支配しようとした
恐るべき人物だ。いや恐るべき人物だった、というべきだろう。その比類なき邪悪の化身
もついには敗れ去ったのだから。バンパイアハンターと呼ばれた4人の働きによって。ラ
ルフ・ベルモント、グラント・ダイナスティ、サイファ・ベルナンデス、アルカード…彼
はヴラド・ツェペシュ公の実子ではあったが、正義に従い選ぶべき道を選んだ…の4人、
つまりわれわれの御先祖様というわけだ。それにしても、真正バンパイアハンターの血を

プロローグ

継ぐとはいえ、ぼくは先祖譲りの腕をちょいと活用して小悪党ども相手にやりあう程度だ。おそらく他の連中にしたって…ロウあたりはほかの場所で出会っていたらなかなかおもしろいだろう…このとまどいぶりからすると同様だと思うのだが。
「われわれはどうやら…」ズーク・ベルナンデスが目の下をひきつらせながら、探るように言った。「先祖の仕事を受け継がなければならないようですね」
「なぜだ？　なんのために？　冗談じゃねえぜ。俺は…」ロウはオノの刃をそっと撫でた。彼もまた答えはわかっているのだ。「はっきり言ってこっちの方面にゃしろうとだ…」
「しかしここへやってきた。なぜです？」
「ちっ」ロウはいらいらと足踏みした。「足が勝手に動いたってのは⁉」
それはおそろしく事実に近かった。ぼくたちはある疑念を口に出しかねていた。
「邪悪なものがよみがえろうとしている」
不意にレイラがそれをつぶやいた。ぼくたちははっとなった。レイラの目つきと口ぶりは占い師がよくやるような霊感をほのめかすものだった。だがそんじょそこいらのまやかし屋とは比べものにならない。異常な美貌のせいもあって、相手を心底ぎくりとさせる凄味があった。だが、実際に起きていることはそれ以上だった。霧が光る帯となって流れた。
「もうその邪気が形をあらわして…」
あたりに転がる骸骨が不気味な輝きを帯びていた…。

⇩1へ

主要登場キャラクター

この物語に登場するのは、シド、ズーク、ロウ、レイラの4人。いずれも吸血鬼退治で活躍した先祖を持つ、勇敢なバンパイアハンターだ。先祖から受け継がれた武器を手に、悪魔城への冒険に旅立つのだが、はたして無事にドラキュラ伯爵のもとにたどりつけるのだろうか…。ここで4人を紹介しておこう。

シド

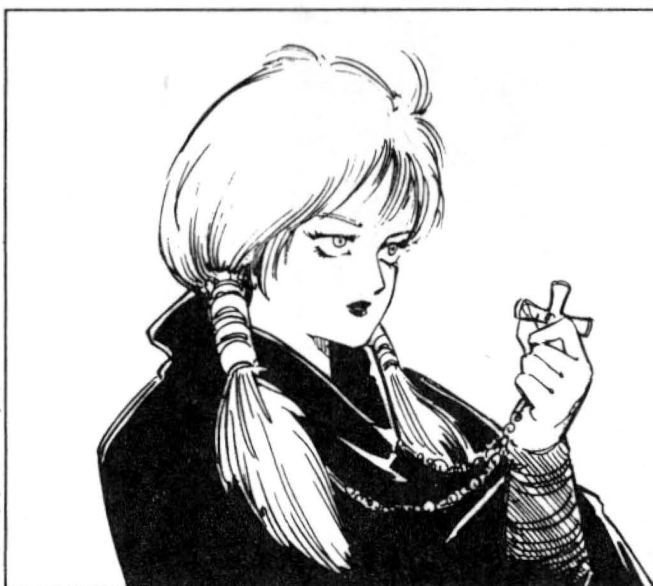
4人のリーダー的存在。思いきりのよい判断と、勇気あふれる行動力で、仲間の3人を引っ張っていく。得意の武器はムチだが、重いオノも使いこなせ、魔術を操ることもできる、オールマイティな能力の持主。

ロウ

素早い身のこなしが特長。先祖はドラキュラに魔物の姿に変えられた。ここという時に発揮する集中力と、動物的なカンのひらめきは、まさに天性のバンパイアハンター。

ズーク

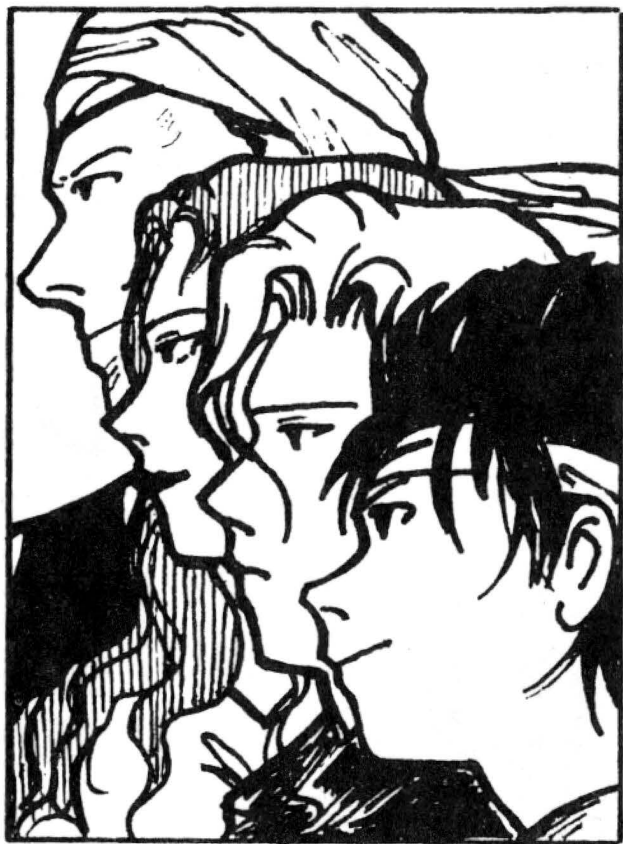
邪悪な霊をうちはらう呪術を身につけた僧侶。呪文によってロッドに力を凝縮し、輝きを光の球に集めて敵を攻撃する。常に冷静な判断力を失わない精神力を持つ。

レイラ

バンパイアハンターの中の紅一点。彼女の身につけた奇妙な形のロザリオには、他の3人のものにはない力が秘められている。並外れた霊感で敵の罠を察知し、危機を救う。

ゲームの進め方

1・4人のバンパイアハンターの冒険

これから恐怖と怪奇の悪魔城の冒険が始まります。みなさんは4人のバンパイアハンターとなって、この邪悪な吸血鬼の棲む魔の城に挑まなければなりません。覚悟はよろしいでしょうか。

冒険の舞台は謎に包まれています。廃墟の村を出発し、墓地や森を進むうちに全体の世界が少しずつ明らかになってきます。もちろん、目指すのは悪魔城ですが、途中には様々な罠や敵が待ちうけています。できるだけ危険や戦いを避けて進むこともできますが、困難な進路が実は近道だったりすることもあります。一歩一歩の判断があなたの運命を左右します。緻密にチェックをメモしながらゲームを進めてください。

2・アイテムポイント

このゲームの主人公は、シド、ロウ、ズーク、レイラの4人です。全員誇り高い真正バンパイアハンターですが、それぞれ得意な武器アイテムが違います。そして、アイテムポイントというのが設けられています。これは、モンスターとの戦闘に参加したキャラクターのアイテムに、戦いの結果に応じて与えられるポイントです。スタートの時点では、どれも0ポイントです。

例えば、シドが攻撃をした場合、「**ムチ…1ポイント**」とあれば、チェックシートのアイテムポイントのゲージを1マス塗ります。このゲージが増えていくほど、そのアイテムの攻撃力が高くなっていくわけです。

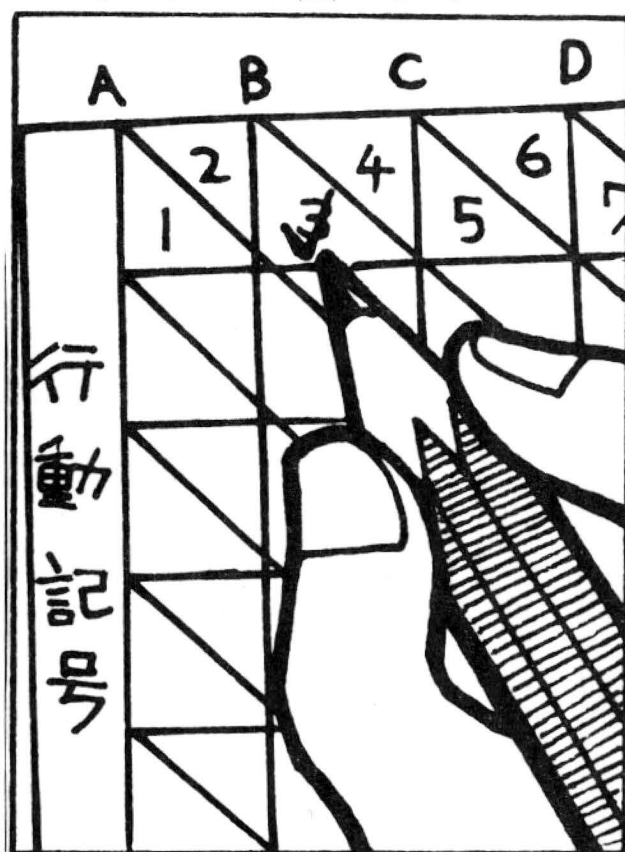
4人の中には、運悪く途中でモンスターの餌食になるキャラクターもあります。その時は、リーダーのシドがそのキャラクターのアイテムも使えるようになります。加算されるポイントは、キャラクターが消えた時点からゲージの上段のみを塗るようにしましょう。

3・行動記号

ゲームを進めていくと、途中で何度かチェックという言葉が出てきます。これは、ゲームの進行がいくつかのコースに分かれているときに、シドたちがどのコースを選んで通過してきたのかを確認するための記号です。

例えば**1をチェック**という項目に出会ったら、チェックシートの行動記号のページの1の箇所に、チェックを入れてください。さらに先へ進むとき、今度は**1にチェックがあれば**、という表記に出会うことがあります。このときはその指示に従って進んでください。

行動記号の表には、周囲にアルファベットが並べられています。ゲームのある段階までくると、その中の何文字かを線で結ぶようにという指示が出てきます。そして、その線で囲まれた図形が浮かびあがってくるはずです。どんな図形が現れるのか、楽しみにしていてください。

ただし、その図形の中にどんなチェックがしてあるかが、その後のゲーム展開を握る鍵となります。このことを忘れずに。

ゲームの進め方

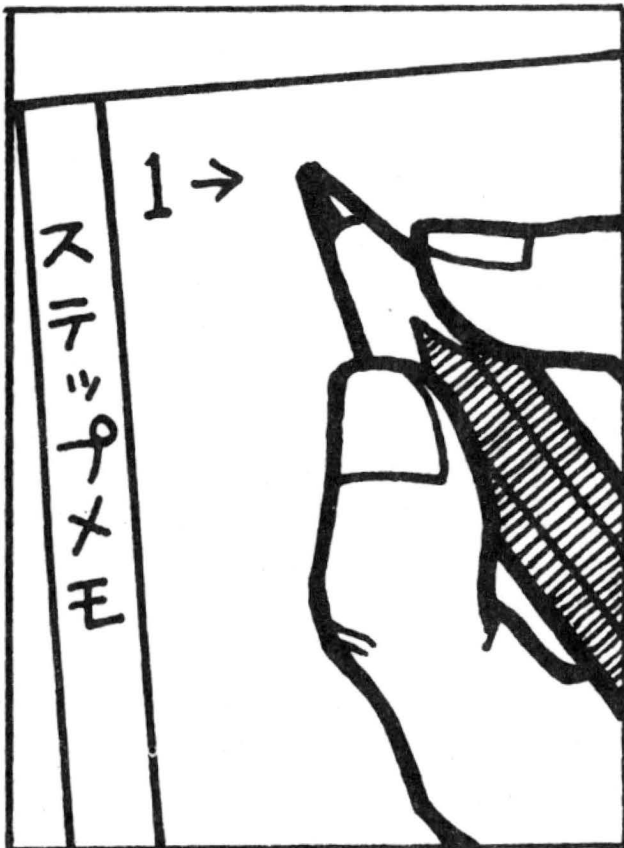
4・守護カード

　このゲームブックを読み進んでいくと、途中で何度か「**守護カードをめくれ**」という文章に出会うはずです。本文中の各見開きページの右上にあるのが守護カードです。目をつぶってパラパラとページをめくってください。適当なところでページを開き、右上の守護カードを見るのです。守護カードには5つの種類があります。ムチ、オノ、バイブル、ロザリオ、コウモリです。この中で、どのカードが有利、不利に働くのかは、そのカードをひくキャラクターによって違います。例えばロウにとって有利なカードが、ローラには最悪のカードだったりするわけです。カードの種類によって、有利、不利の序列があると考えないほうが身のためでしょう。

　また、同じカードをひいても、行動記号のチェックがどこにあるかで、さらに運命が変わってきます。これを無視するとゲームが成り立たなくなってしまいます。すべては与えられた運だけが頼りだと覚悟を決めて、地道にアイテムポイントを上げていきましょう。

5・ステップメモのチェック

このゲームブックは番号1の文章から読み始めていきます。そのあとは文末の指示に従ったり、選択肢の中から選んだりして進路を決定していくのです。しかし、途中でこの本を読むのを中断したり、何かのひょうしに今の番号がわからなくなってしまったりするかもしれません。そんな困った事態が起きたときのために、必ずステップメモをチェックしておきましょう。

チェックシートのステップメモ欄にそれまで進んだ番号を、そのつど記入していってください。これで万が一、ページを閉じて途中がわからなくなっても、どの番号まで進んできたかがわかり、すぐに続きから始めることができるというわけです。また、ステップメモをきちんと記入していれば、番号を逆にたどって適当なところからやり直すことができます。このゲームは、エンディングが1つではありませんから、これを利用してぜひ再トライしてみてください。めんどうくさがらずにね。

悪魔城伝説

真正バンパイヤハンター

1

ぼくたちは一様にこわばっていた。廃墟の村の打ち捨てられたままの人骨が次々に青白い光を帯びて立ちあがる。その不格好で奇怪な踊りを、ぼくたちはむしろ呆然と眺めていた。とっさに何をすべきか忘れていたのだ。あるいは邪気に金縛りを受けたのか…。

まっさきに行動を起こしたのはレイラだ。といっても彼女は自分のロザリオをかかげ、「退散！」と、ひとこと叫んだだけだったが。それでもぼくたちを正気づかせる効果は充分にあった。青白い光がすうっと闇に溶けた。すると骸骨どもはみんなへなへなと崩れおちてしまったのだ（**ロザリオ…1ポイント**）。

「邪気を払う力があるというのは本当らしいわ」

奇妙な形のロザリオについて彼女は言った。

「そのようですね…」と、ズークが片頰をひきつらせながらうなずいた。「しかし効果は一時的なもののようだ」

骸骨どもはふたたび邪のオーラを放ちはじめた。

●**戦って突破する……⇩62へ**　●**レイラのロザリオの力で突破する……⇩471へ**

2

ズークが呪文をとなえ、十字架を冒瀆するデーモンに向かってロッドをまっすぐに突き

だした。輝きは十字架もろともデーモンをとらえた。が……。

「おお…」

ズークははっきりと身を震わせた。彼の放った輝きは邪悪の気に触れ、恐ろしい結果をもたらしたのだ。十字架の一端が燃えあがった（**15をチェック**）。

（次にだれが？）

●レイラ……⇩270へ　●シド………⇩162へ　●ロウ…………⇩81へ

3

オノが飛び、デーモンを直撃…！

●14にチェックがあれば……⇩114へ　●14にチェックがなければ…⇩272へ

4

森へ入るとすぐに時計台が見えてきた。川のほとりに立っている。向こう岸のほうが高い崖になっているため、こちら側の時計台を一方の橋脚にして橋がかけられている。つまり、川を越えるには時計台にのぼらなければならない。

⇩70へ

5

森にはとくべつな邪気がある、と思う。邪気に触れてよみがえる屍も、魂を冒す地獄の使者もあらわれないが、不気味な静寂の裏側にはたしかになにかがひそんでいる。時がたつにつれ、ますますその存在を感じるのだ。邪悪の主はなりゆきを見まもっている…やつはいったい…。心のなかにひっかかっているものの輪郭がときどき浮かびあがりかけるのだが、それを凝視しようとすると、たちまち濃いもやがかかってしまう。そしてそれ以上考えられなくなるのは……腐った樹木の放つ毒気のせいなのかもしれない…。

レイラが不意に足を止めた。

「そう、そうだったわ…」

迷路のような疑念にとりつかれていたぼくは、逆に彼女が驚くほどぎょっとした。

「ねえ」レイラはまじまじとぼくの顔を見つめた。「城には入口がないのよ。聞いたことはない？　すべて内側から塞がれているって」

ぼくは首を振った。

「なぜこのことを忘れていたのかしら」

レイラは眉をひそめた。

「じゃあ城へはどうやって…」

「だから地下通路よ」

ぼくがそれを思いだせないのをなじるような口調だ。地図をひったくる。「遺跡…大昔の都市の遺跡。ここに地下通路の入口があるはずだわ」

「そう。たしかここ…」城の東側、湖上に浮かぶ島のような場所を指す。

●城へ ……………………………⇩84へ　●遺跡へ ……………………………⇩67へ

6

廃墟の村を出て墓地にさしかかる。いやなあたりだ。たちの悪い山犬が掘り返しでもしたのか、いたるところ穴ぼこだらけ。木の十字架は朽ち果て、ほとんどの墓石がぶざまに地面から露出している。闇に紛れてすぐにはわからなかったが、朽ちた木の枝をカラスの一群が占拠していた。妙に静まりかえっているのが不気味だ。

「いやなやつらだな…」

みんなじっとこちらを見ている。

「追っぱらおうぜ」

●レイラのロザリオで ……………⇩85へ　●それぞれの武器で ……………⇩102へ

7

だれよりも先にロウがひらりと飛びあがった。

●10にチェックがあれば……⇩277へ　●10にチェックがなければ……⇩86へ

8

「ふふーん」
ロウが目を光らせた。あらわになった台座の蓋に鍵穴を見つけたのだ。教会の壁にあったしかけを思いだす。だが鍵穴はひとつだけ…。
「おれのじゃねえな」
さっそく自分のロザリオを試してみて首を振る。ぼくのものでもない。レイラのも違う。ズークがロッドの頭についている十字架を差し込むと、かちりと音がした。蓋が開く。
「これは…」
ズークがなにかを取り出しかけたとき、あたりが不穏にざわめいた。木々のあいだから真っ黒い雲がわきあがった……まるでそう見えた。コウモリだった。おびただしい数のコウモリの群れ。あっというまにぼくたちはそのなかに巻きこまれた。めちゃくちゃにぶつかってくる。レイラが叫んでいたが、いっこうに効果はないようだった。あるいは相手があとからあとからわきだしてくるのか。
「ちきしょう、なんなんだ、こいつらは…」
わめき、腕をふりまわし、跳ねまわった。が、一瞬、それを忘れた。ふと目に入ったズ

ークの姿。どうしたことか、彼は群がり寄る小さな悪魔どもを追いはらおうともせず、じっとたたずんでいた。なにか手にしたまま。まるで…まるで魂が抜けたように。
「ロウ！」ぼくはムチをふりまわしながら叫んだ「ズークが…！」
駆け寄ろうとすると、コウモリどもの体当たりはいっそう激しくなった。

●ムチのポイントが8以上なら……⇩121へ
●7以下なら……⇩183へ

9

じめじめした船倉だ。
「シド！」「大丈夫か!?　いま行くぞ」
上からレイラとロウがのぞきこむ。
「大丈夫だ。こっちから階段を見つけてあがる。両方でうろうろしてないほうがいい」
そう答えたあと、ふとあたりを見まわした。骸骨が転がっている。どれも剣を手にしたままだ。戦いのあげく相果てたのか。それらが青白い光を帯びてきた。ちらりと上を見るとレイラたちの頭は消えている。足もとの危うい甲板のその場所を避けたのだろう。
「ま、いいさ」
5、6体だ。ひとりでもどうにかなる。

●33にチェックがあれば……⇩410へ
●33にチェックがなければ…⇩141へ

10

「退散……ああっ！」
レイラのロザリオは効かない。邪気のうねりがひときわ高まった（**61をチェック**）。

（次に挑んだのは？）

●シド ……………………⇩**106へ**　**●ロウ** ……………………⇩**435へ**

11

邪悪の気に呼び覚まされた骨龍。首のひとつが自由になったことで、オベリスクの崩壊はいっそう勢いづいた。だが陥没口のこちら側からではムチは届かない。ロッドをかまえ、素早く呪文を口にする……。

（守護カードをめくれ）

●バイブル ……………………⇩**372へ**　**●コウモリ** ……………………⇩**74へ**

●ムチ、オノ、ロザリオ

バイブルのポイントが16以上なら ………⇩**372へ**　**15以下なら** ………⇩**74へ**

12

それはコウモリの影だ。まったくばかげた大きさの。実体は見あたらないが…。

（28と33について）
●28と33の両方にチェックがある　⇩265へ　●28にだけチェックがある　⇩57へ
●33にだけチェックがある　⇩187へ　●28にも33にもチェックがない　⇩236へ

13

（さらに…）
●44にチェックがあれば……………………⇩400へ
●44にチェックがなければ…………………⇩188へ

14

あるいは罠かもしれない。だがほかにどうすべきだろうか。本館につながる橋は壊れている。もどるしかないのだ。もう一方の通路が北側の塔へ通じているに違いない。ここに聖十字があったということは、向こうにはおそらく灰…。マントは北側の塔へ飛んでいった。すべてはそこではじまりそこで終わるはずだ。ぼくは聖十字をにぎりしめた。

⇩77へ

15

青白い頭蓋が砕け、肋骨が飛び散った。それぞれバンパイアハンターのご先祖様から受け継いだ魔物封じの武器は確実に効果を発揮した。骸骨どもはみるまにばらばらの骨片と化し、やがてそれも茶色い塵芥となってたち消える。ほどなく一掃（**ムチ…1ポイント、オノ上下…1ポイント、バイブル上下…2ポイント**）。

「けっこうな出迎えだ」

あたりに目を配りながら広場を抜ける。

⇩30へ

16

「くそっ」

ぼくはすぐさまムチを操り出した。が、なんということだ。邪悪の気に触れたムチは生きもののように反転し、ぼくの体に巻きついたのだ。同時に十字架の別の一端が燃えあがっていた（**1をチェック**）。

（次にだれが？）

●レイラ……………⇩270へ　**●ズーク**……………⇩176へ

17

「だれかもういちど試してみて」レイラが叫んだ。「早く！　このロザリオの効果は長くない…シド！　ズーク！」

●シド……⇩82へ　●ズーク……⇩365へ

18

動きはじめた器械のあいだをくぐり抜け、どうにか時計台のてっぺんにたどりつく。四方は大きく開き、テラスの一方がそのまま橋に続いている。中央の吹抜けにぼくたちをうならせた鐘がぶらさがっている。それを固定している支柱の台座には凝った彫像が埋められていた。凝ってはいるが不気味だ。髪の毛が蛇という恐ろしい形相の女の首。メデューサだ。それを横目で見ていると、支柱がきしんだ。なにを意味するのかすぐにわかった。

「まずい！　また鐘が…」

そのあとは叫んでも聞こえやしなかった。鐘がふたたび狂った時を告げたのだ。ぼくは片方の手で耳を押さえながら橋のほうを指さした。とにかくここから逃げ出すことだ。

テラスのほうに走りだしたとき、頭の上をなにかがかすめた。とっさに首をすくめ、足もとに転がったものから飛びのいた。

メデューサの首だ。ぼくたちははっと振り向く。鐘は唐突にやんだ。

●24にチェックがあれば……⇩243へ　●24にチェックがなければ……⇩210へ

19

しばらくすると森のようすが変わった。地面はぬかるみ、根もとから腐って倒れた樹木が多くなる。道は見分けがつかなくなった。足の下からじわじわと水がしみだしてくる。小さな溜りや倒木を避けているうちによけいひどい場所に踏みこんだらしく、ふと気がつけばたっぷりと膝まで軟泥に埋もれている。たちが悪い。へたにもがくとさらに沈んでしまう。まわりではいくつもの泥の泡がゆっくりとはじけている。泡のひとつが大きく盛りあがる。が、それははじけないままむくむくと膨れあがり…泥のかたまりが立ちあがる！

（28と33について）
●28と33の両方にチェックがある⇩304へ　●28にだけチェックがある⇩101へ
●33にだけチェックがある　⇩165へ　●28にも33にもチェックがない　⇩117へ

20

ズークのロッドから輝きが走った。地中から突きだした腐った腕が、みるまにどろどろと溶け崩れる（バイブル上下…1ポイント）　⇩244へ

21

やにわにスカルナイトは剣をふりあげた。ロウは難なくそれをかわした…が、その剣は邪悪の力を帯びていた。どす黒い血しぶきがほとばしった。焼けた硫黄でも浴びたように叫びながらのたうちまわるロウ（**10をチェック**）。ぼくとズークは呆然となった。

「怯まないで！」レイラが叫ぶ。「追いつめている…もう少しで邪気を断ちきれるわ！」

（ここで攻撃を受け継いだのは？）

●シド ……………………⇩306へ　●ズーク ……………………⇩353へ

22

ズークはロッドの頭につけていた十字架を台座の鍵穴にさしこんだ。彼がなにか手にして立ちあがったとき、コウモリどもはいっせいに彼のまわりに群がり寄った。ぼくはその小さな悪魔どもを追い散らそうとムチをふりまわした。

●ムチのポイントが8以上なら ………⇩354へ　●7以下なら ………⇩140へ

23

大きく飛びあがると同時にオノをひと振り、まず曲刀をふりかざしたやつの頭蓋骨を粉砕…一体め！　続いて長剣をかつぎあげたやつの肋骨を解体…二体め！　ふりむきざま

にダガーをかわし、背骨を砕いて三体め！　残る一体、グラディウスをふりまわしながらじりじり後退。もういちど飛んで…頭蓋を粉々！（**26にチェックがあれば、オノ上…2ポイント**）
⇩491へ

24

ロッドを手に、ぼくは操舵室へ飛びこんだ。

●**61にチェックがあれば**……⇩73へ
●**61にチェックがなければ**……⇩279へ

25

（**手にした武器は？**）

●**ムチ**……⇩264へ　●**オノ**……⇩171へ

26

ぼくのまわりを飛び交っていたコウモリの影がさっと離れた。一ヵ所にひしめきあい、もとの大コウモリにもどりかけている。あるいはここで一撃をくらわせば…。

●**ムチで**……⇩384へ　●**魔法で**……⇩41へ

●オノで……………………………………………………………………………………⇩126へ

27

やけに湿っぽい地下の通路。ぼくの息遣いと足音だけがかすかに響く…。

⇩360へ

28

螺旋階段を降りて通路をもどる。分かれ道からふたたびもう一方の通路へ。

⇩110へ

29

ズークは腕を突きだした。邪悪のオーラがゆらめき流れ、触手のように伸びてきた。それがロッドからほとばしる輝きとぶつかり、混じりあった。とたんに金縛り。オーラの触手はじりじりと輝きを侵食し、ついにロッドに到達した…。瞬間、ロッドはズークの手に移っていた。ズークがふたたび逆さの呪文。邪悪のオーラはムチのかたちをとってぼくをとらえた。動けない(**43と71をチェック**)。さらにロウがいびつに首をねじ曲げ、にじり寄る。腕をふりあげる。燃え立つオーラがそこにオノの形をつくりだした…。

⇩44へ

30

雲間から月が顔を出した。蒼い光が尖塔を照らしだす。
「あれは…」
ぼくたちはそこから先を言わずにうなずきあった。だれもが同じ夢のなかの光景を思い返す。雷鳴とともに崩れ落ちた教会…。だがいま目にしている建物は、古びてはいるが、廃墟の村のなかにあってかろうじてまともな姿を保っている。そのアーチ型の門へ続く石畳をすい寄せられるように進んでいると、いやなうなり声が闇の奥からわきだした。いきなり目の前をよぎる奇怪な影。

(守護カードをめくれ)

●ムチ ……⇩240へ　●オノ ……⇩208へ　●バイブル……⇩131へ

●ロザリオ ……………⇩175へ　●コウモリ ……………⇩224へ

31

「悪魔め！」
ロウが叫びながら跳びあがった。オノがその手を離れ、十字架を冒瀆するデーモンに向かって飛んでいった。が、オノは見えない壁にはじき返された。もしロウが抜群の身軽さを備えていなければ、みずからの道具でまっぷたつに断ち割られていたはずだ。

30〜31

●30蒼い光が尖塔を照らし出す。だれもが見た同じ夢の中の光景。雷鳴とともに崩れ落ちた教会…。

十字架の一端が燃えあがった（**14をチェック**）。

（次にだれが？）

●レイラ……⇩270へ　●シド……⇩16へ　●ズーク……⇩113へ

32

「だれかもういちどためしてみて」レイラが叫んだ。「早く！　このロザリオの効果は長くない…シド！　ロウ！」

●シド……⇩82へ　●ロウ……⇩181へ

33

（コウモリどもを追い払うために手にしたのは…）

●ムチ……⇩391へ　●バイブル……⇩66へ

34

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

「あそこにも！」

続いていくつか立ちあがる。
「いったい、こいつらは…」
なんだか知らないが、あらわれるたびにオノをみまもっていると、やがて鳴りをひそめた（**26にチェックがあれば、オノ上…2ポイント**）。
●68にチェックがあれば ……⇩379へ ●68にチェックがなければ …⇩458へ

35

腐った腕がいくつもあらわれ、ぼくたちの足をつかんだ（**7をチェック**）。
「…退散！」
レイラが叫ぶ。腕はずるずるとすべり落ちた（**ロザリオ…1ポイント**）。 **⇩244へ**

36

輝きは血まみれの騎士を包みこんだ。が、じりじりと黒ずんでいく。そのなかでスカルナイトの姿がまたひとまわり大きくなった（**22をチェック**）。 **⇩512へ**

37

ズークのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとロウは相当数叩き落としたはずだ。が、

相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ズークの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群はいっせいに舞いあがった。ズークを取りこんだまま…。ぼくたちは呆然とするばかりだ。足の踏み場もないほどの骸骨のなかから、ズークのバイブルとロッドを拾いあげた

（35をチェック…以後シド自身が魔法を使うことができます）。

⇩104へ

38

輝きがほとばしる。まず曲刀をふりかざしたやつをとらえて一瞬のうちにばらばらに！　続いて長剣をかつぎあげたやつ！　レイピアを突きだしてきたやつにも素早くロッドをふりむける…三体め！**（35にチェックがあれば、バイブル上…1ポイント）**

ところが、横あいから突きだされたダガーをかわしそこねて転倒。そこへ別の一体がグラディウスをふりおろした。苦痛に息がつまる…！　しかし、目をあけたときには胸をえぐったはずの短剣はない。骸骨剣士の姿もまた…**（39をチェック）**。

⇩491へ

39

死神はさらにローブをひろいあげた。さあ、こちら側へ…さあ、邪悪の側へ…と。

ぼくたちは凍りついた。死神はますます懐から闇をひっぱりだす。いきなり、ひび割れ

た髑髏がぼくたちの上をかすめ飛んだ。おそらくはほとんど一瞬のうちに、闇は通り過ぎたのだと思う。残ったのは戦慄すべき笑い声の余韻（**67をチェック**）。
しかしぼくたちは打ちのめされている暇もなかった…。

⇩338へ

40

ぼくの足は蛇のかたまりで膨れあがった。鋭い痛み。思わずわめく（**46をチェック**）。
「退散！」
レイラの叫びでずるずると滑り落ちる（**ロザリオ…1ポイント**）。そのすきにメデューサの像に向かってロッドをかまえ、呪文をとなえた…。

⇩186へ

41

まだ大コウモリの形にもどりきらず、ひとかたまりでもやもやうごめいている黒い影にロッドを向けて素早く呪文…！
（守護カードをめくれ）

●バイブル……⇩220へ　**●ロザリオ**……⇩172へ

●ムチ、オノで
バイブルのポイントが16以上なら……⇩220へ　**15以下なら**……⇩172へ

●コウモリ……………⇩251へ

42

はっと気づいたときには龍の姿はなかった。そして…ロッドも手のなかから消えている！　崩れた壁の向こう側は、かすかに水音の響く虚ろな闇だ。が、まだあの赤い目に見つめられているような気がしてならない。その感じはずっと尾をひいた（**43をチェック**）。

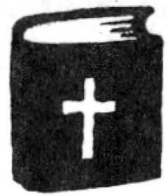
⇩298へ

43

外では雷が荒れ狂っていた。階段をのぼるにつれて、雷鳴は容赦なく腹の底をかきまわした。

テラスに出たとたん、閃光が目の前を切り裂いた。あまりに大きすぎる轟音は体を貫く激しい衝撃だ。南側の塔が崩れ落ちていた。またあの夢を見ているのだと思った。夢のなかでそうしたのと同じように、ゆっくりとテラスをめぐり、部屋の入口をさがしあてた。断続的な閃光が部屋のなかを照らしだす。が、それを確かめるまでもなく、ぼくは知っていた。そこにあるのは巨大な棺——。

42〜43

はっと正気づいた。ばかでかい棺桶は確かにあった。が、そのまわりにたたずむ3つの人影。ロウ。ズーク。レイラ。それぞれ小さな箱を手にした彼らの目は、虚ろであると同時に、不気味な光をたたえていた。
「やって来たのね」
おそらくこれほどぞっとするものはない。レイラの声はまるで人間味を欠いていた。
「さあ…あけて…あなたの鍵で棺の蓋を…あけるのよ…灰をひとつにしなくては…」
4つめの灰はあの棺のなかなのだ!!
「なにを…しているの…早くあけ…なさい…早く…さあ…」
突如、レイラの声は別のものに変わった。
「灰を! わたしの灰をひとつに!」
棺のまわりになにかが燃えたった。決して目には映らないものだ。それは陽炎のようにゆらめいて、レイラを、ロウを、ズークを包みこんだ。彼らの姿は奇妙にゆがんだ。
「そう、血だ! 血を捧げろ! バンパイアハンターども! おまえの血をそそげ、シド・ベルモント! わたしの灰と混ぜるのだ。あらたな肉体と力がよみがえるぞ! さあ、祝福するがいい!」
レイラの唇は悪魔のものだった。ロウもズークも…彼らは手にしていた箱を棺の上にことりと置いた。そのおぞましい影を目にしたときぼくは悟った。戦わねばならない。たと

え仲間であろうと。いや、彼らはいまや邪悪な一部だ。彼らの魂を救うためにも！
ぼくはムチを握りしめた。　⇩148へ

44

邪悪のオノをふりかざすロウ。それを受けとめるのは真正バンパイアハンターのオノ！

（オノのポイントについて…）

●オノ上のポイントがオノ下のポイントより2以上大きい　……⇩483へ

●オノ上のポイントとオノ下のポイントの差が1以内……⇩496へ

45

たて続けにムチをふるい、確実に5、6匹は倒した（**ムチ…2ポイント**）。ロウが奇声をあげている。

（守護カードをめくれ）

●オノ　……⇩269へ　●コウモリ　……⇩377へ

●ムチ、バイブル、ロザリオ

5にチェックがあれば　……⇩377へ　5にチェックがなければ　……⇩426へ

46

「一時的に封じ込めたわ！」

レイラは叫んだ。白い輝きの輪がデーモンを囲いこんでいる（**ロザリオ…1ポイント**）。

「いまのうちに…」

（まずだれが攻撃を？）

●シド……⇩500へ　●ロウ……⇩3へ　●ズーク……⇩98へ

47

「な…」

ぼくは思わず呪いの声をあげた。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、ムチはデーモンに効かないばかりか、さらに恐ろしい結果をも生じた。十字架の一端が燃えあがったのだ（**1をチェック**）。

⇩318へ

48

嵐が去ったあとに似ていた。あらためて起きたできごとをかみしめる。あいついで仲間が消えた。大きな痛手だ。が、それ以外にもなにか心の底にひっかかるものが残った。それがなんなのか、どうしても探りだすことができないのだが…。レイラもやはり黙りこん

でいた。しかし、逃帰ってしまう気になっていないことだけは確かだ。バンパイアハンターの使命にはいささかのゆるぎもない。ぼくたちは時計台の橋を渡った。

⇩5へ

49

ロウがオノをかまえた瞬間、稲妻の閃光が教会を貫いた。

（3と14について）

●両方にチェックがあれば……………⇩179へ

●どちらかひとつ、または両方ともないなら……⇩115へ

50

ロウのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとズークは相当数やっつけたはずだ。が、相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ロウの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群れはいっせいに舞いあがった。ロウを取りこんだまま…。ぼくたちは呆然とするばかりだ。足の踏み場もないほどの残骸のなかから、ロウのオノとロザリオを拾いあげた（**26をチェック…以後シド自身がオノを使うことができます**）。

⇩303へ

49〜50

●50コウモリの群れはいっせいに舞いあがる。ロウを取りこんだまま…。ぼくたちは呆然とするばかりだ。

51

まずズークがロッドをふりかざす。輝きに貫かれたゾンビはどろどろの肉塊となってはじけ散る。ぼくも休みなくムチを浴びせる。腐った肉を引き裂き、次々になぎ倒す。ロウもまた一撃で脳みそを叩つぶす…。
ほどなく一体残らずかたづけた（**バイブル上下…2ポイント、ムチ…1ポイント、オノ上下…1ポイント**）。

⇩258へ

52

スカルトナイトは血溜まりのなかに膝をついた（**バイブル上下…2ポイント**）。さらに力を集中させるために、ズークは一歩踏み込んだ…。

⇩292へ

53

「…ったく、どこもかしこも陰気くせえぜ」
ちっ、とロウが吐き捨てた。たっぷりと妖気をはらんだ森。異様に肥大した根が地面をうねり腐った枝が絡みあって頭上をおおう。ときおり腐液がしたたり落ちる。全体が怪物の臓腑のようだ。魑魅魍魎どもがいつあらわれるのか。どんな些細な気配をも逃すまいと、ぼくたちは目を凝らし、耳をそばだてる。だが木立のあいだに響くのはぼくたちの用心深

い足音、押さえた息づかい…。森はひたすら静まりかえったまま。
やがて分かれ道に行きあたる。地図によれば、左側は泉へ行く道で、右側が森を抜ける本道らしい。

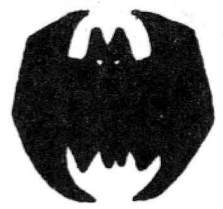
●泉へ寄る……⇩100へ　**●まっすぐ森を抜ける……⇩87へ**

54

〝イカダ〟は幽霊船の横腹にぴったりと寄せられたまま。ふりかえれば、湖岸は遠い。この招待を断ることはできないようだ。

●13と24の両方にチェックがある⇩248へ　**●24にだけチェックがある⇩105へ**
●13と24の両方ともチェックがない。……⇩308へ

55

操舵室だ。入口の前でロウが奇妙なしぐさをしていた。まるでそこに壁かなにかがあるように、宙を手さぐりしているのだ。
「入れねえんだ、どうしても」
脇にある小窓からのぞくと、何者かが舵を操っているのが見えた。黒いローブのようなものをまとった、背の高い何者か。ロウがどう罵ろうと、まったくふりむかない。

「湖上遊覧はおしまいみたいよ。親切にも送ってくれるらしいけど、いったいどこへ…」
レイラが唇の端をつりあげた。ぼくははじめて船が川をさかのぼっていることに気がついた。
やがて船は右岸に寄せられた。と、操舵室の扉がはじけるように開いた。ぼくたちはよろめく。操舵室のなかからうねり寄せる強い邪気（**37をチェック**）。
黒いローブ姿の舵手がゆっくりとふりむいた。
「…死神！」
たっぷりとした頭巾の奥で、ひび割れた髑髏が声のない笑いをたてている。

（まっさきに攻撃をしかけたのは？）

●シド ………⇩106へ　●ロウ ………⇩435へ　●レイラ ………⇩10へ

56

神殿の跡らしい。回廊か中庭を思わせる柱列が残っている。水没をのがれた石畳にもいたるところに大小の亀裂や陥没がある。その暗い穴から、折れた柱に混じって奇怪な彫像が半身をのぞかせている。だがぼくたちの注意をひきつけたのは、大きな陥没口のなかに傾いている一枚岩のオベリスク…。

⇩440へ

57

（さらに…）

●43にチェックがあれば……⇩265へ

●43にチェックがなければ…⇩312へ

58

黒い龍はじっとのぞきこんでいる。ぼくがそろそろと立ちあがり、オノをかまえるのを見ると、赤い目が陰湿なたくらみを秘めているように輝いた。最初の一撃を浴びせかけるのをためらったほどだ。それをあざ笑ったに違いない。ぐいと頭を突き入れた。壁はさらに崩れ、首が通路に這いこんだ。どうにかふんばり、オノをふりあげた…。

●54にチェックがあれば……⇩266へ

●54にチェックがなければ……⇩173へ

59

かすかなためらいの後、ぼくはついに聖十字を手にした。

その瞬間、沈黙は破れた。森がざわめいた。稲妻が走り、雷鳴がとどろいた。狂った笑い声のようなうなりをあげて風が吹きこんだ。影がひらめく。邪悪な主がそこによみがえったか？　風に舞いあがったマントはまさしくそう見えた。それは封印の部屋を抜け出し、

大コウモリさながらに飛びたった。城の本館を越え…ふたたび霊感がひらめいた…北側の塔だ！

●19にチェックがあれば　……⇩519へ
●19にチェックがなければ　……⇩14へ

60

やつが…ドラキュラが操れるのはいまやレイラだけだ。その凄まじい怒気を帯びたうねりがレイラの周囲に集中しつつあった。すでに邪悪のオーラによって歪んでいたレイラの姿はいっそうかき乱れ、そのなかに溶けてしまうのではないかと思えた。溶けて消えてしまったほうがまだよかった。異形の影の示すそのゆらめきのなかに、ふっと浮かびあがるレイラの目、唇、白い指…。

「ねえ…シド…鍵を」

悪魔はレイラの声をつかってみせる。愚劣にも甘ったるく、ささやくように、くすぐるように。ちくしょう、ぼくがためらうとでも!?　これは宿命の戦いだ！

だが腕はぶるぶる震えた…。

●ロザリオのポイントが6以上　…………⇩159へ
●ロザリオのポイントが5以下　…………⇩205へ

61

ズークは腕を突きだした。邪悪のオーラがゆらめき流れ、触手のように伸びてきた。それがロッドからほとばしる輝きとぶつかり、混じりあった。とたんに金縛り。オーラの触手はじりじりと輝きを侵食し、ついにロッドに到達した…。瞬間、ロッドはズークの手に移っていた。ズークがふたたび逆さの呪文。邪悪のオーラはムチのかたちをとってぼくをとらえた（**43と71をチェック**）。さらにロウがオノをぶらさげ、にじり寄る…。

⇩452へ

62

ロウは低く身がまえ、オノをにぎりしめる。ズークは口のなかで呪文をとなえている。骸骨どもの輪がじりじりと狭まるのを見据えながら、ぼくはムチをしごく。

「来やがれ、亡者ども」

闇にしなうムチを合図に、ロウのオノがひらめき、ズークのロッドからは炎とも光ともつかぬ輝きがほとばしった。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩191へ　●オノ……⇩161へ　●バイブル……⇩15へ
●ロザリオ……⇩112へ　●コウモリ……⇩80へ

63

「悪魔め！」
ぼくは叫びながらムチを繰り出した。が、なんということだ。邪悪の気に触れたムチは生きもののように反転し、ぼくの体に巻きついたのだ。同時に十字架の一端が燃えあがった**（1をチェック）**。

（次にだれが？）

●レイラ……⇩270へ　●ロウ……⇩97へ　●ズーク……⇩132へ

64

輝きはたちまち消滅した。ズークはこんどはうめき声さえあげず、ただ蒼白になった。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、彼の白い魔法の力はまたも十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ**（16をチェック）**。

（14と15について）

●両方にチェックがある　⇩257へ　●どちらかひとつ、または両方ない　⇩32へ

65

呪文が呼んだかのように、ふたたび閃光。それはデーモンを直撃した**（バイブル上下…**

4ポイント)。 ⇩415へ

66

ロウは自分のロザリオを鍵穴にさしこんだ。彼がなにか手にして立ちあがったとき、コウモリどもはいっせいに彼のまわりに群がり寄った。ぼくはその小さな悪魔どもを追い散らそうとロッドをふりかざし、呪文をとなえた…。

●バイブルのポイントが8以上なら……⇩164へ
●7以下なら……⇩227へ

67

途中のわき道へは入らず城へ向かう本道を進む。しばらくすると樹木のあいだを霧が埋めはじめる…(68をチェック)。 ⇩19へ

68

邪悪のオノを手にしたロウが飛びあがる。ぼくは正面で受けとめる。邪悪のオノは形を失った。そのまま切り裂く。ロウは…いや、ロウを包むゆらめくものが醜くもがいた。それが消えたとたん、ロウは倒れた。

⇩267へ

69

だれよりも先にズークのロッドから輝きが走った。

●21にチェックがあれば……⇩475へ　●21にチェックがなければ…⇩120へ

70

時計台に入る。大小の歯車やおもりのついた鎖…器械類はすべて錆びつき、時は止まったまま。そのすきをぬうように螺旋階段がある。傷みがひどい。そろそろとのぼっていく。案の定、レイラが足をふみはずしかけ、小さな悲鳴をあげた。よろけた拍子にそばにあったレバーにつかまった。そしてもういちどあっと声をだした。レバーが大きく傾いたのだ。ごっとん…と重い音が響き渡った。ぼくたちははっとした。ぎし、ぎし、ぎし…とどこかで鳴っている。ロウが跳びあがる。彼の足はあやうく食いちぎられるところだった。鋸歯状の大きな歯車のペアが回転をはじめたのだ。それがいくつも組み合わされた歯車から歯車へと伝わっていく。鎖が巻きあげられる。振子が揺れる。

いきなり鐘が鳴り渡った。

「うわ…」

そのあまりの凄まじさにぼくたちは頭を抱こんだ。がーんと頭を殴られたようだ。いくつかたて続けに鳴り、ようやくやんだ。

「…ちっ、縁起でもねえ」ロウがしかめ面をあげた。「13鳴りやがったぜ」（13をチェック）

⇩18へ

71

ズークのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとロウは相当数叩き落としたはずだ。が、相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ズークの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群はいっせいに舞いあがった。ズークを取りこんだまま…。ぼくたちは呆然とするばかりだ。足の踏み場もないほどの残骸のなかから、ズークのロッドを拾いあげた。（34をチェック…以後シド自身が魔法を使うことができます）。

⇩104へ

72

（シドの手にした武器は…？）

●ムチ……………⇩410へ　●オノ……………⇩395へ

73

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神

の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ぼくはロッドを立てたまま自分の正面にかまえた。その頭にある小さな十字架を死神とのあいだにおくことで、自分を奮いたたせたのだ。呪文をとなえる…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル

40か53の一方、または両方にチェックがある **⇩170へ**

40にも53にもチェックはない **⇩396へ**

●ムチ、オノ

40か53の一方、または両方にチェックがある **⇩217へ**

40にも53にもチェックはない **⇩170へ**

●ロザリオ、コウモリ…………………… **⇩217へ**

74

輝きが化石龍の頭骸を襲う前に、もういっぽうの首が抜け出した。その咆哮を思わせる地鳴り。水しぶき。双頭の骨龍が躍り出た。巨大な骨格がのびあがる。だがたちまち陥没口から水中へ。それとともに起きたあらたな亀裂と陥没。ぼくたちは逃れるのがせいいっぱいだった（**54をチェック**）。 **⇩330へ**

75

黒い影がはじけ、一瞬にしてぱっと消えた。(**26にチェックがあれば、オノ…3ポイント**)。

●18にチェックがあれば……⇩329へ

●18にチェックがなければ……⇩341へ

76

やがて首は完全に通路から退いた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。虚空にロッドを突き出し、強引に力を浴びせかけた。

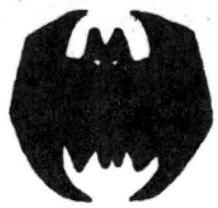
赤い輝きが闇に沈んだ(**35にチェックがあれば、バイブル上…3ポイント**)。

⇩467へ

77

螺旋階段を降りて通路をもどる。分かれ道のところでふと階段を見あげると、入口が閉じてしまっているのがわかった。しかしどうだっていい。逃げ出すつもりはありゃしない。

すぐにもう一方の通路へ。

⇩451へ

78

ためらうな。相手はズークじゃない。異形の化物だ。ムチを…くそっ、脚をぎゅうぎゅう締めつけやがる！

●44にチェックがあれば ……⇩255へ
●44にチェックがなければ …⇩207へ

79

ムチをかまえたとたん異様な感じがした。はっとして見つめる。重い…。なぜだ!? どんどん重さを増してくる。ぴくりともしない。腕がぶるぶると震えはじめる。投げ捨てようにも手に吸いついたように離れないのだ。ぼくはムチをふりあげたまま膝をついた…。

⇩492へ

80

ムチは空をきった。

「くそったれ！」

ロウがわめいた。彼もまた空振りしたのだ。こっちが踏み込むと、骸骨どもは意外に素早く退いた。ズークも眉を寄せる。ロッドからほとばしる輝きが途中でふっとたち消えたのだ。と、いきなり、骸骨どもを包んでいた青白い光が膨れあがった。見えない波に打ち

倒されたぼくたちの上に、ばらばらになった無数の骨がふりそそぐ。それがやむまでだれも起きあがれなかった。
「邪気を解放してしまったわ」
レイラが呟く。やがてそろそろと広場を抜ける（**4をチェック**）。

⇩30へ

81

「このやろう！」
ロウが叫びながら跳びあがった。オノがその手を離れ、デーモンに向かって飛んでいった。が、見えない壁にはじき返された。もしロウが抜群の身軽さを備えていなければ、みずからの道具でまっぷたつに断ち割られていたはずだ。
さらに十字架の別の一端が燃えあがった（**14をチェック**）。
（次にだれが？）

●レイラ……⇩270へ　●シド……⇩225へ

82

鋭いうなりをあげたムチがデーモンの上に炸裂……！

●1にチェックがあれば……⇩242へ　●1にチェックがなければ……⇩163へ

83

川沿いに進もうとして時計台の裏にまわったぼくたちは、小舟を見つけた。
「どうにかいけるだろう」ぼくはあちこち調べて言った。「向こう岸へ渡るぐらいは」
ふたりが乗り込むと、ぼくはそっと岸を押した。そっと、だ。しかしいやな音がして櫂が折れた。
「わたしたちは呪われているのでしょうかね」
ズークが自嘲ぎみに頬をひきつらせた。川面にはもやがたちはじめた。ぼくたちの乗った小舟は流れのままに下っていく。だれもが思っていることをレイラが口にした。
「偶然とは思えない」
やがて橋が見えてきた。しかしどうしようもない。
「このままだと湖へ流されてしまう」
だが橋を過ぎてまもなく、小舟はすいよせられるように左岸へ着いた。飛び降りる。

⇩194へ

84

途中のわき道へ入る。

⇩19へ

85

「退散！」

レイラがロザリオをかかげると、カラスどもはいっせいに翼をひろげた。ギャア、ギャア、ギャア…といやな声でわめきながら、しかし次々に飛び立って森のほうへ**（ロザリオ…1ポイント）**。

⇩150へ

86

オノの一撃は血まみれの騎士をぐらりとゆるがせた。さらに一撃、一撃…どんな反撃の隙も与えまいと、ロウはたて続けにオノをふりまわす。

（守護カードをめくれ）

●オノ……⇩461へ　**●コウモリ……⇩21へ**

●ムチ、バイブル、ロザリオでオノのポイントが…

7以上なら……⇩461へ　**6以下なら……⇩21へ**

87

しばらく進むと川のほとりに出た。丸木を組んだ橋がある。危なっかしげなところは少しもないように見えた。なかばまで渡ったとき、急に川面からもやがわきあがってきた。

足もとをすっかりおおい隠してしまう。思わず立ちどまり、身がまえた。だが続いて起きたことはまったく予想外だった。体がかすかに浮きあがったような気がしたと思ったら、そのまますうっと落下した。振り落とされたのではない。しずしずと橋ごと降下したのだ。そしてイカダさながらに、もやのたつ川面を滑りはじめた。

「これは…」

巧みに櫂をあやつるものがいるかのようだ。見通しの悪い川を波ひとつ立てずに下っていく。ぼくたちはなりゆきを見まもる以外にましな方法を思いつけないでいた（36をチェック）。

⇩230へ

88

じめじめした船倉だ。

「シド！」「大丈夫か!?」「いま行くぞ」

上から仲間の声と顔。

「大丈夫だ。こっちから階段を見つけてあがる。両方でうろうろしないほうがいい」

そう答えたあと、ふとあたりを見まわした。骸骨が転がっている。どれも剣を手にしたままだ。戦いのあげく相果てたのか。それらが青白い光を帯びてきた。ちらりと上を見ると仲間の頭は消えている。足もとの危うい甲板のその場所を避けたのだろう。

「ま、いいさ」
5、6体だ。ひとりでもどうにかなる。 ⇩410へ

89

「渡し守なら地獄でやれよ」
ぼくは死神を見据えて言った。

（28と33について）

●28と33の両方にチェックがある ⇩421へ ●28にだけチェックがある ⇩124へ

●33にだけチェックがある ⇩382へ ●28にも33にもチェックがない ⇩436へ

90

●オノを投げる ⇩383へ ●魔法を使う ⇩40へ ●このままムチで ⇩156へ

91

ぼくのまわりを飛びかっていたコウモリの影がさっと離れた。一か所にひしめきあい、もとの大コウモリにもどりかけている。あるいはここで一撃をくらわせば…。

●ムチで……⇩384へ ●オノで……⇩126へ

92

（手にした武器は？）

●ムチ…………………………⇩400へ

●ロッド………………………⇩127へ

●オノ…………………………⇩58へ

93

扉を開けると、土砂崩れかなにかのように、無数のコウモリどもが飛びだしてきた。だがぼくは驚きもたじろぎもしなかった。無造作にはらいのけ、次に起こることを見きわめようと突き進んだ。向こう側の塔のときと同じように、螺旋の階段がずっと上まで続いていたのだ。

⇩43へ

94

ズークのロッドだ。いまや化け物同様の姿をした彼に向かって突きだし、呪文をとなえる…と、ズークはそれを逆さにとなえはじめた。

（バイブルの上と下のポイントについて…）

●上のほうが下より2ポイント以上大きい……⇩189へ

●上と下の差が1ポイント以下……………⇩29へ

95

邪悪のオノをふりかざしたロウに向かってロッドを突きだし、呪文を放つ…。

(バイブルとオノのポイントについて…)

●バイブル上のポイントがオノ下のポイントより大きい…………⇩401へ
●バイブル上のポイントがオノ下のポイントより小さい、または同じ…………⇩206へ

96

ズークは蒼白になった。彼の白い魔法の力はさらに十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ(**16をチェック**)。レイラのロザリオによる白い輝きの輪が揺らいでいる…。

⇩470へ

97

「このやろう!」
ロウが叫びながら跳びあがった。オノがその手を離れ、十字架を冒瀆するデーモンに向かって飛んでいった。が、オノは見えない壁にはじき返された。もしロウが抜群の身軽さ

を備えていなければ、みずからの道具でまっぷたつに断ち割られていたはずだ。
さらに十字架の別の一端が燃えあがった（**14をチェック**）。
（次にだれが？）
●レイラ……………………⇩270へ　●ズーク……………………⇩176へ

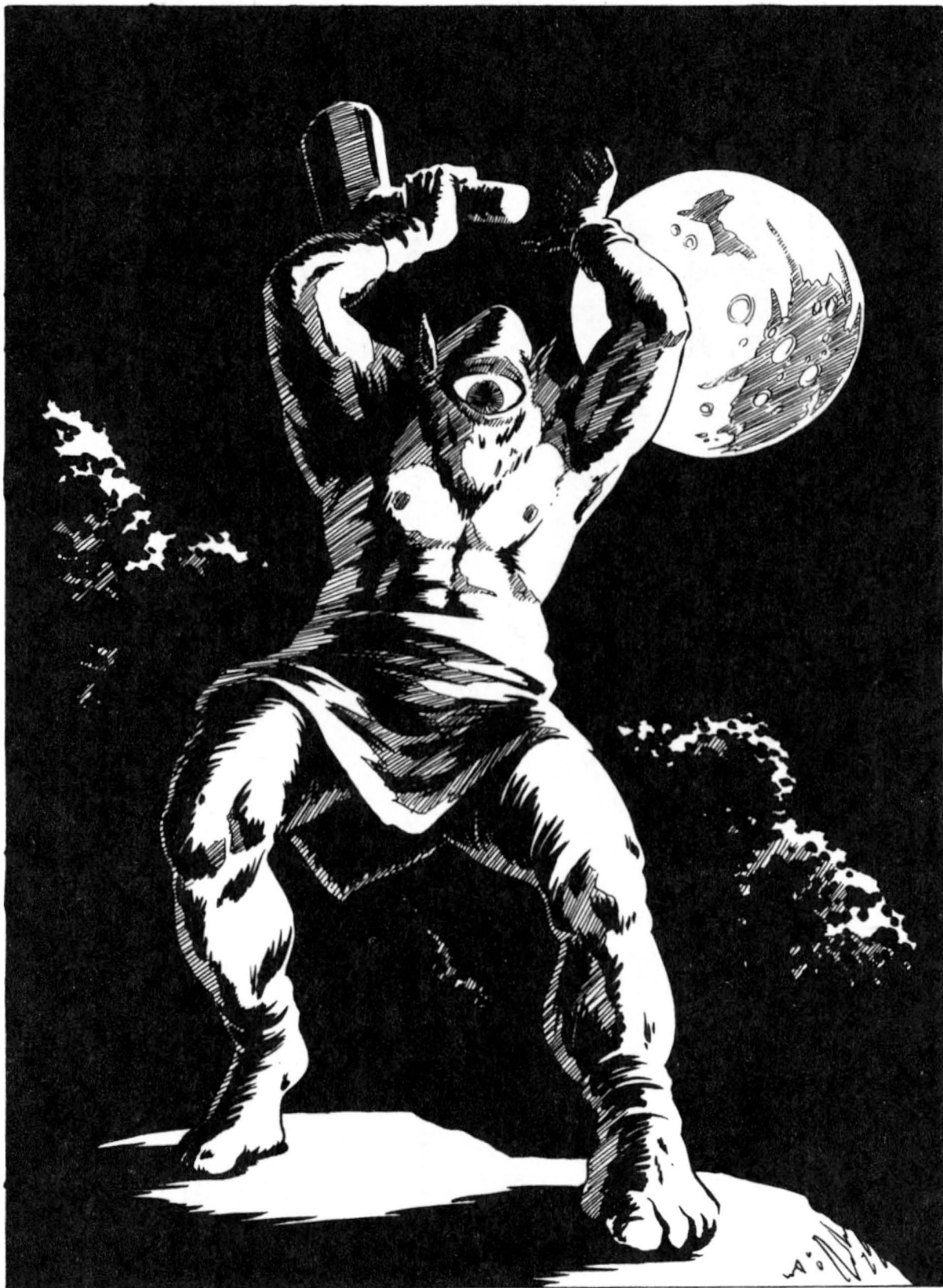
98

呪文とともに放たれた輝きがデーモンを包みこむ……！
●15にチェックがあれば……⇩64へ　●15にチェックがなければ…⇩133へ

99

ズークがロッドをかざした瞬間、稲妻の閃光が教会を貫いた。
（15と16について…）
●両方にチェックがあれば……………⇩179へ
●どちらかひとつ、または両方ともないなら……………⇩209へ

100

石像が一体、涸れた泉のほとりに立っている。ハンマーをふりあげた一つ目の怪人だ。

98〜100

●100石像が１体、涸れた泉のほとりに立っている。巨大なハンマーをふりあげた一つ目の怪人だ。

月の光が射し込んだ。と、いきなり巨大なハンマーが打ちおろされたかに見えた。ぼくたちは飛びのく。石像はどうと倒れて転がった（**24をチェック**）。
むき出しになった台座に蓋のようなものが見えた。

●13にチェックがあれば……⇩231へ
●13にチェックがなければ……⇩8へ

101

（とっさに手にした武器は？）

●ムチ……⇩304へ
●ロッド……⇩211へ

102

ギャア、とどこかでひと声あがった。と、そこいらじゅうのカラスどもがいっせいに翼をひろげた。ギャア、ギャア、ギャア…とひどい騒ぎがはじまった。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩321へ
●オノ……⇩229へ
●バイブル……⇩268へ
●ロザリオ……⇩196へ
●コウモリ……⇩291へ

103

だれよりも先にぼくのムチがうなりをあげた。

●11にチェックがあれば ……⇩246へ ●11にチェックがなければ …⇩197へ

104

「くそっ」ロウがオノを叩きつけた。「こんなかたちでやられるとは…」
「これで終わりというわけじゃない」
レイラがつぶやいた。自分でそのことに気づいていないふうだった。
「…なんだって？」
「ええ？　ああ、つまり…」怪訝な顔で問い返され、はっとしたように言いなおす。「ここでいつまでもこうやってるつもりはない…そうでしょう？」
仲間を失い、ぼくたちはそれぞれ動揺している。だがバンパイアハンターの血はそんなことを許さない。

●36にチェックがあれば ……⇩198へ ●36にチェックがなければ …⇩261へ

105

ロウがレイラをひっぱりあげた。最後にぼくが舷側につかまると霧が流れた。幽霊船は

ふらふらと漂いだした。
「さっそく出航ときたぜ」
ロウがオノの柄をさぐりながら抜け目なくあたりをうかがう。操舵室はどこかしら、というレイラのつぶやきにロウは笑った。
「まさか親切な舵手がいるとは思ってねえだろ？」
甲板は足を運ぶたびにみしみしと鳴る。気をつけろよ、と言いかけたとたん、間抜けにも自分で踏み抜いた。周囲がすっかり腐っていたらしい。ロウが手をさしのべるのも間に合わず、ぼくはいっきに甲板を突き破って落下した。

⇩9へ

106

ぼくはロウを押しのけるようにして立ちあがった。

●33にチェックがあれば……⇩421へ　●33にチェックがなければ…⇩309へ

107

邪悪の気に呼び覚まされた骨龍。首のひとつが自由になったことで、オベリスクの崩壊はいっそう勢いづいた。だがムチもオノも届かない。陥没口のこちら側で見まもるよりほかにどうしようもないのだ。続いてもういっぽうの首が抜け出した。その咆哮を思わせる

地鳴り。水しぶき。双頭の骨龍が躍り出た。巨大な骨格がのびあがる。だがたちまち陥没口から水中へ。それとともに起きたあらたな亀裂と陥没。ぼくたちは逃れるのがせいいっぱいだった（**54をチェック**）。

⇩330へ

108

ようやくたどりついたのは…どうやら地下室らしい。窓もなにもなく、四方が石積みの壁。一方の壁ぎわにへばりついたような階段が上のほうにある扉に続いている。ほかにはなにもない。

扉を調べ、思わずにやりと笑う。鍵がかかっている。そうだと思った。鍵穴は…おそらくぼくのロザリオの形と一致するに違いない。試すべきだろうか？　まさか！　進んで4つめの灰を手にしやしない。引き返してもう一方の通路を行ってみるべきなのだ。

そろそろと階段をおりた。ただですむわけはなさそうだ…。身がまえた。邪気を感じていたのだ。

天井に黒い染みがあらわれ、広がった。それはあるものの形となった。まさか、と思ったとき、そいつがふわりと頭上を覆った。

⇩12へ

109

（さらに…）

●43にチェックがあれば……⇩188へ

●44にチェックがあれば……⇩480へ

●43にも44にもチェックがなければ……⇩92へ

110

鍵のかかった扉のある地下室にもどってきた。天井、壁、床…抜け目なくうかがい、ふと気づいて思わず笑った。

「ここへ入るのに邪魔するわけないか」

4つめの灰。どうするか見てろ。ぼくはロザリオをはずし、その鍵穴にさしこんだ。

⇩93へ

111

邪悪のオノは輝きを断ちきった。ロウのまわりのオーラが波打つ。ひろがる波がぼくを圧し、大きくつかんでゆすぶった。たっぷりと宙に踊らされたあと床に叩きつけられた（**43と57をチェック**）。

●71にチェックがあれば……⇩441へ　●71にチェックがなければ…⇩343へ

112

青白い頭蓋が砕け、肋骨が飛び散った。それぞれバンパイアハンターのご先祖様から受け継いだ魔物封じの武器をふるい、骸骨どもをばらばらの骨片に変えていく。ところが、それはすぐに再生するのだ。いつまでたっても囲みを突破できない。

「退散！」

見かねたか、レイラが叫んだ。ふたたび骸骨どもはいっせいに崩れ落ちた。すぐさまそれを飛び越え、広場を走り抜けた（**ロザリオ…1ポイント**）。

⇩30へ

113

ズークが呪文をとなえ、ロッドをまっすぐに突きだした。輝きは十字架もろともデーモンをとらえた。が…。

「おお…」

ズークははっきりと身を震わせた。彼の放った輝きは邪悪の気に触れ、恐ろしい結果をもたらしたのだ。さらに十字架の別の一端が燃えあがった（**15をチェック**）。

（次にだれが？）

●レイラ……⇩270へ
●シド……⇩225へ

114

「くそったれ！」
ロウは呪いの声をあげ、はじき返されたオノを蹴とばした。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらす結果になってしまったのだ（3をチェック）。

（1と15について）
●両方にチェックがある……⇩257へ
●どちらかひとつ、または両方ない……⇩17へ

115

（守護カードをめくれ）
●オノ……⇩332へ
●コウモリ……⇩179へ
●ムチ・バイブル・ロザリオで、オノのポイントが…
4以上なら……⇩332へ
3以下なら……⇩179へ

116

川のすぐほとりに立っている時計台はいささか奇妙なしろものだ。川には石橋がかけられているのだが、向こう岸のほうが高い崖になっているため、時計台がこちら側の橋脚になっている。つまり、川を越えるには時計台にのぼらなければならない。

⇩70へ

117

（とっさに手にした武器は？）

●ムチ……⇩304へ　**●オノ**……⇩274へ

●ロッド……⇩211へ

118

「…退散！」

レイラは地中から伸びてきたものに向かってロザリオを突き出した。レイラの足をつかみそこねたのは腐った腕だ（**ロザリオ…1ポイント**）。

⇩244へ

119

ズークもまた同じ苦痛に喘いだ（**21をチェック**）。

●シド……⇩245へ　●ロウ……⇩213へ　●レイラ……⇩352へ

（まだ試していないのは？）

120

輝きは血まみれの騎士を包みこんだ。どんな反撃の隙も与えまいと、ズークはさらに呪文をしぼりだす。

（守護カードをめくれ）

●バイブル……⇩52へ　●コウモリ……⇩292へ

●ムチ、オノ、ロザリオでバイブルのポイントが…

7以上なら……⇩52へ　6以下なら……⇩292へ

121

（さらにオノのポイントが…）

●5以上なら……⇩37へ　●4以下なら……⇩71へ

122

ロッドをかまえて大きく踏みだしたとたん、またしても床が破れた。めりこんだまま足

が抜けない。骸骨どもが手にした武器をいっせいにふりあげる。曲刀、長剣、レイピア、ダガー…あわてて呪文を続けるが、力を呼び起こすことができない。次々に襲いかかる苦痛にたちまち突っ伏した…。が、はっと目をあけたときにはざっくり切り裂かれたはずの肩口に傷はなく、レイピアに貫かれたはずの胸からは一滴の血も流れていない。骸骨剣士の姿も消え失せている…（**40をチェック**）。 **⇩491へ**

123

さいわい岸はすぐそこだ。ぼくたちはもやのたつ川に飛びこんだ。 **⇩234へ**

124

レイラのロザリオは効かない。邪気のうねりはひときわ高まった（**61をチェック**）。

「退散…ああっ！」

（次に挑んだのは？）

●シド ………⇩421へ　●ロウ ………⇩435へ　●ズーク………⇩514へ

125

（手にした武器は？）

●ムチ……………………⇩264へ　●ロッド……………………⇩339へ

126

まだ大コウモリの形にもどりきらず、ひとかたまりでもやもやうごめいている黒い影に向かって素早く一撃…！
（守護カードをめくれ）

●オノ……………………⇩75へ　●ロザリオ……………………⇩172へ
●ムチ、バイブルで
オノのポイントが16以上なら……………⇩75へ　15以下なら……………⇩172へ
●コウモリ……………………⇩251へ

127

黒い龍はじっとのぞきこんでいる。ぼくがそろそろと立ちあがり、ロッドをにぎりしめるのを見ると、赤い目が陰湿なたくらみを秘めているように輝いた。口にしかけた呪文を一瞬のみこんだほどだ。それをあざ笑ったに違いない。ぐいと頭を突き入れた。壁はさらに崩れ、首が通路に這いこんだ。どうにかふんばり、呪文をとなえる…。

●54にチェックがあれば……⇩283へ　●54にチェックがなければ…⇩399へ

128

オノはぐっと引きこまれた。変貌したズークの全身に声のない笑いがひろがる。邪悪のオーラが波打った。ズークがロッドをふりあげると、ぼくは大きく宙を飛んだ。そして床に叩きつけられた。手を離れたオノはズークの背後にたたずむロウの手におさまっていた**（44と71をチェック）**。

⇩452へ

129

ズークのロッドだ。いまや化け物同様の姿をした彼に向かって突きだし、呪文をとなえる。するとズークがそれを逆さにとなえはじめた…。

（バイブルの上と下のポイントについて…）

●上のほうが2ポイント以上大きい……**⇩413へ**

●上と下の差が1ポイント以下……**⇩61へ**

130

墓石はいっそう不穏な様相をあらわした。激しく震え、まるで邪悪の主の怒りと憎しみをあらわすかのように、奇怪なうなり声がうずまいた。

亀裂がじりじりとひろがった。どす黒い血が流れだす。どくどくと、とめどなく溢れだす…そして墓石はまっぷたつに割れた。
「…あれを！」
どす黒い血だまりのなかからなにものかが起きあがる。邪気はなかばで断ち切られ、墓の主はおぞましくも不完全な姿でよみがえることになった。それはおびただしい犠牲者の血にまみれた悪の騎士。剣の先から邪悪の証をしたたらせながら、スカルトナイトが立ちあがる。
（まっさきに戦いを挑んだのは？）
●シド ……⇩103へ　●ロウ…………………⇩7へ　●ズーク ………⇩69へ

131

ズークが呪文をとなえた。ロッドからほとばしる白い輝きが大きな塊となって、どさりと落ちた（**バイブル上下…1ポイント**）。**⇩364へ**

132

ズークが呪文をとなえ、ロッドをまっすぐに突きだした。輝きは十字架もろともデーモンをとらえた。が…。

131〜132

●130墓石(はかいし)に亀裂(きれつ)がひろがり、どす黒(ぐろ)い血(ち)が流(なが)れだす。そして、その中(なか)からなにものかが起(お)きあがる。

「おお…」
ズークははっきりと身を震わせた。彼の放った輝きは邪悪の気に触れ、恐ろしい結果をもたらしたのだ。さらに十字架の別の一端が燃えあがった（15をチェック）。
（次にだれが？）

●レイラ……………⇩270へ　●ロウ……………⇩346へ
●バイブル……………⇩404へ
（守護カードをめくれ）
133
●ムチ
1にチェックがあれば…⇩333へ　1にチェックがなければ…⇩404へ
●オノ
14にチェックがあれば…⇩333へ　14にチェックがなければ…⇩404へ
●ロザリオ、コウモリ（1か14のどちらかにチェックが…）
あれば……⇩333へ　なければ……⇩192へ

134

ぼくがムチをかまえた瞬間、稲妻の閃光が教会を貫いた。

●両方にチェックがあれば…………………⇩179へ
(1と2について…)
●どちらかひとつ、または両方ともないなら…………⇩317へ

135

まるで同じだ。ズークのときと。がむしゃらにムチをふりまわしながらも、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸の数がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがる。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかからロウをひっぱりだすことができなかった。ロウを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。あとに残されたレイラとぼくは、仲間を奪われた怒りに震えるばかりだ**(28をチェック)**。

⇩48へ

136

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

あわてて オノをかまえなおそうとし、深(ふか)みに足(あし)をとられて転倒(てんとう)…！　⇩290へ

「なんなんだ、こいつらは…」

続(つづ)いていくつか立(た)ちあがる。

「あそこにも！」

137

「――!!」

一歩(いっぽ)踏(ふ)みこんだとたん、ぼくは彼(かれ)の苦痛(くつう)を知(し)った。しばらく息(いき)がつまり、目(め)はくらんだ。どこからか剣(けん)が飛(と)んできて腹(はら)を貫(つらぬ)いた、そう思(おも)った。が、そろそろと目をあけてさぐってみれば、傷(きず)ひとつない。それでもぼくは激(はげ)しく喘(あえ)いだ（**11をチェック**）。

（まだ試(ため)していないのは？）

●ロウ……⇩213へ　**●ズーク**……⇩486へ

●レイラ……⇩352へ

138

ぼくはよろめきながらムチをふりかざす…。　⇩167へ

139

呪文とともに輝きがほとばしる。
(守護カードをめくれ)

●バイブルでパイブルのポイントが…
7以上なら……⇩445へ
6以下なら……⇩214へ

●ムチ、オノでバイブルのポイントが…
8以上なら……⇩445へ
7以下なら……⇩214へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩214へ

140

まるで同じだ。ロウのときと。がむしゃらに腕をふりまわしながらも、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸の数がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがる。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかからズークをひっぱりだすことができなかった。ズークを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。後に残されたレイラとぼくは、ふたたび仲間を奪われた怒りに震えるばかりだ(33をチェック)。

⇩215へ

141

（シドの手にした武器は？）

●ムチ……⇩410へ　●ロッド……⇩232へ

142

（シドが手にしたのは？）

●ムチ……⇩421へ　●ロッド……⇩24へ

143

「ここは…」

水中から突きだした石柱。傾いた石の階段。船はそんなもののあいだにはさまっている。見なれぬ建築物の残骸。

「遺跡よ。大昔の都市の遺跡」

そういえば地図にそんな書き込みがあった。たしか城の東側だ。だとしたら…。

「まずいな」思わずうなった。

「ここは〝島〟だ」

「でも幽霊船といっしょに沈没する気はないでしょ」

レイラは先に水中へ飛び込んだ。 ⇩281へ

144

邪悪の気に呼び覚まされた骨龍。首のひとつが自由になったことで、オベリスクの崩壊はいっそう勢いづいた。だが陥没口のこちら側からではムチもオノも届かない。ロッドをかまえ、素早く呪文を口にする…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル ……………⇩372へ **●コウモリ** ……………⇩74へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

バイブルのポイントが16以上なら ………⇩372へ **15以下なら** ………⇩74へ

145

湿っぽい地下通路。ぼくの息づかいと足音だけがかすかに響く…。 ⇩108へ

146

向こう側の通路よりいっそう湿っぽい。石のひび割れから水が染みだしている…。 ⇩360へ

147

聖十字は怪物の体のまんなかに突き刺さった。そのとたん、窓から躍りこんだ閃光が聖十字を直撃した。激しい衝撃。ぼくたちはふたたびはねとばされる。

はじけながら異形の怪物をかけめぐる青白い輝き。脈打つ光の網――。

どれくらいたったのか。やがてぼくたちは目のなかにあるのがその強烈な残像だということに気がついた。すべてが静まりかえり、あたりの気配はまったく別のものに変わっていた。

怪物はそのおぞましい肉を貫く聖十字とともに消えた。終わったのだ。

「やつはもう二度と…」

⇩エピローグ1へ

148

ズークがゆらりと向きなおった。ぼくは歯を食いしばってムチをかまえた。だが…だがいったいこれはなんなんだ!? 手のなかでムチが蛇のように踊り、のたくる。押さえきれずに体まで踊った。愚弄だ。とびきりいやらしく愚弄してやがる。ぼくはそれを叩きつけた。ムチはひとり床の上で跳ねまわり、あげくにぼくの脚に絡みついた。彼らを包む黒ずんだオーラのようなものがさざめき、揺れた。彼ら自身の姿も醜くゆがむ。耐えられない

眺めだ。とてつもなくいやな感じがあたりに満ちていた。ズークの長身がぐにゃりとよじれた…。

（28と33について）
●28にも33にもチェックがある……⇩255へ
●28にだけチェックがある……⇩286へ
●33にだけチェックがある……⇩78へ
●28にも33にもチェックはない……⇩518へ

149

窓から躍りこんだ閃光が聖十字を直撃した。激しい衝撃。ぼくたちはふたたびはねとばされる。

はじけながら棺をかけめぐる青白い輝き。脈打つ光の網——。

どれくらいたったのか。光の網は消え、なにごともなかったかのように、巨大な棺とぼくが打ちこんだ聖十字とが残された。すべてが静まりかえり、あたりの気配はまったく別のものに変わっていた。それがいったいどういう意味をもつのか。

ぼくたちは息をつめて見つめるなかで、棺の蓋がそろそろとひらき、白い指が縁をつかんだ…。

⇩エピローグ2へ

150

黒い不吉の使者は去った。が、墓地はますます陰気な様相を帯びてきた。にわかにもやがたちこめる。同時になんとも言えぬいやな匂い。腐臭だ。いきなり目の前の土が湿った音をたててめくりかえった…。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩**212へ**　**●オノ**……⇩**305へ**
●バイブル……⇩**20へ**　**●ロザリオ**……⇩**118へ**
●コウモリ……⇩**35へ**

151

「――!!」

一歩踏みこんだとたん、ぼくは大きく体を折った。ひどい苦痛。しばらく息がつまり、目はくらんだ。どこからか剣が飛んできて腹を貫いた、そう思った。が、そろそろと目をあけてさぐってみれば、傷ひとつない。それでもぼくは激しく喘いだ**（11をチェック）**。

（そのあいだに挑んだのは？）

●ロウ……⇩**322へ**　**●ズーク**……⇩**228へ**
●レイラ……⇩**352へ**

150～151

●150もやがたちこめ腐臭が漂う中、いきなりぼくらの目の前の土が湿った音をたててめくれあがる。

152

割れた兜のなかから血まみれの髑髏があらわれた。ロウはさらに一撃を加えようとオノをふりあげた。が、スカルトナイトが剣をひとふりしたとき、ロウははね飛び、地に叩きつけられた。とたんにスカルトナイトは巨大な姿となって踊りあがった（10をチェック）。

⇩512へ

153

（コウモリどもを追い払うために手にしたのは…）

●ムチ……………………⇩22へ　●オノ……………………⇩247へ

154

ゴーストの強力な集合体だ！　ようやく気がついた。この間、ぼくはまったく無防備だったのだ。はっと身がまえたときには、もやもやにのみこまれかけていた。

（28と33について…）

●両方にチェックがある……⇩432へ　●28にだけチェックがある…⇩370へ

●33にだけチェックがある…⇩324へ　●両方ともチェックがない…⇩262へ

155

オノをかまえたとたん、異様な感じがした。はっとして見つめる。重い…。なぜだ⁉ どんどん重さを増してくる。ぴくりともしない。腕がぶるぶると震えはじめる。投げ捨てようにも手に吸いついたように離れないのだ。ぼくはオノをふりあげたまま膝をついた…。

⇩39へ

156

ぼくの足は蛇のかたまりで膨れあがった。鋭い痛み。思わずうめく（**46をチェック**）。「退散！」

レイラの叫びでずるずると滑り落ちる（**ロザリオ…1ポイント**）。そのすきに突進し、メデューサ像にムチを浴びせる…。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……………⇩397へ　●コウモリ……………⇩235へ
●オノ、バイブル、ロザリオ
ムチのポイントが16以上なら……………⇩397へ
15以下なら……………⇩235へ

157

鋭い叫び声がいくつも起きた。まわりを飛びかっていたコウモリの影はことごとく実体に変わった！

⇩202へ

158

（さらに…）

●43にチェックがあれば……⇩400へ
●43にチェックがなければ……⇩480へ

159

ぼくは床を打ち鳴らした。姿なき棺の主に怒りをこめて。憤りをこめて。憎しみをこめて。ばかげた勢いであたりかまわずムチを叩きつけた。そうしながら不意に一撃をレイラに向けた…。

●42にチェックがあれば……⇩299へ　**●42にチェックがなければ**…⇩205へ

160

オノはぐっと引きこまれた。変貌したズークのまわりに声のない笑いがひろがる。邪悪

のオーラが波打った。ズークがロッドをふりあげた。ぼくは大きく宙を飛び、そして床に叩きつけられた。手を離れたオノはズークの背後にたたずむロウの手におさまっていた（**44と71をチェック**）。

⇩315へ

161

青白い頭蓋が砕け、肋骨が飛び散った。それぞれバンパイアハンターのご先祖様から受け継いだ魔物封じの武器は、確実に効果を発揮した。骸骨どもはみるまにばらばらの骨片と化し、やがてそれも茶色い塵芥となってたち消える。ほどなく一掃（**ムチ…1ポイント、オノ上下…2ポイント、バイブル上下…1ポイント**）。

「けっこうな出迎えだ」

あたりに目を配りながら広場を抜ける。

⇩30へ

162

「悪魔め！」

ぼくは叫びながらムチを繰り出した。が、なんということだ。邪悪の気に触れたムチは生きもののように反転し、ぼくの体に巻きついたのだ。同時に十字架の別の一端が燃えあがっていた（**1をチェック**）。

(次にだれが?)

●レイラ……⇩270へ

●ロウ……⇩346へ

163

(守護カードをめくれ)

●ロザリオ、コウモリ……⇩378へ

●ムチ……⇩456へ

●オノ(3か14にチェックが…)

あれば……⇩378へ

なければ……⇩456へ

●バイブル(15か16にチェックが…)

あれば……⇩378へ

なければ……⇩456へ

164

まるで同じだ。ズークのときと。がむしゃらにコウモリどもを焼き払い続ける。が、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸の数がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがるばかりだ。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかならロウをひっぱりだすことができなかった。ロウを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。後に残されたのは彼のオノだけ。仲間を奪われた怒りに震えながら

拾いあげた（**27をチェック…以後シド自身がオノを使うことができます**）。

⇩48へ

165

（とっさに手にした武器は？）

●ムチ ……………………⇩117へ

●オノ ……………………⇩274へ

166

ぼくはたて続けにムチを浴びせかける。ロウはめまぐるしく飛び跳ねる。ズークは休みなく呪文をとなえ、輝きを放つ…。腐った肉が次々にはじけ散る（**ムチ…1ポイント、オノ上下…1ポイント、バイブル上下…1ポイント**）。が、レイラが数体のゾンビどもに囲まれてしまった。たまらずロザリオを突き出して叫ぶ。

「退散！」（**ロザリオ…1ポイント**）

不器用に後ずさりしながら、もやの奥に消えていくゾンビども…。

⇩258へ

167

ムチが炸裂！　墓石に大きな亀裂が生じた。金縛りは解けた（**ムチ…1ポイント**）。が…。

⇩130へ

168

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。ぐらりとゆらぐ。さらに一撃、一撃…どんな反撃の隙も与えまいと、たて続けにムチを浴びせかける。が、一瞬、ムチは勝手な意志を持ったように血のしたたる剣に絡みついた。スカルトナイトがそれをひとふり…ぼくは大きく飛び、なすすべもなく地に叩きつけられていた。とたんにスカルトナイトは巨大な姿となって躍りあがった（**11をチェック**）。

⇩512へ

169

青白い霊光をオノが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。が、ぼくはオノを打ちこみ続ける。わななく自分の魂に挑み続ける…。ふと、霊光がゆらいだ。あとは一撃ごとに邪悪の霊体がじりじりと圧縮されていった。やがてかすかな光球となり、オノの先でふっと消えた（**26があれば、オノ上…3ポイント**）。

⇩490へ

170

呪文が声にならない。魔法は封じられている…!!

⇩39へ

171

ますます床にあふれかえる災いの使者。踏みつぶそうが、そのおびただしい数をどうしようもない。わめきながらメデューサの像に向かってオノを投げた…。

⇩328へ

172

黒い影がはじけた。ふたたび、しかもこんどはいっせいに無数の影に分裂した。もういちどレイラのロザリオを使う…。

「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

…消えた。

●18にチェックがあれば……⇩329へ

●18にチェックがなければ……⇩341へ

173

狡猾な顔のまんなかに一撃を浴びせた。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと打ち続けた。邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬いうろこが通路をこする。首はじりじりと退いているのだ。ぼくは一歩ずつ踏みこむ。

（守護カードをめくれ）

●オノ

オノのポイントが20以上なら……⇩237へ　19以下なら……⇩450へ

●ムチ、バイブル……⇩450へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩385へ

174

棺の上で小箱のひとつが炎と化した。雷鳴。姿なき棺の主の怒りなのか――。ズークのまわりにふたたび邪気のうねりが強まった。

●42にチェックがあれば……⇩412へ　**●42にチェックがなければ……⇩285へ**

175

「退散！」

レイラがとっさに叫んでいた。奇怪な影は目の前でもんどりうった**（ロザリオ…1ポイント）**。

⇩364へ

176

ズークが呪文をとなえ、ロッドをまっすぐに突きだした。輝きは十字架もろともデーモ

ンをとらえた。が…。
「おお…」
ズークははっきりと身を震わせた。彼の放った輝きは邪悪の気に触れ、恐ろしい結果をもたらしたのだ。十字架は3つ目の炎をあげた（**15をチェック**）。
「退散！」
なかば絶望的にレイラがロザリオを突きだした。

⇩46へ

177

「この役立たず！」
ぼくは呪いの声をあげ、ムチを叩きつけた。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらす結果になってしまったのだ（**2をチェック**）。

（14と15について）
●両方にチェックがある⇩257へ　**●どちらかひとつ、または両方ない⇩318へ**

178

「くそったれ！」

ロウは呪いの声をあげ、はじき返されたオノを蹴とばした。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらす結果になってしまったのだ**（14をチェック）**。

⇩17へ

179

閃光は十字架を直撃した。

⇩257へ

180

もやのなかにいくつもの不格好なシルエットが立ちあがる。動きは緩慢だ。足を引きずりながら集まってくる。カラスがつついた腸をそのまま引きずっているやつ、目玉をぶらさげたやつ、口や鼻から白い虫を溢れさせているやつ…。

（守護カードをめくれ）

●ムチ ……⇩406へ　●オノ ……⇩334へ　●バイブル ……⇩51へ

●ロザリオ ……⇩166へ　●コウモリ ……⇩392へ

181

オノが飛び、デーモンを直撃…！

179〜181

●180もやの中にいくつも不格好なシルエットが立ちあがり、足を引きずりながら集まってくる。

●14にチェックがあれば……⇩226へ

●14にチェックがなければ…⇩271へ

182

割(わ)れた兜(かぶと)のなかから血(ち)まみれの髑髏(どくろ)があらわれた。ロウのオノはそれをもまっぷたつに断(た)ち割っていた。が、その腕(うで)はそろそろと剣(けん)をふりあげていた。ロウは驚(おどろ)くべき素早(すばや)さでそれを受(う)けとめた。弓(ゆみ)なりにのけぞりながら押(お)し返(かえ)す。顔(かお)は歪(ゆが)み、それこそ悪魔(あくま)さながらに吠(ほ)えていた。一瞬(いっしゅん)のち、彼(かれ)は跳(は)ねあがった。そして再度(さいど)オノを打(う)ちおろした。スカルトナイトの手(て)から剣が落(お)ちた。と、その姿(すがた)は大(おお)きな炎(ほのお)の塊(かたまり)に変(か)わった。ロウはさらにオノをふるった。彼は喘(あえ)ぎながら打ちこみ続(つづ)けた。突然(とつぜん)、炎は闇(やみ)に舞(ま)いあがった。そして大(おお)きくはじけて、消(き)えた（オノ上下(じょうげ)…6ポイント）。⇩336へ

183

（さらにオノのポイントが…）

●5以上(いじょう)なら……………⇩71へ

●4以下(いか)なら……………⇩293へ

184

ロッドの先(さき)から輝(かがや)きがほとばしる。青白(あおじろ)い霊光(れいこう)はかすみ、奇怪(きかい)な顔(かお)はいっそう異様(いよう)に歪(ゆが)

んで、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。が、ぼくは呪文を吐き続ける。わななく自分の魂に挑み続ける…。ふと、霊光がゆらいだ。ぼくが放つ輝きが邪悪の霊体をじりじりと圧縮していた。やがてかすかな光球となり、ロッドの先でふっと消えた

（35があれば、バイブル上…3ポイント）。

⇩490へ

185

死神はたたずんでいるだけだ。さあ、こちら側へ…と、さらにローブをひろげる。さあ、邪悪の側へ…と。底知れぬ力を秘めた誘惑だ。ふと恐怖にかられたのかもしれない。ひろがる闇をはらいのけようとするように、ロウはがむしゃらにオノをふりまわした。しかし空をきるばかり。やがて力尽きたか、ふと腕をおろす。大きく喘いだ。そのまま膝を折ってしまうかに見えた。しかし彼はゆっくりと体を起こした。このとき彼の目に浮かんだ決然たるもの——。ロウは闇に向かって歩む。闇が彼をのみこむ。が、一瞬のち、オノをふりあげたロウの姿が稲妻のように閃いた。

ロウは闇に浮かぶ髑髏を打ち砕いた**（オノ上…6ポイント）。**

⇩447へ

186

輝きのなかで、災いの女神像はまるでうすら笑いを浮かべているように見えた。さらに呪文。だが輝きは消えた。うねり寄せた邪気の波。ぼくは石畳に叩きつけられ、レイラのただならぬ叫びを聞いた。手のなかからロッドが消えていることに気がついたのはそのあとだ。

「なぜ…」

ロッドはメデューサ像がにぎりしてめいた（**43をチェック**）。

⇩437へ

187

（さらに…）

●44にチェックがあれば……⇩265へ

●44にチェックがなければ…⇩373へ

188

（手にした武器は？）

●ムチ……⇩400へ

●オノ……⇩58へ

189

ズークは腕を突きだした。邪悪のオーラがゆらめき流れ、触手のように伸びてきた。それがロッドからほとばしる輝きとぶつかった。一瞬、混じりあう。ぼくはさらに呪文、力を注ぎこむ。オーラの触手がはじける。輝きはじりじりと膨れあがり、ズークの全身を包みこんだ。奇怪な叫び声とともにズークが倒れた。棺の上で小箱のひとつが炎と化した。ズークを包んでいたゆらめくものが退きはじめる。が、あらゆるものが怒りのうねりに覆われた。オーラは激しくかき乱れ、そのなかでこんどはロウがいびつに首をねじ曲げた。腕をふりあげる。オーラが燃え立ち、そこにオノの形をつくりだした…。

(対抗するシドは…)

●魔法で ……………⇩95へ
●オノで ……………⇩239へ

190

嵐はやんでいたはずだ。突如とどろきわたった雷鳴がぼくたちをふたたび悪魔の手のなかにひきずりこんだ。

爆風でも浴びたように、ぼくたちは棺のまわりからはじき飛ばされていた。ぼくたち…いや、レイラ…レイラの足は宙でばたついていた。

それがふっと闇にすいこまれ、棺の蓋が重い音をたてたとき、はじめてぼくたちは何が

起きたかをのみこんだ。
「それ見ろ！　俺の勘があたったじゃねえか…こいつは…こいつはやっぱり…」
ロウがわめいた。しかしこんなことが予想できただろうか？　ズークは蒼ざめなにかぶつぶつとつぶやいた。打っても蹴っても、棺はびくともしなかった。ぴったりと蓋を閉じ、むろん、鍵はなんの役にも立たない。
雷鳴はいっそう激しくとどろきわたり、レイラをひきずりこんだ棺に祝福を与えるかのように稲妻がひらめき躍った。その青い閃光のなか、棺はまるで違うものに見えた。脈動する異様な生きもの…。
「…聖十字を」
ズークが喘いだ。この肌をあわだたせるものはなんだろう。腹の底をえぐるものはなんだろう。そう、いま目の前にしているのはこの世にあらわれてはいけないものだ。闇の世界にとどまっていなければならないものなのだ。そいつのためにぼくは自分の手で扉をあけた。追い返さなければならない。だがレイラは…レイラはどうなる!?
棺の蓋がことりと鳴った。
「シド！」
ロウとズークが同時に叫んだ。
「出してはいけない。なんであろうとあそこから出してはいけないのだ！」

その叫びが終わらないうちだ。かすかに持ちあがった棺の蓋にぼくは聖十字を打ち込んだ。

⇩495へ

191

青白い頭蓋が砕け、肋骨が飛び散った。それぞれバンパイアハンターのご先祖様から受け継いだ魔物封じの武器は、確実に効果を発揮した。骸骨どもはみるまにばらばらの骨片と化し、やがてそれも茶色い塵芥となってたち消える。ほどなく一掃(**ムチ…2ポイント、オノ上下…1ポイント、バイブル上下…1ポイント**)。

「けっこうな出迎えだ」

あたりに目を配りながら広場を抜ける。

⇩30へ

192

輝きはたちまち消滅した。

「おお…」

ズークはうめき、はっきりと身を震わせた。彼の白い魔法の力は十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ。十字架の一端が燃えあがった(**15をチェック**)。

⇩32へ

193

（守護カードをめくれ）

●ロザリオ、コウモリ……⇩389へ　●バイブル……⇩404へ

●ムチ（1か2にチェックが…）

あれば……⇩389へ　なければ……⇩404へ

●オノ（3か14にチェックが…）

あれば……⇩389へ　なければ……⇩404へ

194

橋のほうへ戻る途中、泉のそばを通りかかった…。　⇩100へ

195

深みに足をとられて転倒！　ずぶずぶと沈みこむ。泥のかたまりがのびあがる。泥水がしたたり落ちる。それに混じってなにかくねくねうごめくものが…。蛭だ！　鋭い痛みが腕にくいこむ。はっと見あげた。泥のかたまりが倒れかかってくる…。

「退散！」

レイラが叫び、うごめくかたまりは反対側に崩れた。それを頭から浴びずにすんだのは

さいわいだ。あたりを見まわす。ほかのかたまりもその場にずるずると崩れている。ほっとして手足に吸いついたいくつかの蛭を引きはがす（ロザリオ…1ポイント、70をチェック）。

●68にチェックがあれば……⇩379へ　●68にチェックがなければ…⇩458へ

196

すると鋭いくちばしの攻撃にさらされたレイラはたまらずロザリオを突きだした。

「退散！」

いっそうひどい騒ぎ。カラスどもは先を争って舞いあがり、森のほうへ飛び去った。

（ロザリオ…1ポイント）　⇩150へ

197

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。ぐらりとゆらぐ。さらに一撃、一撃…どんな反撃の隙も与えまいと、たて続けにムチを浴びせかける。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩419へ　●コウモリ……⇩489へ

●オノ、バイブル、ロザリオでムチのポイントが…

7以上なら……⇩419へ
6以下なら……⇩489へ

198

「ねえ、どうせならこのまま川沿いにさかのぼってみない？　もしかするとほかに橋があるかもしれない」
ふと思いついたようにレイラが言った。なんでもいい、気を奮いたたせるためだったのだろう。すぐにロウが応じた。
「ああ。二度も墓参りをすることはねえ」
…結局、時計台にたどりつくまでに橋には出くわさなかった。

⇩116へ

199

ゴーストの強力な集合体だ！　ようやく気がついた。この間、ぼくはまったく無防備だったのだ。はっと身がまえたときには、もやもやにのみこまれかけていた。

⇩432へ

200

操舵室だ。入口の前でズークとロウが奇妙なしぐさをしていた。まるでそこに壁かなにかがあるように、宙を手さぐりしているのだ。ぼくを見ると同時に言った。

198〜200

●200ローブ姿の舵手がふりかえった。死神！　そいつは、ひび割れた声のない笑いをたてている。

「入れないのだ、どうしても」
「見ろよ、あいつを」
脇にある小窓からのぞくと、何者かが舵を操っているのが見えた。黒いローブのようなものをまとった、背の高い何者か。ロウがどう罵ろうと、まったくふりむかない。
「湖上遊覧はおしまいみたいよ。親切にも送ってくれるらしいけど、いったいどこへ…」
レイラが唇の端をつりあげた。ぼくははじめて船が川をさかのぼっていることに気がついた。
やがて船は右岸に寄せられた。と、操舵室の扉がはじけるように開いた。ぼくたちはよろめく。操舵室のなかからうねり寄せる強い邪気（**37をチェック**）。
黒いロープ姿の舵手がゆっくりとふりむいた。
「…死神！」
たっぷりとした頭巾の奥で、ひび割れた髑髏が声のない笑いをたてている。

（まっさきに攻撃をしかけたのは？）

●シド……………⇩421へ　**●ロウ**……………⇩435へ
●ズーク……………⇩514へ　**●レイラ**……………⇩124へ

201

●魔法を使う……………⇩40へ　●このままムチで……………⇩156へ

202

実体となったコウモリはたちまち激しく襲いかかってきた。払いきれない。首筋に鋭い痛み…吸血コウモリ!?
すっと闇にひきこまれた。一瞬だけだ。が、ひどくいやなものを見た。それがなんだったのか、闇から戻ったとたん遠のいてしまい、ぞっとする感じだけが残った（20をチェック）。
コウモリの姿は消えている。

●18にチェックがあれば……⇩329へ　●18にチェックがなければ…⇩341へ

203

「ちくしょう！」
不意にもうひと組の邪悪な輝きが浮かびあがった。闇に棲む黒い龍は双頭だったのだ。いままで片割れの陰に身を潜めておいて、このときを待って伸びあがった。さっきのやつはおとりだったのだ。そのことに気づいたときにはぼくは向こう側の壁に叩きつけられて

いた。圧倒的な力のうねり。血の色を帯びた輝きはたっぷりと勝ち誇っていた。闇の龍はかっと口をあけた。背後の虚空がわーんと鳴った。一瞬、闇が垂れこめる…。

⇩481へ

204

オノが飛び、デーモンを直撃…！

●14にチェックがあれば……⇩114へ
●14にチェックがなければ…⇩272へ

205

打つ！　打つ！　打つ！　言葉ともうめき声ともつかぬ恐ろしい響きに耳を閉ざしながら。

●ムチのポイントが2以上なら……⇩375へ
●ムチのポイントが1以下なら……⇩299へ

206

邪悪のオノは輝きを断ちきった。ロウのまわりのオーラが波打つ。ひろがる波がぼくを圧し、大きくつかんでゆすぶった。たっぷりと宙に踊らされたあと床に叩きつけられた（**43と57をチェック**）。

⇩343へ

207

ズークの手にはロッドがあった。やられる前に！　ぼくはオノをかまえる。ズークが呪文を逆さにとなえはじめた。

輝きが放たれたのではない。邪悪のオーラがロッドに向かってゆらめき流れ、そこから触手のように伸びてきた。ぼくはオノをふりおろす…。

（オノとバイブルのポイントについて…）

●オノ上のポイントがバイブル上のポイントより大きい……………⇩223へ

●オノ上のポイントがバイブル上のポイントより小さい、または同じ…………⇩128へ

208

ロウが驚くべき素早さで跳びあがった。オノが鈍い音をたて、なにかがどさりと転がった（オノ上下…1ポイント）。⇩364へ

209

（守護カードをめくれ）

●バイブル……………⇩65へ　●コウモリ……………⇩179へ

●ムチ、バイブル、ロザリオで、オノのポイントが…

4以上なら……⇩65へ
3以下なら……⇩179へ

210

「見ろよ」
　ロウが目を光らせた。おそらく支柱の台座はガタがきていたのだろう。鐘による震動で彫像が飛び出した。が、これはなにかの暗示なのかも。メデューサの首が飛び出したあとに、小さな扉を見つけたのだ。鍵穴がある。教会の壁にあったしかけを思いだす。だが鍵穴はひとつだけ…。ロウはさっそく自分のロザリオを試してみた。かちりと音がする。
「ぴったりだ」
　にんまりしながら扉を開けた。
「ん？　なんだこの箱は…」
　ロウがそれを取り出しかけたとき、周囲の森が不穏にざわめいた。と、四方に大きくあいた窓という窓から真っ黒い雲が流れこんできた…まるでそう見えた。コウモリだった。あっというまに時計台の最上階はおびただしい数のコウモリで埋まった。めちゃくちゃにぶつかってくる。レイラが叫んでいたが、いっこうに効果はないようだった。あるいは相手があとからあとからわきだしてくるのか。
「ちきしょう、なんなんだ、こいつらは…」

わめき、腕をふりまわし、跳ねまわった。が、そのときふと目に入ったロウの姿にぎょっとした。どうしたことか、彼は群がり寄る小さな悪魔どもを追い払おうともせず、じっとたたずんでいた。台座のなかから取り出したものを手にしたまま。まるで…まるで魂が抜けたように。

「ズーク！」ぼくはムチをふりまわしながら叫んだ「ロウが…！」

●ムチのポイントが8以上なら……………………⇩**273へ**

●7以下なら……………………………………………⇩**319へ**

211

すぐ目の前に立ちあがった泥のかたまりに向かってロッドをかまえる…。

（守護カードをめくれ）

●バイブル……………⇩**366へ**　**●コウモリ**……………⇩**195へ**

●ムチ、オノ、ロザリオ……………………………⇩**320へ**

212

とっさにムチをふるう。いささかめりこむような手ごたえ。なにかがちぎれ飛び、ぽとりと落ちた（**ムチ…1ポイント**）。腐った腕だ。

⇩**244へ**

213

ロウがオノをふりあげた。

●オノのポイントが6以上なら……⇩259へ

●以下なら……⇩504へ

214

輝きは血まみれの騎士を包みこんだ。ズークはたて続けに呪文をとなえた。輝きの輪がじりじりと膨れあがる。が、そのなかでスカルナイトが剣をひとふりしたとき、ズークははね飛び、輝きは消えた。とたんにスカルナイトは巨大な姿となって躍りあがった（**21をチェック**）。

⇩512へ

215

嵐が去ったあとに似ていた。あらためて起きたできごとをかみしめる。あいついで仲間が消えた。大きな痛手だ。が、それ以外にも心の底にひっかかるものが残った。それがなんなのか、どうしても探りだすことができないのだが…。レイラもやはり黙りこんでいた。しかし、逃げ帰ってしまう気になっていないことだけは確かだ。バンパイアハンターの使命にいささかのゆるぎもない。ぼくたちは地図でこの泉のそばに森を抜ける道があることを確かめた。悪魔城は間近だ。

⇩87へ

216

大きく飛びあがると同時にオノをひと振り、まず曲刀をふりかざしたやつの頭蓋骨を粉砕…一体め！　続いて長剣をかつぎあげたやつの肋骨を解体…二体め！　はっと身をかがめてレイピアを突つきだしてきたやつをなぎはらう。腰椎を分断して三体め！（**26にチェックがあれば、オノ上…1ポイント**）
ところが、横あいから突きだされたダガーをかわしそこねて転倒。そこへ別の一体がグラディウスをふりおろした。苦痛に息がつまる。…！　しかし目をあけたときには胸をえぐったはずの小剣はない。骸骨剣士の姿もまた…（**49をチェック**）。

⇩491へ

217

呪文が声にならない。魔法は封じられている…!!

⇩492へ

218

「退散…ああっ！」
レイラのロザリオは効かない。邪気のうねりはひときわ高まった（**61をチェック**）。

⇩89へ

219

邪悪の気に呼び覚まされた骨龍。首のひとつが自由になったところで、オベリスクの崩壊はいっそう勢いづいた。だがムチは届かない。陥没口のこちら側で見まもるよりほかにどうしようもないのだ。続いてもういっぽうの首が抜け出した。その咆哮を思わせる地鳴り。水しぶき。双頭の骨龍が躍り出した。巨大な骨格がのびあがる。だがたちまち陥没口から水中へ。それとともに起きたあらたな亀裂と陥没。ぼくたちは逃れるのにせいいっぱいだった（**54をチェック**）。

⇩330へ

220

黒い影がはじけ、一瞬にしてぱっと消えた（**35にチェックがあれば、バイブル…3ポイント**）。

●18にチェックがあれば ……⇩329へ
●18にチェックがなければ …⇩341へ

221

不意に口がくわっと裂けた。ふたたび紫色の霧が目の前を覆う。だが首は通路から退いていた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。が、しばらくしてふっと闇に沈んだ（**35にチェックがあれば、バイブル上…3ポイント、17をチェック**）。

⇩467へ

222

棺のなかは…まるでかすみがかかったように…よく見えなかった。ロウが小箱の中身をそそいだ。レイラもいまは虚ろな目でのろのろと動くだけ。残りの灰をそそぎ、そしてぼくが蓋を閉じた…。

とたんに見えない糸がふり切れた。

ゴミかなにかのように大きく跳ねとばされ、ぼくたちは…ズークも同時に…はっと正気づいた。

「なんてこった…」

たがいの顔を見あわせ、言葉もなかった。雷鳴はいっそう激しくとどろきわたり、稲妻がその巨大な棺に祝福を与える。閃光のなか、棺はまるで違うものに見えた。脈動する異様な生きもの！

「よみがえる…」

だれかがつぶやいた。肌は粟だち、毛が逆立った。荒狂う風のせいではない。すぐそこにあるのだ、ぜいぜい鳴る喉が。息づかいが。

「…聖十字を」

レイラが喘いだ。そう、そうなのだ、いかにあがこうとむだだ。聖十字のあるかぎり闇の世界にとどまるしかないのだ。

棺の蓋がことりと鳴った。

⇩238へ

223

オーラの触手がはじけ、奇怪な叫び声とともにズークが倒れた。棺の上で小箱のひとつが炎と化す。ズークを包んでいたゆらめくものが退きはじめる。が、あらゆるものが怒りのうねりに覆われた。邪悪のオーラは激しくかき乱れ、そのなかでこんどはロウがいびつに首をねじ曲げた。腕をふりあげる。オーラが燃え立ち、そこにオノの形をつくりだした…。

⇩44へ

224

あっと思ったときにはなにか凶暴な獣と取っ組みあっていた。生臭い息。鋭い牙が喉もとに…**（5をチェック）**。

⇩175へ

225

「くそっ」

ぼくはわめきながらムチを繰り出した。が、なんということだ。邪悪の気に触れたムチは生きもののように反転し、ぼくの体に巻きついたのだ。

十字架は3つ目の炎をあげた（**1をチェック**）。
「退散！」
なかば絶望的にレイラがロザリオを突きだした。

⇩46へ

226

「くそったれ！」
ロウははじき返されたオノを蹴とばした。デーモンにはまるで効かず十字架の炎がさらに増えただけなのだ（**3をチェック**）。
（**1、2、3、14、15、16のうち…**）
●4つにチェックがある ……⇩257へ
●チェックは3つ以下 ……⇩470へ

227

まるで同じだ。ズークのときと。がむしゃらにコウモリどもを焼き払い続ける。が、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸の数がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがる。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかからロウをひっぱりだすことができなかった。ロウを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。あとに残されたレイラとぼくは仲間を奪われた怒りに震えるばかりだ（**28を**

チェック）。　⇩48へ

228

ズークが呪文をとなえはじめた。

●バイブルのポイントが6以上なら……⇩430へ　●5以下なら……⇩119へ

229

「行っちまえ！」

まっさきに飛びだしたロウはほとんど盲滅法にオノをふりまわした。しかしこれが効いた。ぼくとズークが加わるまでもなく、泡をくったカラスどもは森のほうへ飛び去った**（オノ上下…1ポイント）。　⇩150へ**

230

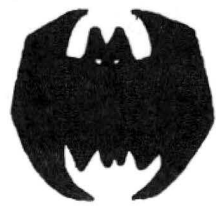
やがて湖へ出た。一面深い霧に包まれている。

「あれを…」

レイラが指さした。右手の崖の上。大きな館のシルエット。

「悪魔城…」

228〜230

●230深い霧の中、右手の崖の上に「悪魔城」が見えた。が…、イカダは、城ではなく幽霊船へと向かう…。

ぼくたちの奇妙な〝イカダ〟はなにかに導かれているに違いなかった。陰鬱な城が見えたとき、その裏手の岸辺に打ちあげられるのだと思った。ところが〝イカダ〟は岸辺から離れるばかりだ。ぼくたちは行く手を見つめた。霧のなかにゆらりとあらわれた大きな影。

「船…!?」

ぎょっとする。不気味な姿。傾いた船体。折れたマスト…まるで…。

「幽霊船だ…」

〝イカダ〟はその横腹にゆっくりとぶつかった。

⇩54へ

231

「待てよ」ぼくはズークとレイラを押しとどめた。台座の蓋に鍵穴があるのを認めたからだ。「ロウの二の舞だ。これは罠だ…そうだろう?」

「そう…」レイラはややこわばってうなずいた。「たぶん、そう…」

「なんの罠か暴きたいところではあるが…」

ズークは台座から目を離さなかった。二人が蓋をあけてみたがっていることはよくわかった。ぼくにしてもそうだ。それが逆にひっかかる。これは罠なのだ。ぼくたちはじりじりと後ずさる。ひどい困難だ。しかし罠だと判断できたことは悪くない…そう思いながら。が、ぼくたちは逃れきれなかった。あたりが不穏にざわめいた。木々のあいだから真っ黒

い雲がわきあがった…まるでそう見えた。コウモリだった。おびただしい数のコウモリの群れ。あっというまにぼくたちはそのなかに巻きこまれた。時計台のときと同じだ。レイラが叫んでいたが、やはりいっこうに効果はないようだった。

「くそっ！　なんで…」

ぼくははっとした。ズークのようすがおかしい。コウモリの襲来にはまるで気づいてないようではないか。ぼんやりと台座を見つめている。憑かれたような顔で…。

「ズーク!?」

ぼくの腕を意外な力でふりきり、台座につかつかと歩み寄る。

「やめろっ！」

飛び起きたぼくにコウモリどもが猛烈に体当たりしてくる…。

●28にチェックがあれば　……⇩22へ
●28にチェックがなければ　…⇩153へ

232

関節をきしませながら立ちあがる骸骨剣士たち。それぞれ形の違う剣をかまえ、半円形にぼくを囲む。ぼくはロッドをふりかざし。呪文をとなえる…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル　……………⇩409へ
●ムチ、オノ、ロザリオ　……⇩38へ

●コウモリ……………………⇩122へ

233

青白い霊光をオノが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくなった。なにものかがオノをつかみとてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白い霊光のなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。

「…シド…シド!?」

階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた（63をチェック）。

⇩513へ

234

「ちきしょう…」土手をはいあがったとたん、ロウは土を蹴った。「こんなところまでもどされちまった!」

目の前に時計台があった。

「ついてないぜ。どうせだったら向こう岸へ泳ぎつけばよかったんだ」

⇩116へ

235

ムチは一度だけ鳴った。災いの女神像はまるでうすら笑いを浮かべているように見えた。うねり寄せた邪気の波。ぼくは石畳に叩きつけられていた**(42をチェック)**。

⇩437へ

236

(さらに)

●43にチェックがあれば……⇩373へ

●44にチェックがあれば……⇩312へ

●43にも44にもチェックがなければ……⇩282へ

237

やがて首は完全に通路から退いた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。もうオノは届かない。が、強引に虚空を切り裂いてみせた。赤い輝きが闇に沈んだ**(26にチェックがあれば、オノ上…3ポイント)**。

⇩467へ

238

棺の蓋がはね飛んだ。そこからあらわれたのは…いったいなんなのだ!? それは…ぼくたちはあまりのおぞましさに呆れさえした…その巨大な異形の肉の塊をどう言いあらわせばいいのかわからない。

さまざまな化け物を混ぜ、こねあわせて…いや、その姿そのものはあるいは冒瀆的な冗談なのだ…そのものが放つ気配こそが肝心なのだ。肌をあわだたせる恐ろしさはなんだろう。腹の底をえぐる不快さはなんだろう。そう、いま目の前にしているのはこの世にあらわれてはいけないものだ。闇の世界にとどまっていなければならないものの仮の姿なのだ。ぼくたちはそいつのために扉をあけてやった。追い返さなければならない。

「聖十字を!」

ふたたびレイラが叫ぶ。同時だ。ぼくは聖十字を握りしめ、怪物に向かって投げた…!

⇩468へ

239

邪悪のオノをふりかざすロウ。それを受けとめるのは真正バンパイアハンターのオノ!

(オノのポイントについて…)

●オノ上のポイントがオノ下のポイントより2以上大きい……………⇩68へ

●オノ上のポイントとオノ下のポイントの差が1以内……⇩386へ

240

とっさにムチをふるう。手ごたえがあった。なにかがどさりと重い音をたてた（ムチ…1ポイント）。⇩364へ

241

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩456へ

●オノ

14にチェックがあれば……⇩485へ　14にチェックがなければ……⇩456へ

●バイブル

15にチェックがあれば……⇩485へ　15にチェックがなければ……⇩456へ

●ロザリオ、コウモリ（14か15のどちらかにチェックが…）

あれば……⇩485へ　なければ……⇩47へ

242

「この役立たず！」
罵りながらムチを叩きつけた。デーモンにはまるで効かず、十字架の炎がさらに増えただけなのだ（2をチェック）。

（1、2、3、14、15、16のうち…）

●4つにチェックがある……⇩257へ　●チェックは3つ以下………⇩470へ

243

「待てよ」ぼくはロウとレイラを押しとどめた。支柱の台座はガタがきていたのだろう。鐘による震動で彫像が飛び出した。たとえそうだとしても、これだけは偶然じゃない。メデューサの首が飛び出したあとにあらわれた小さな扉。鍵穴…。
「ズークの二の舞だ。これは罠だ…そうだろう？」
「そう…」レイラはややこわばってうなずいた。「たぶん、そう…」
「罠と知ってりゃこっちだって無策ってわけでもねえんだがな…」
ロウは台座から目を離さなかった。２人が蓋をあけてみたがっていることはよくわかった。ぼくにしてもそうだ。それが逆にひっかかる。これは罠なのだ。ぼくたちはじりじりと後ずさる。ひどい困難だ。しかし罠だと判断できたことは悪くない…そう思いながら。

が、ぼくたちは逃れきれなかった。あたりが不穏にざわめいた。と、四方に大きくあいた窓という窓から真っ黒い雲がわきあがった…まるでそう見えた。コウモリだった。あっというまに時計台の最上階はおびただしい数のコウモリで埋まった。泉のときと同じだ。レイラが叫んでいたが、やはりいっこうに効果はないようだった。

「くそっ！　なんで…」

ぼくははっとした。ロウのようすがおかしい。コウモリの襲来にはまるで気づいてないようではないか。ぼんやりと台座を見つめている。憑かれたような顔で…。

「ロウ!?」

ぼくの腕を意外な力でふりきり、台座につかつかと歩み寄る。

「やめろっ！」

飛び起きたぼくにコウモリどもが猛烈に体当たりしてくる…。

●33にチェックがあれば……⇩391へ

●33にチェックがなければ……⇩33へ

244

「ゾンビだ…」

ぼくたちはもやの奥をうかがった。あちこちで湿った土の音が…。

●レイラのロザリオを使って突破……⇩429へ

●戦う……⇩180へ

245

ぼくはムチをふりあげた。

●ムチのポイントが6以上なら ……⇩167へ

●5以下なら ……⇩335へ

246

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。が、相手は微動だにしない。レイラがあっと息をのむ。スカルトナイトの姿がひとまわり大きくなった（**12をチェック**）。

「だめ…そのムチは呪いを受けている… 逆に邪悪の力を注ぐだけよ！」

（代わって攻撃するのは？）

●ロウ ……⇩407へ

●ズーク ……⇩394へ

247

ズークはロッドの頭につけていた十字架を台座の鍵穴にさしこんだ。彼がなにか手にして立ちあがったとき、コウモリどもはいっせいに彼のまわりに群がり寄った。ぼくはその小さな悪魔どもを追い散らそうとオノをふりまわした…。

●オノのポイントが8以上なら ……⇩354へ

●7以下なら ……⇩140へ

248

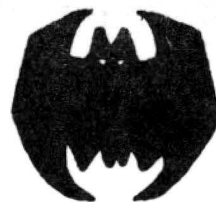
レイラをひっぱりあげると霧が流れた。幽霊船はふらふらと漂いだした。
「さっそく出航ってわけね」
ぼくたちはあたりをうかがった。操舵室はどこかしら、とレイラがつぶやく。
「まさか親切な舵手がいるとは思ってないだろ？」
甲板は足を運ぶたびにみしみしと鳴る。気をつけろよ、と言いかけたとたん、間抜けにも自分で踏み抜いた。周囲がすっかり腐っていたらしい。レイラが手をさしのべるのも間に合わず、ぼくはいっきに甲板を突き破って落下した。

⇩433へ

249

死神はたたずんでいるだけだ。さあ、こちら側へ…と、さらにロープをひろげる。さあ、邪悪の側へ…と。底知れぬ力を秘めた誘惑だ。ぼくはふたたびたじろいだ。ひろがる闇をはらいのけようと、がむしゃらにオノをふりまわす…。
ふと、大きく喘いでいる自分に気がついた。これは恐怖にかられた無意味なあがきではないのか。ぼくはゆっくりと体を起こした。闇に向かって歩む。自分の力を信じるべきなのだ…。闇に浮かぶ髑髏と対峙した。ぼくは決然とオノをふりおろす——。
髑髏は砕けた（**26にチェックがあれば、オノ上…6ポイント**）。

⇩447へ

250

レイラがロザリオをはずした。鍵穴はそのやや変わった十字の形をしているのだ。

「まさか開けるつもりじゃないだろうな!?」ぼくはレイラの腕をつかんだ。「ばかな！　いったいなんのために…」

「なぜって…」レイラはそっとぼくの手をほどき、逆にこう問い返した。「灰は4つに分散された。これが3つめ。残りの1つはどこにあると思う？」

「知らないね。たとえ目の前にあったってぼくなら手をふれないさ」

「4つめの灰に関してはそのほうがいいわ」

「3つめでも同じだ。これ以上…」

「灰を4つに分け…その交わるところに…聖十字を配し封印を完成した…」

レイラは文書の一部を呪文のように口にした。そして地図をひろげた。

「聖十字の封印には二重の意味があるのよ。分散した灰の配置がそのひとつ。いい？　泉とこの遺跡」白い指が2つの場所を結びつけた。「それから時計台と…」

「…城か！」

ぼくはぐっと息をのんだ。はじめてレイラの言おうとしていることに気づいたのだ。

「そう。そしてこの十字の交わるところに…」

「聖十字！」

250

●250泉、遺跡、時計台、城。この4つが交わるところに聖十字が…!? レイラは、台座の鍵をあける。

城には本館のほかに2つの塔がある。レイラの推測が正しければ…いや、正しいに違いないのだが…北側の塔に灰。南側の塔に聖十字。だが、それならすぐに城への入口をさがすべきではないか。聖十字を手にするために。ぼくはふたたびレイラの腕をつかんだ。ところがレイラは台座にふりむき、またしてもおそるべき霊感を発揮して言いきったのだ。

「地下通路の入口は台座にこの下にあるのよ。だからどうしても開けなくてはいけない」

ぼくは震えた。怒りだ。そのあいだぼくに目を閉じていろと？　ズークとロウがいったいどうなったのか、きっぱり忘れてしまえと？　ほかに手はないのか⁉

「ねえ、シド」レイラはひどく魅力的な笑みをたたえ、ぼくの目をのぞきこんだ。「ここまでは彼の思惑どおり。しかたがないわ。だけど勝負は五分五分だと思わない？　相手もまた危険を冒しているのよ。灰のありかにわたしたちを導くということは、おのずと聖十字のありかにも…」

レイラは台座の鍵をあけた。

⇩411へ

251

黒い影がはじけた。鋭い叫びが飛びかう。ふたたび、しかもこんどはいっせいに分裂したのは…影ではなく実体だ！

⇩202へ

252

やはりここは南側の塔だった。螺旋階段をのぼりきると、最上階の部屋をぐるりと囲んだテラスに出た。すぐそばまで迫った森。反対側に城の本館。塔のテラスから続く橋で結ばれていたらしいが、その橋は壊れている。

ここまできてはじめて〝悪魔城〟の姿を間近にしたわけだが、こうしてみると、荒れるにまかせたただの古城に見える。やけに静まり返っている。だがこれは見せかけのいやらしい静けさだ。意地悪い笑みをたたえて見まもるものがいるのだ。この沈黙はやがて…。

やがてどうなるのかは決まっている。その切り札が、たしかに部屋のなかにあった。聖十字だ。しかしぼくはすぐに手にとるのをためらった…。

⇩374へ

253

「4つの灰のうち3つは消滅した。しかし残る1つは…」

尖った顎をひねり、ズークは棺を横目でとらえた。いまこうして見るとたいそう間抜けな代物だ。

「ぶっこわすしかねえさ」

言葉つきとは裏腹に、ロウは半歩退いた。レイラが声を出さずに笑った。

「聖十字をここに封印すればいいわ」

「あいつをあけるのか!?」
ロウはなんともいやな顔をした。
「大丈夫。もういっしょにすべき灰はないのよ。灰のほとんどが消滅したからには復活はできない。だけど魂は永遠よ」
だから聖十字と封印をここにおさめて邪悪な魂を封印しなければ、とレイラは言った。
「ああ、もっともだ。べつに…」ロウは肩をすくめた。「びびったわけじゃないぜ、俺は」
レイラはにっと笑ってうなずき、それからぼくをふりかえった。
「ねえ、シド。鍵を…」
ぼくは長いことレイラを見つめた。
「どうしたの?」
レイラはそれが二度目に口にする言葉だとは気づいていない。当然だろう。
「いや…」
ぼくはロザリオをはずし、やや身がまえながら鍵穴にさしこんだ。そのとき覚えたざわめきは、時計台や泉や遺跡でのこと、つまりこれまで鍵がもたらしたことを単純に結びつけたからに過ぎない。そう思った。だからぼくはあえてそれをふりはらった。あのときといまは違う…。鍵をまわした。かちりと音がする。ぼくの頭のなかでもなにかが音をたてた。ぼくはそれを探しあてようとした。

レイラが棺の蓋に手をかけていた。

⇩190へ

254

窓から躍りこんだ閃光が聖十字を直撃。ぼくたちはふたたびはねとばされる。
はじけながら棺をかけめぐる青白い輝き。脈打つ光の網――。
どれくらいたったのか。やがて光の網は消え、目のなかにある十字が強烈な残像だということに気がついた。聖十字は消えている。棺はあった。すべてが静まりかえり、あたりの気配はまったく別のものに変わっていた。それがいったいどういう意味をもつのか。
ぼくたちが息をつめて見つめるなかで、棺の蓋がそろそろとひらき、白い指が縁をつかんだ…。

⇩エピローグ1へ

255

ズークの手にはロッドがあった。ぼくはムチすら使えない！　ますます足を締めつけるばかりだ。ズークは呪文を逆さにとなえはじめた…。
輝きが放たれたのではない。邪悪のオーラがロッドに向かってゆらめき流れ、そこからムチのかたちをとってぼくをとらえた。動けない。**（43にチェックがあれば、71と72をチェ**

ック、43にチェックがなければ71をチェック)。さらにロウがオノをぶらさげ、にじり寄る…。

⇩452へ

256

たて続けにムチをふるう。が、ことごとくかわされる。赤い目がずるそうに光る。やつらはぼくに狙いをつけたようだ。ムチの届かない位置から執ように隙を狙っている。ロウが奇声をあげて躍りこんだ。

(守護カードをめくれ)

●オノ ……………………⇩345へ

●コウモリ ……………………⇩388へ

●ムチ、バイブル、ロザリオ

5にチェックがあれば ……⇩388へ

5にチェックがなければ ……⇩345へ

257

十字架は大きく燃えあがった。デーモンは巨大な影となってのびあがり、その笑い声とともに教会の天井を突き抜けた。

十字架の残骸を前にぼくたちは強力な邪気を解放してしまったことを思い知った。

⇩302へ

258

もやのなかをそろそろと進む。行く手を阻むものはあらわれない。ただ、もやはますます濃くなるようだ。数歩先すら見えない。そのせいか、夢のなかにいるような、なにか妙なかんじが…。

⇩416へ

259

オノの一撃! 墓石に大きな亀裂が生じた。金縛りは解けた(**オノ上下…1ポイント**)。

⇩167へ

260

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。ぐらりとゆらぐ。さらに一撃、一撃…たて続けにムチを浴びせかける。が、ムチはふと勝手な意志を持ったか、血のしたたる剣に絡みついた。じりじりと引き寄せられる。どす黒い血が生きもののようにムチを伝ってくるのを見たとき、説明のつかない恐怖が噴きだした。手を離してしまいたい…あるいはこのまま力を抜いて…。しかしぼくはどうにか踏んばった。スカルトナイトの手から剣が落ちた。と、その姿は大きな炎の塊に変わった。ぼくはふたたびムチをふるいはじめた。喘ぎなが

ら打ちこみ続けた。突然、炎は闇に舞いあがった。そして大きくはじけて…消えた（ムチ…6ポイント）。

⇩336へ

261

ぼくたちは本道にもどった。

⇩87へ

262

（シドがとっさに手にした武器は？）

●ムチ……⇩432へ

●オノ……⇩355へ

●ロッド……⇩446へ

263

船はあやういところで傾きを止めた。しかし船底に衝撃があった。どのみち浸水してくるだろう。ぼくたちは甲板を這いのぼる…。

⇩143へ

264

ますます床にあふれかえる災いの使者。踏みつぶそうが叩きつぶそうが、そのおびただしい数をどうしようもない。メデューサ像に近づこうとすると、たちまちうねり押し寄せてくる。

（33と28について）

●28と33の両方にチェックがある……⇩156へ
●28にだけチェックがある……⇩201へ
●33にだけチェックがある……⇩311へ
●28にも33にもチェックがない……⇩90へ

265

ためしに影に向かってムチをふるった。すると分裂して…やはりコウモリの影。さらに一撃。と、またもや分裂。一撃ごとに数が増えるばかりだ。ふと思いついてレイラのロザリオを使った…。

「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

●ロザリオのポイントが6以上なら……⇩157へ
●5以下なら……⇩438へ

266

狡猾な顔のまんなかに一撃を浴びせた。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと打ち続けた。邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬い鱗は通路をこする。首はじりじりと退いているのだ。ぼくは一歩ずつ踏みこむ。やがて首は完全に通路から退いた。

血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。もうオノは届かない。が、強引に虚空を切り裂いてみせた。赤い輝きが闇に沈んだ（**26にチェックがあれば、オノ上…3ポイント**）。

ところが…。

⇩203へ

267

棺の上で二つめの小箱が炎と化した。残るはひとつ。雷鳴がいっそう激しさを増してとどろきわたった。姿なき棺の主の怒りなのか——。

しかしこのときムチの呪縛が解けた。

⇩60へ

268

ズークはすでに呪文をとなえていた。まず彼のロッドから輝きが走った。この一発で効

いた。ぼくとロウが加わるまもなく、泡をくったカラスどもは森のほうへ飛び去った（**バイブル上下…1ポイント**）。

⇩150へ

269

グールラビットは小柄なロウの倍はある。が、彼は小気味よくさばいている。断ち割れた胴体がはや、いくつも転がっている（**オノ上下…2ポイント**）。ズークは…。

（守護カードをめくれ）

●バイブル……⇩472へ　●コウモリ……⇩331へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

5にチェックがあれば……⇩331へ

5にチェックがなければ……⇩403へ

270

「退散！」

レイラがロザリオを突きだした。効かない。しかし…。

⇩46へ

271

（守護(しゅご)カードをめくれ）

●ロザリオ、コオモリ ……⇩347へ

●オノ ……⇩427へ

●ムチ（1か2にチェックが…）

あれば ……⇩347へ

なければ ……⇩427へ

●バイブル（15か16にチェックが…）

あれば ……⇩347へ

なければ ……⇩427へ

272

（守護(しゅご)カードをめくれ）

●オノ、ムチ

1にチェックがあれば ……⇩178へ

1にチェックがなければ …⇩427へ

●バイブル

15にチェックがあれば ……⇩178へ

15にチェックがなければ …⇩427へ

●ロザリオ、コウモリ（1か15のどちらかにチェックが…）

あれば ……⇩178へ

なければ ……⇩390へ

273

（さらにポイントが…）

●5以上なら……⇩50へ

●4以下なら……⇩428へ

274

すぐ目の前に立ちあがった泥のかたまりに向かってオノをふりおろす…。

（守護カードをめくれ）

●オノ……⇩34へ

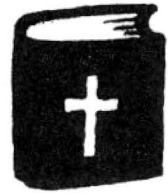
●コウモリ……⇩195へ

●ムチ、バイブル、ロザリオ……⇩136へ

275

墓石はますますせり出す。邪気は着々と増大している。なんとかくいとめねば！　ズークがあえぎながら呪文を口にする…。

●バイブルのポイントが6以上なら……⇩430へ

●5以下なら……⇩417へ

276

ロウがよろめきながらオノをふりあげる…。

⇩259へ

277

オノは血まみれの騎士の頭上に打ちおろされた。が、相手は微動だにしない。レイラがあっと息をのむ。スカルトナイトの姿がひとまわり大きくなった（**23をチェック**）。

「だめ…そのオノは呪いを受けている…逆に邪悪の力を注ぐだけよ！」

（代わって攻撃するのは？）

●シド……………………⇩505へ
●ズーク…………………⇩394へ

278

（シドの手にした武器は…？）

●ムチ……………………⇩410へ
●オノ……………………⇩395へ
●ロッド…………………⇩232へ

279

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。

ぼくはロッドを立てたまま自分の正面にかまえた。その頭にある小さな十字架を死神とのあいだにおくことで、自分を奮いたたせたのだ。

呪文をとなえる…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル……⇩396へ
●コウモリ……⇩217へ
●ムチ、オノ、ロザリオ
40と53の両方にチェックがある……⇩217へ
40にも53にもチェックはない……⇩396へ
40か53のどちらかひとつにチェックがある……⇩170へ

280

ロウはオノをふりあげた。だがぎくりとしたように立ちすくむ。彼はオノを凝視した。まるで異様なものを見るように。顔が歪み、腕がぶるぶると震えはじめた。ロウは奇妙な

姿勢のまま膝をついた…。

⇩492へ

281

神殿の跡らしい。回廊か中庭を思わせる柱列が残っている。水没をのがれた石畳にもいたるところに大小の亀裂や陥没がある。その暗い穴からなにかが見つめている。彫像だ。いったいなんの像だろうかとのぞきこめば、小波の底に歪んでしまった。ロウに続いてズークを失って以来、心のなかになにかひっかかるものを感じてしかたがない。ところがそれを凝視しようとすると、たちまちこの水中の彫像のようにかき乱れてしまう。そしてその歪んだ輪郭だけがいつまでもちらつくのだ。

「そう、そうだったわ…」

レイラが不意にぼくの腕をつかんだ。迷路のような疑念にとらわれていたぼくは、逆にレイラが驚くほどぎょっとした。

「ねえ」レイラはまじまじとぼくの顔を見つめた。

「わたしたちははじめからここへこなくてはいけなかったのよ」

ぼくがあいまいに首をふると、さもじれったそうにたたみかける。

「城には入口がないのよ。聞いたことない？　すべて内側から塞がれているって。だけど地下通路があるんだわ。その入口がここに…この遺跡のどこかにあるのよ。たしかにそう

281

●280ロウは、死神に向かってオノをふりあげた。しかし彼は、立ちすくみ腕を震わせながら膝をついた。

聞いたわ。だけど…」

ふと眉をひそめた。

「気にいらない。こんなことを忘れてただなんて」

だがこの奇妙な疑念はそのままになった。ぼくたちは、ふと、あるものに注意をひきつけられたのだ。大きな陥没口のなかに傾いている一枚岩のオベリスク…。

⇩440へ

282

ためしに影に向かってムチをふるった。すると分裂して…やはりコウモリの形の影。さらに一撃。と、またもや分裂。一撃ごとに数が増えるばかりだ。オノでも同じ。魔法もだ。

ふと思いついてレイラのロザリオを使った。

「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

●ロザリオのポイントが6以上なら……⇩157へ

●5以下なら……⇩26へ

283

狡猾な顔のまんなかに輝きが炸裂。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと呪文をとなえ続けた。ロッドからほとばしる輝きをまともに浴びながら、邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬い鱗は通路をこする。首はじりじりと

退いているのだ。ぼくは一歩ずつ踏みこむ。やがて首は完全に通路から退いた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。虚空にロッドを突き出し、強引に力を浴びせかけた。赤い輝きが闇に沈んだ**（35にチェックがあれば、バイブル上：3ポイント）**。

ところが…。

⇩313へ

284

不意に口がくわっと裂けた。ふたたび紫色の霧が目の前を覆う。だが首は通路から退いていた。もうムチは届かない。

血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。が、しばらくしてふっと闇に沈んだ**（ムチ…3ポイント、17をチェック）**。

⇩467へ

285

だがこのときムチの呪縛が解けた。ぼくは素早く跳ねた。跳ねながら大きくふりかぶり、邪悪の力にあやつられるズークに向かって叩きつけた…！

（ムチとバイブルのポイントについて…）

●ムチのポイントがバイブル上のポイントより大きい……⇩502へ

●ムチのポイントがバイブル上のポイントより小さい、または同じ……⇩362へ

286

ためらうな。相手はズークじゃない。異形の化物だ。ムチを…くそっ、脚をぎゅうぎゅう締めつけやがる！

●43にチェックがあれば ……⇩255へ
●43にチェックがなければ …⇩129へ

287

たて続けにムチをふるい、確実に4、5匹は倒した（**ムチ…1ポイント**）。ロウが奇声をあげている。

（守護カードをめくれ）

●オノ ……………⇩269へ
●コウモリ ……………⇩377へ
●ムチ、バイブル、ロザリオ
5にチェックがあれば ……⇩377へ
5にチェックがなければ …⇩426へ

288

輝きはたちまち消滅した。ズークはこんどはうめき声さえあげず、ただ蒼白になった。彼の白い魔法の力は、またもや十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ（**16をチェ**

ック）。

（1、2、3、14、15、16のうち…）

●4つにチェックがある ……⇩257へ

●3つ以下 ……………………⇩470へ

289

まるで同じだ。ズークのときと。がむしゃらにムチをふりまわしながらも、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸の数がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがるばかりだ。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかからロウをひっぱりだすことができなかった。ロウを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。後に残されたのは彼のオノだけ。仲間を奪われた怒りに震えながら拾いあげた（**27をチェック…以後シド自身がオノを使うことができます**）。

⇩48へ

290

ずぶずぶと沈みこむ。すぐかたわらで、泥のかたまりがのびあがる。泥水がしたたり落ちる。それに混じってなにかくねくねうごめくものが…。蛭だ！　鋭い痛みが腕にくいこむ。はっと見あげた。泥のかたまりが倒れかかってくる…。

「退散！」

レイラが叫(さけ)び、うごめくかたまりは反対側(はんたいがわ)に崩(くず)れた。それを頭(あたま)から浴(あ)びずにすんだのはさいわいだ。あたりを見(み)まわす。ほかのかたまりもその場(ば)にずるずると崩れている。ほっとして手足(てあし)に吸(す)いついたいくつかの蛭(ひる)を引(ひ)きはがす**（ロザリオ…1ポイント、69をチェック）**。

●68にチェックがあれば……………………⇩379へ
●68にチェックがなければ…………………⇩458へ

291

カラスどもはいきなり矢(や)のように襲(おそ)いかかってきた**（9をチェック）**。

⇩196へ

292

やにわにスカルトナイトは剣(けん)をふりあげた。ズークはかろうじてそれをかわした…が、その剣は邪悪(じゃあく)の力(ちから)を帯(お)びていた。どす黒(ぐろ)い血(ち)しぶきがほとばしった。焼(や)けた硫黄(いおう)でも浴(あ)びたように叫(さけ)びながらのたうちまわるズーク**（21をチェック）**。ぼくもロウも呆然(ぼうぜん)となった。

「怯(ひる)まないで！」レイラが叫(さけ)ぶ。「追(お)いつめている…もう少(すこ)しで邪悪(じゃあく)を断(た)ちきれるわ！」

（ここで攻撃(こうげき)を受(う)け継(つ)いだのは？）

●シド……………⇩306へ　●ロウ……………⇩393へ

293

ズークのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとロウは相当数叩き落としたはずだ。が、相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ズークの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群はいっせいに舞いあがった。ズークを取りこんだまま…。足の踏み場もないほどの残骸のなかで、ぼくたちは呆然とするばかりだ（**33をチェック**）。

⇩104へ

294

ゴーストの強力な集合体だ！　ようやく気がついた。この間、ぼくはまったく無防備だったのだ。はっと身がまえたときには、もやもやにのみこまれかけていた。

●33にチェックがあれば ……⇩432へ
●33にチェックがなければ …⇩370へ

295

ムチをかまえたとたん異様な感じがした。はっとして見つめる。重い…。なぜだ!?　どんどん重さを増してくる。ぴくりともしない。腕がぶるぶると震えはじめる。投げ捨てようにも手に吸いついたように離れないのだ。ぼくはムチをふりあげたまま膝をついた…。

⇩39へ

296

（手にした武器は？）

●ムチ……⇩264へ　●オノ……⇩171へ　●ロッド……⇩339へ

297

ぼくのまわりを飛びかっていたコウモリの影がさっと離れた。一か所にひしめきあい、もとの大コウモリに戻りかけている。あるいはここで一撃をくらわせば…。

●ムチで……⇩384へ
●魔法で……⇩41へ

298

さらに通路を先に進む。

●19にチェックがあれば……⇩510へ
●19にチェックがなければ……⇩449へ

299

ぼくはムチを浴びせ続けた。ゆらめきは波だつ水面のようにかき乱れた。その奥で身を

296〜300

よじるレイラの姿がいくつにもちぎれ、歪む…。ひどくいやな感じが痙攣的に襲いかかってくる。忍び笑いの気配にも似ていて、ゆらめきのなかにそれがふと浮かびあがるような気がするのだ。おそらく、正視できないための錯覚だったに違いないのだが…（**31をチェック**）。

ひときわ高い叫び…それははっきりとレイラの声だった…を聞いたとき、まるで自分自身が悪魔にとりつかれていたかのように、はっと正気づいた。ゆらめきは消えていた。

レイラが呆然とぼくを見つめていた。やがてその顔に広がったのは安堵の色だ。棺の上で3つ目の小箱が炎となって消えた。

ロウが、ズークが、やはり呆然と起きあがった。

「やったぜ…」ぼくは激しく喘いでいた。ひどい消耗だ。「やつによみがえる場所なんかどこにもないことを思い知らせてやったんだ」

外の嵐はおさまっていた。

⇩253へ

300

教会で見つけた文書のあいだに地図がはさみこんであった。どうにか読み取れる。それによれば、道は村はずれでふたつに分かれて森へ続く。一方には墓地があり、もう一方には時計台がある…。

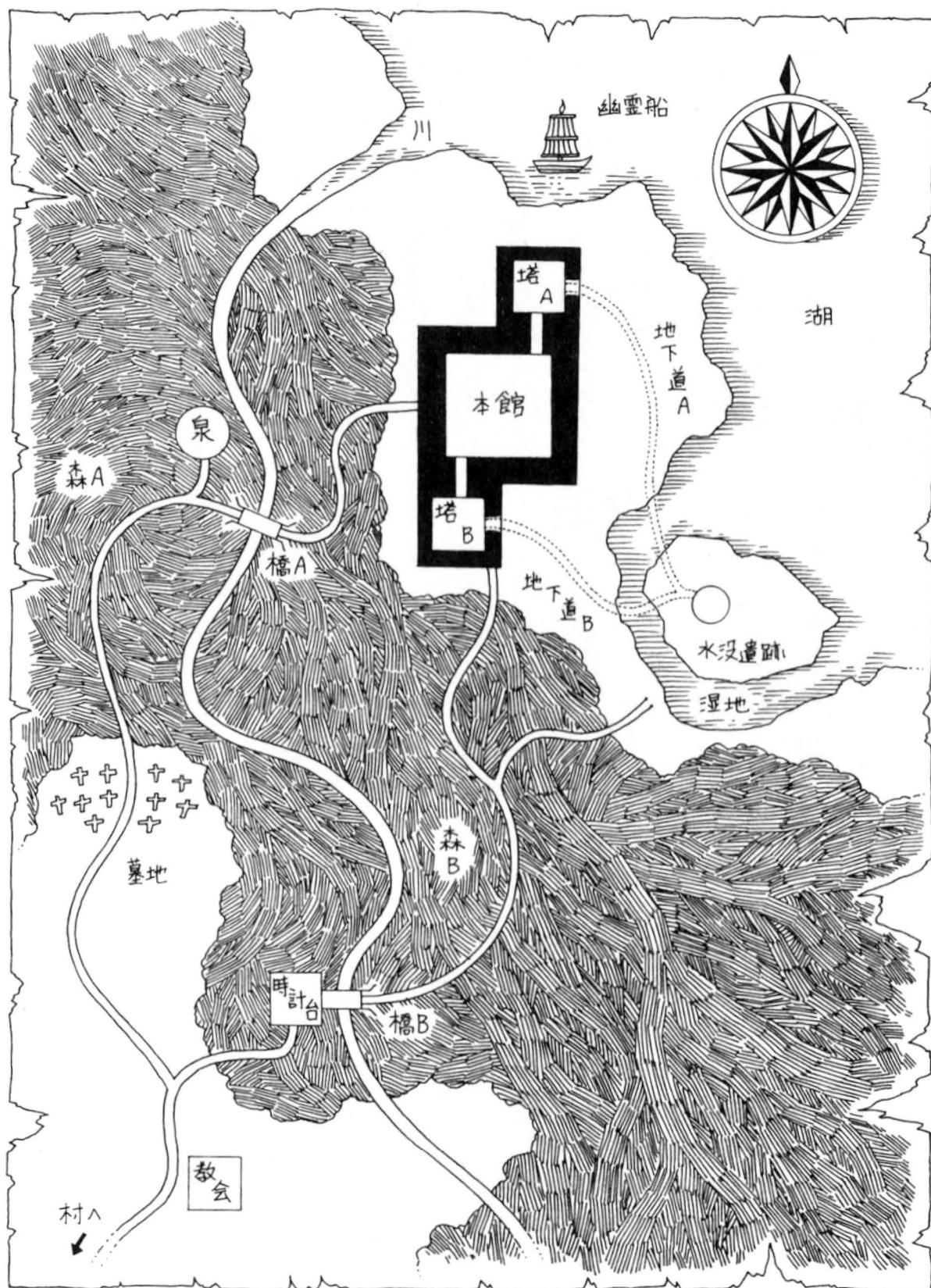
●墓地のほうへ……………⇩6へ
●時計台のほうへ……………⇩4へ

301

「退散！」
レイラがロザリオをかかげて叫んだとたん、グールラビットどもははじかれたように飛びのいた。未練げにじりじりと後ずさる。やがてそのうなり声も闇のなかに消えた（**ロザリオ…1ポイント**）。
⇩476へ

302

「ねえ、これを…」
十字架のあった壁の前でレイラが示したのは、明らかに周囲とは異なる石組みだ。その中央の石の角に小さなくぼみがある。
「鍵穴よ」
角にひとつずつある。
「合わせ鍵だな」ロウがしたり顔で言った。「おれの専門じゃあねえ」
「かまわないわ」レイラがにっと笑った。「こっちにも4つあるじゃない？　ちょうど」

301〜302

●300教会で見つけた文書のあいだに地図がはさみこんであった。どうにか読み取れる。

たいしたひらめきだ。レイラはまず自分のロザリオが穴のひとつにぴったり合うことを示してみせた。そしてぼくとロウのロザリオ、ズークがロッドの頭につけているそれを…。

石がはずれた。変色した紙束。癖のある文字で埋まっているが、黒ずんだ染みのためにほとんど判読できない。しかしぼくたちの先祖のだれかの手になるものであることは疑いない。バンパイア、悪魔、討伐、封印…といったような言葉が散らばっている。

『…が手にした聖十字の前に…呪詛の言葉を残し…滅びて…その肉体は灰と化した…しかるのちわれわれ4人は灰を4つに分け…その交わるところに…聖十字を配し封印を完成した…そのときふたたび…』

はっとした。いきなりステンドグラスが砕け散ったのだ。なにか悪ふざけのように次々に割れていく。壁の積み石がいくつかすごい勢いで飛び出した。さらに床石が跳ねあがる。わけもわからず転がるように外へ飛び出した。そのとたんに後ろで轟音。振り向いたときには教会の建物はがれきの山と化していた。

闇が大きくざわめいた。無数のコウモリ…いや、むしろ一体の巨大な怪物にさえ見える。

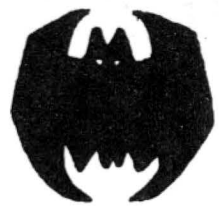
いったん散らされた邪悪の気はふたたび満ちて時をつげた。

黒々と横たわる森の向こうにかつて悪魔城と呼ばれた古い館がある。そのどこかに大きな棺があるはずだ。棺の蓋がゆっくりと開く。まず青白い指があらわれ…そこがただの不吉な夢だとはもはやだれも思ってはいない。

「悪魔城へ」
ぼくたちの宿命だ。

⇩300へ

303

「なんと」ズークが嘆息した。「こんなかたちでやられるとは…」
「これで終わりというわけじゃない」
レイラがつぶやいた。自分でそのことに気づいていないふうだった。
「…どういう意味です？」
「ええ？　ああ、つまり…」怪訝な顔で問い返され、はっとしたように言いなおす。「ここでいつまでもこうやってるつもりはない…そうでしょう？」
仲間を失い、ぼくたちはそれぞれ動揺している。だがバンパイアハンターの血はそんなことを許さない。ぼくたちは橋を渡ろうとテラスへ出た。
異変は終わりではなかった。ぼくが足を踏みだしたときだ。石橋を稲妻の勢いで亀裂が走った。ぼくはほとんど宙に泳ぎながらムチをひらめかせた。それがテラスの柱をしっかりとらえ、危うく墜落をまぬがれた。橋はぼくたちをあざ笑うかのように、ゆっくりと崩れ落ちていった。
「川沿いに下っていってみましょう」レイラが地図をにらみながら言った。「もう一方の道

のほうにも橋はあるはずよ」
⇩83へ

304

すぐ目の前に立ちあがった泥のかたまりに向かってムチを浴びせる……。

(守護カードをめくれ)

●ムチ……⇩405へ　**●コウモリ**……⇩195へ

●オノ、バイブル、ロザリオ……⇩350へ

305

ロウが素早くオノを打ちおろした。彼はやや顔をしかめた。湿ったいやな音がしたのだ。なにかがぼとりと転がった **(オノ上下…1ポイント)**。腐った腕だ。
⇩244へ

306

いちど地面を打って自分を奮い立たせる。血のしたたる剣をかまえるスカルトナイト。ぼくは素早くムチを繰り出した。

(守護カードをめくれ)

●ムチ……⇩431へ　**●コウモリ**……⇩168へ

●オノ、バイブル、ロザリオでムチのポイントが…
7以上なら……………⇩431へ
6以下なら……………⇩168へ

307

ロッドの先から輝きがほとばしる。青白い霊光はかすみ、奇怪な顔はいっそう異様に歪んで、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくなった。なにものかがロッドをつかみ、とてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白い霊光のなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。闇の奥から青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。
「…シド…シド!?」
階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた（53をチェック）。
⇩513へ

308

ロウに続いてズーク、レイラがよじのぼる。最後にぼくが舷側につかまると霧が流れた。幽霊船はふらふらと漂いだした。

「さっそく出航ときたぜ」
ロウがオノの柄をさぐりながら抜け目なくあたりをうかがう。操舵室はどこかしら、というレイラのつぶやきをとらえてズークが笑った。
「まさか親切な舵手がいるとは思えませんね」
甲板は足を運ぶたびにみしみしと鳴る。気をつけろよ、と言いかけたとたん、間抜けにも自分で踏み抜いた。周囲がすっかり腐っていたらしい。ロウたちが手をさしのべるのも間に合わず、ぼくはいっきに甲板を突き破って落下した。

⇩88へ

309

（シドが手にしたのは？）

●ムチ……⇩421へ　●ロッド……⇩24へ

310

土手をはいあがったとたん、ここがどこなのかすぐに気がついた。泉がある。水は涸れているので泉の跡と言うべきだが。落ちた橋の近くだ。
「ともあれ、律儀に送り返してくれたわけですね」
ズークがうすく笑った。

「ついてないぜ。どうせだったら向こう岸へ泳ぎつけばよかったんだ」
ロウは土を蹴った。森のなかを流れているこの川を越えないかぎり〝悪魔城〟にはたどりつけないのだ。村まで引き返してもう一方の道を行きなおすしかない。ともかく岸辺を離れた。森の道へ出るために涸れた泉を抜ける…。

⇩100へ

311

●オノを投げる ……………⇩383へ
●このままムチで ……………⇩156へ

312

ためしに影に向かってムチをふるった。すると分裂して…やはりコウモリの形の影。さらに一撃。と、またもや分裂。一撃ごとに数が増えるばかりだ。魔法をためしても同じ。ふと思いついてレイラのロザリオを使った。
「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

●ロザリオのポイントが6以上なら ……⇩157へ
●5以下なら ……⇩297へ

313

「ちくしょう！」

不意にもうひと組の邪悪な輝きが浮かびあがった。闇に棲む黒い龍は双頭だったのだ。いままで片割れの陰に身を潜めておいて、このときを待って伸びあがった。さっきのやつはおとりだったのだ。そのことに気づいたときにはぼくは向こう側の壁に叩きつけられていた。圧倒的な力のうねり。血の色を帯びた輝きはたっぷりと勝ち誇っていた。
闇の龍はかっと口をあけた。背後の虚空がわーんと鳴った。一瞬、闇が垂れこめる…。

⇩42へ

314

…効かない！　ムチはロウを包むゆらめきに触れたとたん、宙にはりついた。ぼくの体もまた…。ふたたび雷鳴がとどろきわたる。

⇩482へ

315

オノをふりかざしたロウに向かってロッドを突きだし、呪文を…。

（バイブルとオノのポイントについて…）

●バイブル上のポイントがオノ上のポイントより大きい…………⇩425へ
●バイブル上のポイントがオノ上より小さい、または同じ…………⇩111へ

316

陰険に物陰からこっちをうかがっている化け物ども。そいつらを挑発するように、ぼくはムチをふりあげ、まず思いきり石畳を鳴らした。うなり声が高まった。次々に飛び出してくるグールラビット。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩45へ　●コウモリ……⇩256へ

●オノ、バイブル、ロザリオ

5にチェックがあれば……⇩256へ

5にチェックがなければ……⇩287へ

317

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩457へ　●コウモリ……⇩179へ

●オノ、バイブル、ロザリオで、ムチのポイントが……

4以上なら……⇩457へ

3以下なら……⇩179へ

318

「だれかもういちど試してみて」レイラが叫んだ。「早く！　このロザリオの効果は長くない…ロウ！　ズーク！」

●ロウ…………………⇩181へ　●ズーク…………………⇩365へ

319

（さらにバイブルのポイントが…）

●5以上なら…………⇩428へ　●4以下なら…………⇩349へ

320

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

「あそこにも！」

続いていくつか立ちあがる。

「なんなんだ、こいつらは…」

あわててムチをかまえなおそうとし、深みに足をとられて転倒…！　**⇩290へ**

321

「行っちまえ！」
まっさきに飛びだしたぼくは、ほとんど盲滅法にムチをふるった。しかしこれが効いたようだ。ロウとズークが加わるまもなく、泡をくったカラスどもは森のほうへ飛び去った**（ムチ…1ポイント）**。

⇩150へ

322

ロウがオノをふりあげた。

●オノのポイントが6以上なら……⇩259へ
●5以下なら……⇩460へ

323

割れた兜のなかから血まみれの髑髏があらわれた。ロウのオノはそれをもまっぷたつに断ち割っていた。が、その腕はそろそろと剣をふりあげていた。ロウは驚くべき素早さでそれを受けとめた。弓なりにのけぞりながら押し返す。顔は歪み、それこそ悪魔さながらに吠えていた。一瞬のち、彼は跳ねあがった。そして再度オノを打ちおろした。スカルトナイトの手から剣が落ちた。と、その姿は大きな炎の塊に変わった。ロウはさらにオノをふるった。彼は喘ぎながら打ちこみ続けた。突然、炎は闇に舞いあがった。そして大きく

はじけて、消えた（**オノ上下…4ポイント**）。

⇩336へ

324

（シドがとっさに手にした武器は？）

●ムチ……⇩432へ

●オノ……⇩355へ

325

大きく飛びあがると同時にムチを一閃、まず曲刀をふりかざしたやつの頭蓋骨を粉砕…一体め！　返す勢いで長剣をかつぎあげたやつの肋骨を解体…二体め！　着地後すぐさま身をかがめ、レイピアを突きだしてきたやつの腰椎を分断…三体め！（**ムチ…1ポイント**）ところが、横あいから突きだされたダガーをかわしそこねて転倒。そこへ別の一体がグラディウスをふりおろした。苦痛に息が詰まる…。しかし目をあけたときには胸をえぐったはずの小剣はない。骸骨剣士の姿もまた…（**38をチェック**）。

⇩491へ

326

死神はその黒いローブをひろげた。ロウを迎え入れるかのように。一瞬、彼は喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくら

む深淵だった。ロウは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。彼はオノをにぎりなおした。

(守護カードをめくれ)

●オノ

オノのポイントが12以上……⇩185へ　11以下……⇩465へ

●ムチ、バイブル

オノのポイントが14以上……⇩465へ　13以下……⇩280へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩280へ

327

操舵室だ。

入口の前でレイラはぼくの手を取り、扉のほうへ近づけた。なにかに押し返される。

「入れないのよ。ほら……」

「なかにあいつが……」

脇にある小窓からのぞくと、何者かが舵を操っているのが見えた。黒いローブのようなものをまとった、背の高い何者か。まったくふりむかない。

「湖上遊覧はおしまいみたいよ。親切にも送ってくれるらしいけど、いったいどこへ……」

レイラが唇の端をつりあげた。ますます深い霧。船がどこへ向かって進んでいるのか知るすべもない。

やがて船は止まった。と、操舵室の扉がはじけるように開いた。ぼくたちはよろめく。操舵室のなかからうねり寄せる強い邪気（**37をチェック**）。

黒いローブ姿の舵手がゆっくりとふりむいた。

「…死神！」

たっぷりとした頭巾の奥で、ひび割れた髑髏が声のない笑いをたてている。

（攻撃をしかけたのは？）

●シド ……………………⇩89へ　●レイラ ……………………⇩218へ

328

命中した、と思った。が、うねり寄せた邪気の波。ぼくは石畳に叩きつけられ、レイラのただならぬ叫びを聞いた。「なぜ…」

メデューサ像がオノをにぎりしめている…！（**44をチェック**）

⇩437へ

329

「要するに」ぼくは扉を見あげた。「あそこへ行かせたくないわけだ。ということは…」
この先に聖十字があるに違いない。もういちどそろそろと階段をのぼる。扉に鍵はない。
そっと扉に手をかけた。しかし…やつが黙って見過ごすだろうか。自分にとって唯一最大の脅威である聖十字をぼくが手にすることを。やつは息をつめてうかがっているのか？
それともなにか別の罠でも…。
扉は簡単にひらいた。

⇩466へ

330

溢れだした水に追われ、幅の広い階段をかけあがる。神殿のテラスのような場所だ。そこにたたずむ影。彫像なのだが、なんの彫像なのかを見取るより先に、ひどく不吉なものを感じとった。
「災いの化身…」
それはメデューサの全身像だ。レイラはつぶやく。髪の毛のかわりに蛇をひしめかせ、おそらくその数だけ邪悪をふりまくに違いないのだ、と。
言い終わらないうちだった。頭の蛇がのたくりだした。鎌首をもたげ、くねらせ、しゅうしゅうという耳ざわりな音をたててひしめきあった。そしてぼたぼたとこぼれ落ちた。

レイラがロザリオをかざすと、床にあふれかえった蛇どもはこそこそとそこいらの隙間に逃げ込んだ(**ロザリオ‥1ポイント**)。だが彫像の頭はますます膨れあがる。蛇はあとからあとからわきだした。きりがなかった。そのありさまにはどこかぼくたちを愚弄しているようなところがある…。

「くそっ」

(28と33について)

●28と33の両方にチェックがある⇩264へ　●28にだけチェックがある⇩125へ

●33にだけチェックがある…⇩25へ　●28にも33にもチェックはない…⇩296へ

331

「なんと…」

闇に吸いこまれるように輝きが途絶えた。だがぼくのムチとロウのオノの前にグールラビットどもはじりじりと後ずさりするほかなかった。未練げなそのうなり声もやがて闇に消えた。

⇩476へ

331

●330災い(わざわ)の化身(けしん)、メデューサの像(ぞう)。!? 突然(とつぜん)、像(ぞう)の頭(あたま)の蛇(へび)が鎌首(かまくび)をもたげ、いやな音(おと)をたてていしめきあった。

332

オノのうなりが呼んだかのように、ふたたび閃光。それはデーモンを直撃した（オノ上下…4ポイント）。

⇩415へ

333

輝きはたちまち消滅した。ズークはこんどはうめき声さえあげず、ただ蒼白になった。レイラのロザリオの力で封じこめられているにもかかわらず、彼の白い魔法の力はまたもや十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ（15をチェック）。

⇩32へ

334

まずロウのオノがひらめいた。脳みそが砕け散る。さらに一撃。上半身がちぎれて跳びあがる。ぼくも休みなくムチを浴びせる。腐った肉を引き裂き、次々になぎ倒す。そこへズークの放つ輝き。ゾンビどもはどろどろの肉塊となってはじけ散る…。

ほどなく一体残らずかたづけた（オノ上下…2ポイント、ムチ…1ポイント、バイブル上下…1ポイント）。

⇩258へ

335

「――!!」
一歩踏みこんだとたん、ぼくは彼らの苦痛を知った。しばらく息がつまり、目はくらんだ。どこからか剣が飛んできて腹を貫いた、そう思った。が、そろそろと目をあけてさぐってみれば、傷ひとつない。それでもぼくは激しく喘いだ**（11をチェック）**。

⇩487へ

336

「封じこめたわ…」
レイラがほおっと肩で息をした。
「しかしこれはほんの一部…」
ズークはそっとバイブルを撫でた。
「どのみち…」ロウがオノをかつぎあげた。
「親玉がお出ましになるさ」
もやは急速に薄れていた。ぼくたちは墓場のはずれまで来ていることに気がついた。森が迫っている。

⇩53へ

337

ロッドの先から輝きがほとばしる。青白い霊光はかすみ、奇怪な顔はいっそう異様に歪んで、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくなった。なにものかがロッドをつかみ、とてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白いなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。闇の奥から青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。

「…シド…シド!?」

階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた（**55をチェック**）。

⇩513へ

338

突然、体が泳いだかと思うと大きく投げ出された。立ちあがろうとして、床が傾いていることに気がついた。船が沈んでいる…！

（13と24について…）

●両方にチェックがあれば…⇩263へ　●24にだけチェックがあれば⇩123へ

●両方ともチェックがなければ……⇩434へ

337～342

339

ますます床にあふれかえる災いの使者。踏みつぶそうが叩きつぶそうが、そのおびただしい数をどうしようもない。ロッドをにぎり、メデューサの像にむかって呪文を放った…。

⇩186へ

340

短い階段の先は2つに分かれている…。

●右側の通路へ……………⇩145へ
●左側の通路へ……………⇩27へ

341

もういちど扉のほうをふりかえる。

「引きずりこもうとしたってむだだからな…」

そろそろと通路のほうへ向かう。阻むものは…いないようだ。

⇩422へ

342

不意に口がくわっと裂けた。龍の背後の虚空がわーんと鳴った。ぼくはロッドをかまえた姿勢のままで凍りつく。血の色を帯びた輝やきがぼくを打った。

一瞬、闇が垂れこめる…。 ⇩42へ

343

雷鳴。姿なき棺の主の勝ちどきか――。ロウのまわりに邪気のうねりがいっそう強まった。

●42にチェックがあれば ……⇩482へ

●42にチェックがなければ …⇩453へ

344

オーラの触手がはじけ、奇怪な叫とともにズークが倒れた。棺の上で小箱のひとつが炎と化した。ズークを包んでいたゆらめくものが退きはじめる。が、あらゆるものが怒りのうねりに覆われた。邪悪のオーラは激しくかき乱れ、そのなかでこんどはロウがいびつに首をねじ曲げた。腕をふりあげる。オーラが燃え立ち、そこに形をつくりだした…。

(対抗するシドは…)

●魔法で ……⇩95へ

●オノで ……⇩239へ

345

ロウはたちまち数匹を倒した(**オノ上下…1ポイント**)。が、断ち割られた仲間の胴体にひるみもしない。いっそう凶暴化したように、爪をふりたて、跳ねあがった。ズークのロッドから輝きがほとばしったが…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル……⇩454へ
●コウモリ……⇩414へ
●ムチ、オノ、ロザリオ
5にチェックがあれば……⇩414へ
5にチェックがなければ…⇩454へ

346

「このやろう!」

ロウが叫びながら跳びあがった。オノがその手を離れ、デーモンに向かって飛んでいった。が、見えない壁にはじき返された。もしロウが抜群の身軽さを備えていなければ、みずからの道具でまっぷたつに断ち割られていたはずだ。

十字架は3つ目の炎をあげた(**14をチェック**)。

「退散!」

なかば絶望的にレイラがロザリオを突きだした。

⇩46へ

347

「くそったれ！」
ロウははじき返されたオノを蹴とばした。デーモンにはまるで効かず、十字架の炎がさらに増えただけなのだ（**14をチェック**）。

（1、2、3、14、15、16のうち…）

●4つにチェックがある……⇩257へ

●チェックは3つ以下………⇩470へ

348

「な…」
だれもが呆然と、十字架の一端が燃えあがるのを見あげた（**2をチェック**）。

⇩470へ

349

ロウのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとズークは相当数やっつけたはずだ。相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ロウの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群はいっせいに舞いあがった。ロウを取りこんだまま…。足の踏み場もないほどの残骸のなか

で、ぼくたちは呆然とするばかりだ。**(28をチェック)**。

⇩303へ

350

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

「あそこにも！」

続いていくつか立ちあがる。

「なんなんだ、こいつらは…」

あわててムチをかまえなおそうとし、深みに足をとられて転倒…！

⇩290へ

351

「ぎゃっ!!」

ロウはオノをふりあげたまま体を折り、そのままよろよろと膝をついた。まるで剣かなにかのひと突きをくらったように見えた。そしてあたかも実際にそうであるかのようにうつろな目を見開き、そろそろと自分の腹をさぐったのだ。掌が血糊にまみれていないのが信じられないようだ。それでも彼は激しい端ぎを止められないでいた**(10をチェック)**。

(次に挑んだのは？)

●シド……⇩474へ　●ズーク……⇩228へ　●レイラ……⇩352へ

352

「退散！」
レイラがロザリオをかかげた。墓石に亀裂が走る。ぼくたちを捉えた力が一瞬ゆるんだが墓石はますますせり出す。邪気は増大しているのだ。なんとかくい止めねば！
（ロザリオ…1ポイント）。
（だれが）
●シド……⇩138へ　●ロウ……⇩276へ　●ズーク……⇩459へ

353

呪文とともに輝きがほとばしる。
（守護カードをめくれ）
●バイブル……⇩408へ　●コウモリ……⇩214へ
●ムチ、オノ、ロザリオでバイブルのポイントが
7以上なら……⇩408へ　6以下なら……⇩214へ

354

まるで同じだ。ロウのときと。がむしゃらに腕をふりまわしながらも、ぼくはなかば絶望していた。足もとに転がる残骸がどれだけ増えようと、コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがるばかりだ。どんなに頑張っても、やはり、黒いうごめく塊のなかからズークをひっぱりだすことができなかった。ズークを取りこんだまま、その一群がいっせいに舞いあがる。後に残されたのは彼のロッドだけ。仲間を奪われた怒りに震えながら拾いあげた（**34をチェック…以後シド自身が魔法を使うことができます**）。

⇩215へ

355

くっつきあったいくつもの顔が、ぞっとする変貌を見せつけながら膨れあがる。ぼくはオノをふりあげる。だが青白い霊光が強まり、その一端が触手のように伸びてくる。邪気の侵食。金縛りの戦慄（**66チェック**）。この邪悪の霊体にオノを叩きこむには、猛烈な意志と力とが必要だった。

（守護カードをめくれ）

●オノ

50にチェックがある　………⇩420へ

50にチェックがない　………⇩169へ

●ムチ、バイブル、ロザリオ

49か50にチェックがある　⇩420へ
49にも50にとチェックがない　⇩169へ
●コウモリ……………………⇩233へ

356

死神はたたずんでいるだけだ。さあ、こちら側へ…と、さらにローブをひろげる。さあ、邪悪の側へ…と。底知れぬ力を秘めた誘惑だ。ぼくはふたたびたじろいだ。ひろがる闇をはらいのけようと、がむしゃらにムチをふりまわす…。

ふと、大きく喘いでいる自分に気がついた。これは恐怖にかられた無意味なあがきではないのか。ぼくはゆっくりと体を起こした。闇に向かって歩む。自分の力を信じるべきなのだ…。闇に浮かぶ髑髏と対峙した。ぼくは決然とムチを浴びせる――。

髑髏は砕けた（**ムチ…6ポイント**）。

⇩447へ

357

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ぼくは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。ぼくはオノをにぎりなおした。

(守護カードをめくれ)

●オノ

50か63の一方、または両方にチェックがある……⇩155へ

50にも63にもチェックはない……⇩249へ

●ムチ、バイブル

50か63の一方、または両方にチェックがある……⇩508へ

50にも63にもチェックがない……⇩155へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩508へ

358

死神はその黒いローブをひろげた。ズークを迎え入れるかのように。一瞬、彼は喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ズークはロッドを立てたまま自分の正面にかまえた。その頭にある小さな十字架を死神とのあいだにおくことで、自分を奮いたたせたのだ。呪文が流れる…。

(守護カードをめくれ)

●バイブル……⇩498へ　●コウモリ……⇩217へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

バイブルのポイントが12以上……⇩498へ
11以上……⇩170へ

359

「シド…」

レイラはメデューサ像のなくなった台座を見つめていた。その妙に落ち着いた声に含まれたあらゆるものを、ぼくは即座に理解した。台座には鍵穴があったのだ。

「灰よ…あれは灰だったんだわ…そしてこれも…」

ズークが泉で、ロウが時計台で、たしかになにかを手にしたことがいまとなってはっきりと思い起こされた。

「われわれははじめからやつの手のうちにあった…やつに導かれている…」

ぼくもまた自分が奇妙なほど冷静に考えていることに気がついていた。そう、はじめからあきらかなことだったのだ。どうしても思いだせないでいたことをやっと思いだしたときの、肩の荷を降ろしたような安堵感。心のなかでひっかかっていたのはこれだったのだ。教会で手に入れた先祖のだれかが書き残した文書のこの部分…。

『…聖十字の前に…呪詛の言葉を残し…滅びて…その肉体は灰と化した…しかるのちわれわれ4人は灰を4つに分け…その交わるところに…聖十字を配し封印を完成した…』

359

それは、あるいは、いく通りにも読みとることが可能だった。レイラはこう読み解いた。
「追いつめられたドラキュラはきっといつの日にか復活すると予言したのよ。邪悪なる魂のすべてをかけて。そうしてやむなく滅ぼされた。4人のバンパイアハンターはその忌まわしい呪詛に対抗すべき手段を講じずにはいられなかった。それでドラキュラの灰を4つに分けて封印した。しかも聖十字とともに…」
レイラはまさに霊感を発揮した。
「だけど魂は永遠なのよ」
「しかも強大だ」
それがぼくたちに影響を及ぼした。邪悪な魂はふたたび肉体を得ようとしている。それには灰が必要だ。灰をひとつにしなければならない。だが封印を解けるのはぼくたちだけ…バンパイアハンターの血を継ぐぼくたちだけが聖十字の封印を解くことができるのだ。
「上出来だ。ぼくたちに復活の手引をさせようとは！」
「つまりこれは復讐でもあるのだわ。自分を滅ぼしたものに対する…」
そのことをぼくたちがはっきりと認めたいま、どうするべきか。目の前にある3つめの灰を…。

⇩250へ

360

一方の壁が大きく崩れているのにでくわす。向こう側は暗い虚ろ。かなりの広がりがあるようだ。深みからかすかな水音。地下水路だろうか。ふとのぞきこんだ。赤い輝きが2つ…。それが邪悪な光を帯びた目であることに気がつくのが遅すぎた。激しい水音とともに、なにか巨大なものがせりだしてきた。あわてて飛びのいたものの、紫がかった霧が噴きあがり、そのまま反対側の壁によろめきもたれるのがせいいっぱいだった**（18をチェック）**。

壁の大穴から邪悪な目がぼくを見つめている。ようやくそいつがなんなのかわかった。黒い鱗におおわれた龍なのだ。その巨体を想像するとぞっとする。だが陰険なやつだ。まるで罠にかかった獲物の弱りぐあいを調べるような狡猾さ。ぼくが動きかけると、かっと口をあけた。紫の霧はこいつの呼気だったのだ。いったいどんな毒を含んでいるのか。たちまち身がすくむ。逃げだしたくてたまらない。なのにあまりの恐怖に体がうごかない。まさにそんなありさま…なぜだ!?　ぼくは怯えてなどいやしない。なのになぜ…そう、これは邪気なのだ。悪意をたっぷりと含んだ邪気。このまま血の色を帯びた目に見入られてはだめだ！　おののきを強引にねじふせ、奮い立つ…。

（28と33について）

●28と33の両方にチェックがある……⇩400へ

360

●360邪悪な赤い輝きの二つの目がぼくを見つめている。巨大な龍だ！　紫の霧は、こいつの呼気だったのだ。

●28にだけチェックがある……………⇩158へ
●33にだけチェックがある……………⇩13へ
●28にも33にもチェックはない……………⇩109へ

361

「ちくしょう!」
不意にもうひと組の邪悪な輝きが浮かびあがった。闇に棲む黒い龍は双頭だったのだ。いままで片割れの陰に身を潜めておいて、このときを待って伸びあがった。さっきのやつはおとりだったのだ。そのことに気づいたときにはぼくは向こう側の壁に叩きつけられていた。圧倒的な力のうねり。血を帯びた輝きはたっぷりと勝ち誇っていた。
闇の龍はかっと口をあけた。背後の虚空がわーんと鳴った。一瞬、闇が垂れこめる……。

⇩499へ

362

…効かない!　ムチはズークを包むゆらめきに触れたとたん、宙にはりついた。ぼくの体もまた…。ふたたび雷鳴がとどろきわたる。

⇩412へ

363

（ムチを封じられたシドが手にした武器は？）

●オノ……⇩376へ　●ロッド……⇩94へ

364

「グールラビットよ…」
レイラが言う。邪気によって生まれた醜い獣だ。異様に大きな牙を持っている。こいつに喰われたものはおぞましいゾンビとなって闇をうろつくのだと。
「見ろよ」
ロウがそっとうながす。周囲のがれきの陰にいくつもの赤い目が…。

●レイラのロザリオの力で突破……⇩301へ
●戦う……⇩316へ

365

呪文とともに放たれた輝きがデーモンを包みこむ…！

●15にチェックがあれば……⇩288へ　●15にチェックがなければ……⇩193へ

366

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

「あそこにも！」

続いていくつか立ちあがる。

「いったい、こいつらは…」

なんだか知らないが、あらわれるたびに呪文をとなえて輝きを浴びせていると、やがて鳴りをひそめた（**35にチェックがあれば、バイブル上…2ポイント**）。

●68にチェックがあれば ……⇩379へ

●68にチェックがなければ …⇩458へ

367

墓石はますますせり出す。邪気は着々と増大している。なんとかくい止めねば！ ロウがよろめきながらオノをふりあげる…。

●オノのポイントが6以上なら ………⇩259へ

●5以下なら ………⇩351へ

368

ズークもまた同じ苦痛に喘いだ（**21をチェック**）。 **⇩487へ**

369

オノがスカルトナイトの兜を断ち割った……！

（守護カードをめくれ）

●オノでオノのポイントが…

7以上なら……⇩182へ　6以下なら……⇩152へ

●ムチ、バイブルでオノのポイントが…

8以上なら……⇩182へ　7以下なら……⇩152へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩152へ

370

（シドがとっさに手にした武器は？）

●ムチ……⇩432へ　●ロッド……⇩446へ

371

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ぼくは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな

力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。ぼくはムチをにぎりなおした。

(守護カードをめくれ)

●ムチ

51か52にチェックがある、または両方にチェックがある……⇩295へ

51にも52にもチェックはない……⇩356へ

●オノ、バイブル

51か52にチェックがある、または両方にチェックがある……⇩79へ

51にも52にもチェックはない……⇩295へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩79へ

372

輝きが化石龍の頭骸を襲う。首がのたうつ。さらに呪文。輝きが膨れあがり…はじけた！炎に包まれ舞い散る骨片(**35にチェックがあれば、バイブル上…3ポイント**)。頭骸を失った首は崩れ落ちる。たちまちもういっぽうの首が抜け出した。その咆哮を思わせる地鳴り。水しぶき。巨大な骨格がのびあがる。だがたちまち陥没口へ。首の片割れを失った骨龍は水中へ消えた。それとともに起きたあらたな亀裂と陥没。ぼくたちは逃れるのがせいいっぱいだった。

⇩330へ

373

ためしに影に向かってムチをふるった。すると分裂して…やはりコウモリの形の影。さらに一撃。と、またもや分裂。一撃ごとに数が増えるばかりだ。オノでも同じ。ふと思いついてレイラのロザリオを使った…。

「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

●ロザリオのポイントが6以上なら……⇩157へ

●5以下なら……⇩91へ

374

聖十字は黒い布切れの上に置かれていた。それはもちろん…このときぼくにレイラさながらの霊感がひらめいた…マントなのだ。かのヴラド・ツェペシュ公ドラキュラの。やつがまき散らす邪悪と恐怖。マントはまさにその象徴にほかならない。そこに聖十字がずしりと乗っている。聖なる暗示だ。ここでぼくが聖十字を手にすれば、邪悪な力を封じ込めた枷をはずすことになりはしないか。それがためらった理由のひとつだ。もうひとつは…これは実際のところ単純な問題なのだが…聖十字の上に大きな蜘蛛が足を広げていたからだ。

ぼくはこの不吉な状況をじっとにらんだ。聖なる暗示を崩すことはやむを得ない。棺桶

の蓋はもう開いているのだから。閉じなおすには聖十字が必要なのだ。そして蜘蛛は、もちろん、追いはらわねばならない。ムチを曲げてそっとつついた…。

●42にチェックがあれば……⇩**494へ**

●42にチェックがなければ……⇩**423へ**

375

ぼくはムチを浴びせ続けた。ゆらめきは波だつ水面のようにかき乱れた。その奥で身をよじるレイラの姿がいくつにもちぎれ、歪む…。だがぼくが引き裂いているのはレイラではない、姿なき棺の主の邪悪な魂だ。

ひときわ高い叫び…それははっきりとレイラの声だった…を聞いたとき、まるで自分自身が悪魔にとりつかれていたかのように、はっと正気づいた。

ゆらめきがはじけ散った。

レイラが呆然とぼくを見つめていた。やがてその顔に広がったのは安堵の色だ。棺の上で3つ目の小箱が炎となって消えた。

ロウが、ズークが、やはり呆然と起きあがった。

「やったぜ…」ぼくはにっと笑ってムチをしごいた。「やつによみがえる場所なんかどこにもないことを思い知らせてやったんだ」

外の嵐はおさまっていた。 ⇩253へ

376

ズークは腕をさしのべた。邪悪のオーラがゆらめき流れ、触手のように伸びてきた。それに向かってオノをふりおろす…。

（オノとバイブルのポイントについて…）
●オノ上のポイントがバイブル下のポイントより大きい……⇩344へ
●オノ上のポイントがバイブル下のポイントより小さい、または同じ……⇩160へ

377

なぜかロウの攻撃はことごとくかわされている。数匹のグールラビットは完全に彼に狙いをつけたようだ。赤い目をずるそうに光らせ、オノの届かない位置から執ように隙を狙っている。ズークが援護に転じた。

（守護カードをめくれ）
●バイブル……⇩454へ ●コウモリ……⇩414へ
●ムチ、オノ、ロザリオ
5にチェックがあれば……⇩414へ

5にチェックがなければ……⇩**454へ**

378

「この役立たず!」
罵りながらムチを叩きつけた。デーモンにはまるで効かず、十字架の炎がさらに増えただけなのだ(**1をチェック**)。

(1、2、3、14、15、16のうち…)

●4つにチェックがある……⇩**257へ**

●チェックは3つ以下……⇩**470へ**

379

足もとが軽くなった。あいかわらず水は膝ぐらいまであるが、底なし沼のような泥湿地ではない。まもなく、そこが湖の浅瀬だということに気がついた。
「残念ね」
レイラが皮肉っぽく肩をすくめた。
「ああ。すっかり方向を間違ったようだな」
傾いた壁の一部。折れた石柱の列。急速に霧がはれたあと、見なれぬ建築物の残骸が目

の前にある。遺跡だ。

「あるいは…」

その先をレイラは言わなかった。

⇩56へ

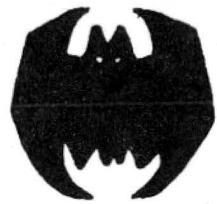
380

船倉の奥まった通路の先にもうひとつ階段を見つけた。だがその手前で足を止める。湿気が幾重ものまだら模様となってにじみだした壁板に、それとは別の染みを見つけたからだ。ぼうっとしたほの白い輝きを帯びていた。それはじわじわと広がるばかりか、壁板から浮き出し、漂いはじめた。煙のように形はなかった。が、拡散してしまうことはなく、ひとつのかたまりのまま、もやもやともつれあっていた…。

なにか見える。ぼくは目を凝らした。浮かんでは消え…ぼくの目はけんめいにそのおぼつかない輪郭を見定めようとしていた。

突然、それをはっきりととらえた。顔だ。おそろしく歪み、崩れ、たがいに癒着しあった複数の顔…。

（13と24について…）

●13と24の両方にチェックがある……⇩154へ
●24だけにチェックがある……⇩294へ

●両方ともチェックがない……⇩199へ

381

死神はその黒いローブをひろげた。ロウを迎えるかのように。一瞬、彼は喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ロウは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。彼はオノをにぎりなおした。

（守護カードをめくれ）

●オノ……⇩185へ
●コウモリ……⇩280へ
●ムチ、バイブル、ロザリオ
オノのポイント12以上……⇩185へ
11以下……⇩465へ

382

（シドが手にしたのは？）

●ムチ……⇩421へ
●オノ……⇩507へ

381〜382

●380ぼくは、目を凝らす。顔だ！　おそろしく歪み、崩れ、たがいに癒着しあった複数の顔……。

383

ぼくの足は蛇のかたまりて膨れあがった。鋭い痛み。思わずわめく（**46をチェック**）。

「退散！」

レイラの叫びでずるずると滑り落ちる（**ロザリオ…1ポイント**）。そのすきにメデューサの像に向かってオノを投げた…。

⇩**328へ**

384

まだ大コウモリの形にもどりきらず、ひとかたまりでもやもやうごめいている黒い影に向かって素早く一撃…！

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩**398へ**　**●ロザリオ**……⇩**172へ**

●オノ、バイブルで

ムチのポイントが16以上なら……⇩**398へ**　**15以下なら**……⇩**172へ**

●コウモリ……⇩**251へ**

385

不意に口がくわっと裂けた。龍の背後の虚空がわーんと鳴った。ぼくはオノをふりあげ

た姿勢のままで凍りつく。血の色を帯びた輝きがぼくを打った。一瞬、闇が垂れこめる…。はっと気づいたときには龍の姿はない。その上…手のなかからオノまで消えている！（44をチェック）

⇩481へ

383〜387

386

ぼくはオノをふりあげる。なにかにぐっとつかまれた。動かない。ロウもまた邪悪のオノをふりあげていた。そのまわりでオーラが波うった。ロウがオノを投げつける…実際にぼくを襲ったのはひろがる波だ…同時にぼくの手のなかからオノが勝手に飛び出し、ロウの手におさまっていた（44と57をチェック）。

⇩343へ

387

棺のなかは…まるでかすみがかかったように…よく見えなかった。ズークが小箱の中身をそそいだ。続いてロウ。彼らもいまは虚な目でのろのろと動くだけ。レイラが3つめの灰をそそぎ、そしてぼくが蓋を閉じた…。

とたんに見えない糸がぷっつり切れた。ゴミかなにかのように大きく跳ねとばされ、ぼくたちはようやく正気づいた。

「なんてこった…」

たがいに顔を見あわせ、言葉もなかった。雷鳴はいっそう激しくとどろきわたり、稲妻がその巨大な棺に祝福を与える。閃光のなか、棺はまるで違うものに見えた。脈動する異様な生きもの！

「よみがえる…」

だれかがつぶやいた。肌は粟だち、毛が逆立った。荒れ狂う風のせいではない。すぐそこにあるのだ、ぜいぜい鳴る喉が。息づかいが。

「…聖十字を」

レイラが喘いだ。そう、そうなのだ、いかにあがこうとむだだ。聖十字のあるかぎり闇の世界にとどまるしかないのだ。

棺の蓋がことりと鳴った。

⇩238へ

388

グールラビットどもはロウのオノをかわした。ズークのロッドから輝きがほとばしったが…。

（守護カードをめくれ）

●バイブル……⇩484へ　**●コウモリ**……⇩443へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

5にチェックがあれば……⇩443へ

5にチェックがなければ……⇩484へ

389

輝きはたちまち消滅した。ズークはこんどはうめき声さえあげず、ただ蒼白になった。彼の白い魔法の力は、またもや十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ**（15をチェック）**。

（1、2、3、14、15、16のうち…）

●4つにチェックがある……⇩257へ

●チェックは3つ以下……⇩470へ

390

「なんてこった」

ロウははじき返されたオノを恐ろしいもののように見つめた。デーモンに通じなかったばかりか、さらに悪い結果をもたらした。十字架の一端が燃えあがったのだ**（14をチェック）**。**⇩17へ**

391

ロウは自分のロザリオを鍵穴にさしこんだ。彼がなにか手にして立ちあがったとき、コウモリどもはいっせいに彼のまわりに群がり寄った。ぼくはその小さな悪魔どもを追い散らそうとムチをふりまわした…。

●ムチのポイントが8以上なら……**⇩289へ**　**●7以下なら**……**⇩135へ**

392

ぼくはたて続けにムチを浴びせかける。ロウはめまぐるしく飛び跳ねる。ズークは休みなく呪文をとなえ、輝きを放つ…。ところが、腕がちぎれようが脳みそが砕け散ろうが、ゾンビどもは倒れない。倒れても起きあがる。上半身と下半身が別々になってさえ、なおもにじり寄ってくる**（8をチェック）**。レイラがたまらずロザリオを突き出した。

「退散！」**（ロザリオ…1ポイント）**

不器用に後ずさりしながら、もやの奥に消えていくゾンビども…。

⇩258へ

393

オノがスカルトナイトの兜を断ち割った…！

（守護カードをめくれ）

●オノ……⇩323へ　●コウモリ……⇩152へ

●ムチ、バイブル、ロザリオでのオノのポイントが…

7以上なら……⇩323へ　6以下なら……⇩152へ

394

ズークがロッドを突きだした。

●21にチェックがあれば……⇩36へ　●21にチェックがなければ……⇩139へ

395

関節をきしませながら立ちあがる骸骨剣士たち。それぞれ形の違う剣をかまえ、半円形にぼくを囲む。が、オノをふりあげたぼくが一歩踏み出すと、突きだした剣の先がじりっと後退。もう一歩踏み出せば、さらに退く。

じれったいやつらだ。こっちからいっきに攻め込んでやる。

(守護カードをめくれ)

●オノ……⇩23へ　●ムチ、バイブル、ロザリオ⇩216へ

●コウモリ……⇩463へ

396

呪文とともにロッド全体が輝きを帯びた。魔法によって凝縮された力だ。それが充分に輝きを増すと、ロッドを体の正面に据えたまま、床を打った。輝きはいくつかの光球に分かれて飛びだした。死神の闇の懐はそれをのみこむ。ぼくはふたたびたじろいだ。死神はいささかのゆるぎもないように見える。さあ、こちら側へ…と、さらにロープをひろげる。さあ、邪悪の側へ…と。底知れぬ力を秘めた誘惑だ。それを断ちきろうとさらに挑み続ける…。ふと、ロッドにしがみついて喘いでいる自分に気がついた。これは恐怖にかられた無意味なあがきではないのか。ぼくはゆっくりと体を起こした。闇に向かって歩む。自分の力を信じるべきなのだ…。闇に浮かぶ髑髏と対峙した。決然とロッドをふりおろす――。髑髏は砕けた**（35にチェックがあれば、バイブル上…6ポイント）**。

⇩447へ

397

メデューサ像の頭部に向けてムチを浴びせ続けた。蛇はちぎれ、ぐちゃぐちゃに潰れながら、それでも際限なくわきだしていた。その血がしたたり、彫像はいっそう不吉な容貌となった。一撃ごとにメデューサ像を覆っていく亀裂を見れば、いまにも砕けるにちがいないと思えた。ところが、むしろその亀裂からは邪気がにじみだしていたのかもしれない。ふとどうしようもないおののきに襲われた。自分でも気づかないうちに後ずさっていた。

災いの化身。内側に隠されていた邪気がうねった。 ⇩437へ

398

黒い影がはじけ、一瞬にしてぱっと消えた（ムチ…3ポイント）。

●18にチェックがあれば ……⇩329へ

●18にチェックがなければ …⇩341へ

399

狡猾な顔のまんなかに輝きが炸裂。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと呪文をとなえ続けた。ロッドからほとばしる輝きをまともに浴びながら、邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬いうろこは通路をこする。首はじりじりと退いていくのだ。ぼくは一歩ずつ踏みこむ。

（守護カードをめくれ）

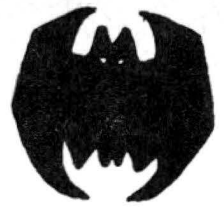
●バイブル

バイブルのポイントが20以上なら……⇩76へ

19以下なら……⇩221へ

●ムチ、オノ……⇩221へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩342へ

400

黒い龍はじっとのぞきこんでいる。ぼくがそろそろと立ちあがり、ムチをかまえるのを見ると、赤い目が陰湿なたくらみを秘めているように輝いた。最初の一撃を浴びせかけるのをためらったほどだ。それをあざ笑ったに違いない。ぐいと頭を突き入れた。壁はさらに崩れ、首が通路に這いこんだ。どうにかふんばり、ムチをふりあげた…。

●54にチェックがあれば……⇩493へ
●54にチェックがなければ……⇩511へ

401

ぼくが呪文によって呼び起こした力のなかで邪悪のオノは形を失った。輝きはロウを包んでいたゆらめくものを引き裂いた。オーラが消えたとたん、ロウは倒れた。

⇩267へ

402

棺のなかは…まるでかすみがかかったように…よく見えなかった。ズークが小箱の中身をそそいだ。レイラもいまは虚な目でのろのろと動くだけ。残りの灰をそそぎ、そしてぼくが蓋を閉じた…。

とたんに見えない糸がぷっつり切れた。ゴミかなにかのように大きく跳ねとばされ、ぼくたちは…ロウも同時に…はっと正気づいた。

「なんてこった…」

たがいに顔を見あわせ、言葉もなかった。雷鳴はいっそう激しくとどろきわたり、稲妻がその巨大な棺に祝福を与える。閃光のなか、棺はまるで違うものに見えた。脈動する異様な生きもの！

「よみがえる…」

だれかがつぶやいた。肌は粟だち、毛が逆立った。荒れ狂う風のせいではない。すぐそこにあるのだ、ぜいぜい鳴る喉が。息づかいが。

「…聖十字を」

レイラが喘いだ。そう、そうなのだ、いかにあがこうとむだだ。聖十字のあるかぎり闇の世界にとどまるしかないのだ。

棺の蓋がことりと鳴った。

⇩２３８へ

４０３

彼もまたたて続けに呪文をとなえていた。そのロッドからほとばしる輝きに触れると、邪悪の生き物どもははじかれたように飛びのいた（**バイブル上下…1ポイント**）。残りのや

つらがじりじりと後ずさりをはじめる。未練げなそのうなり声もやがて闇に消えた。

⇩476へ

404

ズークの放った輝きのなかで醜怪なシルエットがうごめいていた。彼はさらに呪文を繰り返し、力を注ぎこんだ(**バイブル上下…2ポイント**)。このときレイラがはっと息をのみ、ロザリオをさらに高くかかげなおした。その理由はすぐにわかった。ズークの魔法の輝きは、彼がまだ呪文を続けているにもかかわらず、しだいに薄れはじめたのだ。

(1、14、15のうちチェックが…)

●どれかひとつでもあれば ……⇩96へ　●ひとつもなければ …………⇩444へ

405

泥のかたまりはずるずると崩れる。その表面が小波がたったようにうごめくのがいやに気味悪いが、ともかく一発で泥水のなかに溶けてしまう。

「あそこにも!」

続いていくつか立ちあがる。

「いったい、こいつらは…」

なんだか知らないが、あらわれるたびにムチを浴びせていると、やがて鳴りをひそめた（**ムチ…2ポイント**）。

●68にチェックがあれば……⇩379へ　**●68にチェックがなければ…⇩458へ**

406

まずぼくのムチがうなりをあげた。次々に腐った肉を引き裂き、なぎ倒す。ロウが加わる。一撃で脳みそを叩きつぶす。さらにズークの放つ輝きが貫く。ゾンビどもはどろどろの肉塊となってはじけ散る…。

ほどなく一体残らずかたづけた（**ムチ…2ポイント、オノ上下…1ポイント、バイブル上下…1ポイント**）。**⇩258へ**

407

ロウがひらりと飛びあがった。

●10にチェックがあれば……⇩477へ　**●10にチェックがなければ…⇩369へ**

408

輝きは血まみれの戦士を包みこみ、じりじりと膨れあがった。そのなかでスカルトナイ

トが剣をふりあげる。一瞬、輝きがゆらぐ。が、ズークは蒼白になりながらも、それこそ悪魔のような形相で呪文を繰り返す。見まもるぼくたちでさえ、うずまく力に圧倒される。
突然、ほとんど打ちひしがれたように、ズークはがっくりと膝をついた。しかしぼくたちは彼の力が邪気を断ちきったことを知った。大きな炎の塊がのたうちまわり、闇に舞いあがったとたん、はじけて消えた（**バイブル上下…4ポイント**）。

⇩336へ

409

輝きがほとばしる。まず曲刀をふりかざしたやつをとらえて一瞬のうちにばらばらに！続いて長剣をかつぎあげたやつ！　レイピアを突きだしてきたやつにも素早くロッドをふりむける…三体め！　さらにふりむきざまにダガーをかわし、体勢をたてなおす隙を与えず呪文を繰りだす。その輝きが膨れあがり、グラディウスをふりまわしながらじりじり後退する残りの一体をも包みこんで…邪気を粉砕！（**35にチェックがあれば、バイブル上…2ポイント**）

⇩491へ

410

ムチをしごき、まず床を打ち鳴らす。関節をきしませながら立ちあがる骸骨剣士たち。それぞれ形の違う剣をかまえ、半円形にぼくを囲む。が、ぼくが一歩踏み出すと、突きだ

409〜410

●410関節をきしませながら立ちあがる骸骨剣士たち。それぞれ形の違う剣をかまえ、半円形にぼくを囲む。

した剣の先がじり、と後退。もう一歩踏み出せば、さらに退く。
じれったいやつらだ。こっちからいっきに攻め込んでやる。

(守護カードをめくれ)

●ムチ……⇩506へ
●オノ、バイブル、ロザリオ⇩325へ
●コウモリ……⇩517へ

411

悪夢だ。まったく同じことが繰り返された。小さな箱を手にしたとたん、レイラは魂を奪われた。あたりの闇からわきだす無数のコウモリ。たちまちぼくをレイラのそばから引き離し、黒い竜巻となってレイラをさらった**(48をチェック)**。残骸の山。レイラのロザリオ。そしてぼくだけが取り残された。地下通路の入口の前に。
レイラの言ったとおり、割れた台座の下側に階段が見えていた。
「勝負は五分五分…」
そう、たしかに。最後に残ったぼくが聖十字を手にしさえすれば…。

⇩340へ

412

ズークが近づく。邪気のオーラがぼくをとらえる。ズークはのろのろと手をのばし、ぼ

くが首にかけているロザリオをひきちぎった。そしてぼくの手に押しつける…。
「ねえ…シド…あけて」
ここにきて悪魔はふたたびレイラの声をつかってみせる。甘ったるく、ささやくように、くすぐるように。ぼくは怒りに震える。震えながら棺に向かう。あやつり人形だ。巧みに足を動かす糸がある。腕を動かす糸がある。逆らうことはできない…。
ぼくは棺の鍵をあけた（**32をチェック**）。

⇩402へ

413

ズークは腕を突きだした。邪気のオーラがゆらめき流れ、触手のように伸びてきた。それがロッドからほとばしる輝きとぶつかった。一瞬、混じりあう。ぼくはさらに呪文、力を注ぎこむ。オーラの触手がはじける。輝きはじりじりと膨れあがり、ズークの全身を包みこんだ。奇怪な叫び声とともにズークが倒れた。棺の上で小箱のひとつが炎と化した。ズークを包んでいたゆらめくものが退きはじめる。が、あらゆるものが怒りのうねりに覆われた。邪悪のオーラは激しくかき乱れ、そのなかでこんどはロウがいびつに首をねじまげた。オノをぶらさげ、にじり寄る…。

⇩315へ

414

「なんと…」

闇に吸いこまれるように輝きが途絶えた。グールラビットどもはうれしそうに舌なめずりの音を響かせた。

⇩301へ

415

デーモンは炎に包まれた。おぞましい液体が噴き出し、煮えたった。しかしなお邪悪な笑みを浮かべているように見えた。が、それも一瞬だ。炎は大きくはじけ散り、やがてあたりの闇がのみこんだ。

「これでやつだっておれたちのことをそう見くびりはしないぜ」

ロウが言った。

「しかし…」

ズークは破損した十字架を見おろした。

「へっ、こけおどしさ」

⇩302へ

416

「もうそろそろ墓地を抜けてもよさそうだが…」

414〜416

ズークがふとつぶやいた。
「ああ」ほとんど同時にロウがうめく。「気にいらねえ」
彼は陰険な顔つきであたりを睨めつけた。
「たしかさっきもあいつを見たぜ」
並はずれて大きな墓石を顎で示す。
「ああっ」と、レイラが少しうわずった声をあげた。「どうして気がつかなかったのかしら…強い邪気…とても強い邪気がこもっている！　わたしたちはいつのまにか…」
その墓石のまわりでもやがかき乱れた。ぼくたちはわずかに後ずさった。自らそうしたというより、なにか見えないものにぶつかったようなかんじだ。
石がわずかに持ちあがる。
「ちくしょう」
強引な力でぐいと押し退けられたのをこんどははっきりと感じた。墓石がじりじりとせり出している。ぼくたちはなかば金縛りの状態だ。
「このままでは邪気を解放してしまうわ！」

（まっさきに行動したのは？）

●シド……⇩473へ
●ロウ……⇩367へ
●ズーク……⇩275へ
●レイラ……⇩352へ

417

「ぎゃっ!!」
ズークは体を折り、そのままよろよろと膝をついた。まるで剣かなにかのひと突きをくらったように見えた。そしてあたかも実際にそうであるかのように、うつろな目を見開き、そろそろと自分の腹をさぐったのだ。掌が血糊にべっとりまみれていないのが信じられないようだ。それでも彼は激しい喘ぎを止められないでいた（**21をチェック**）。

（次に挑んだのは？）

●シド ……⇩474へ　●ロウ ……⇩322へ　●レイラ……⇩352へ

418

いちど地面を打って自分を奮い立たせる。血のしたたる剣をかまえるスカルトナイト。
ぼくは素早くムチを繰り出した。

（守護カードをめくれ）

●ムチでムチのポイントが…

7以上なら ……⇩260へ　6以下なら ……⇩168へ

●オノ、バイブルでムチのポイントが…

8以上なら ……⇩260へ　7以下なら ……⇩168へ

●ロザリオ、コウモリ……⇩168へ

419

スカルトナイトは血溜りのなかに膝をついた（**ムチ…2ポイント**）。とどめの一撃を浴びせようと、ぼくは一歩踏み込んだ…。

⇩489へ

420

青白い霊光をオノが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくなった。なにものかがオノをつかみ、とてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白い霊光のなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。闇の奥から青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。

「…シド…シド!?」

階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた（**64をチェック**）。

⇩513へ

421

ムチを手にぼくは操舵室へ飛びこんだ。

●61にチェックがあれば……⇩371へ

●61にチェックがなければ…⇩479へ

422

通路を引き返す。階段のところまでもどったところで毒づいた。入口が塞がれている。

どのみち逃げ出すつもりはないが。

もう一方の通路へ（**19をチェック**）。

⇩146へ

423

そっとつついたつもりだった。ところがどういうはずみか、折り曲げていたムチがはじけ、聖十字の上にへばりついていた蜘蛛をつぶしてしまった。破れた腹のなかから、小さなやつがぞっとするほど這いだした。わっとぼくの足もとに群がり寄る。踏みつぶしても踏みつぶしても追いつかない。続々と足を這いのぼってくる。とっさにレイラのロザリオを使った。するとようやく四方へ散った（**ロザリオ…1ポイント、59をチェック**）。

⇩59へ

424

聖十字が…砕けた！　怪物に向けて投げつけようとかまえたとたん、ぼくの手のなかでぼろぼろに砕けた。怪物はもやもやとしたオーラに包まれ、その姿は消えた。だがもやもやだけはそこに残った。ぼくたちはただ放心してたちつくすばかり…。

やつは自らの肉体とともによみがえることはできなかった。いや、あるいはそれを選ばなかったのかも…。

ぼくたちは邪悪の魂を解き放ってしまった。それはさっそく宿るべき肉体を物色している…。

END

425

ぼくが呪文によって呼び起こした力のなかで邪悪のオノは形を失った。輝きはロウを包んでいたゆらめくものを引き裂いた。オーラが消えたとたん、ロウは倒れた。

●71にチェックがあれば……⇩174へ

●71にチェックがなければ……⇩267へ

426

グールラビットは小柄なロウの倍はある。が、彼は小気味よくさばいている。断ち割られた胴体が転がっている（**オノ上下…1ポイント**）。ズークは…。

（守護カードをめくれ）

●バイブル ……………⇩472へ　●コウモリ ……………⇩331へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

5にチェックがあれば ……⇩331へ　5にチェックがなければ …⇩403へ

427

ロウのオノを受けたデーモンは腐った果実のように潰れ、汚らしい液体をどろどろ溢れさせた（**オノ上下…2ポイント**）。このときレイラがはっと息をのみ、ロザリオをさらに高くかかげなおした。デーモンを囲む白い輝きの輪がゆらいでいる。デーモンの体は軟体動物のようにくねり、柄まで突き刺さったオノをゆっくりと吐き出した…。

（1、14、15のうちチェックが…）

●どれかひとつでもあれば …⇩516へ　●ひとつもなければ ………⇩455へ

428

ロウのまわりに群がるコウモリどもを、ぼくとズークは相当数やっつけたはずだ。が、相手の数にきりがないとしたら…。そうとしか思えなかった。コウモリどもの壁はじりじりと膨れあがり、ロウの姿は完全に黒いうごめく塊のなかに隠れてしまった。と、その一群はいっせいに舞いあがった。ロウを取りこんだまま…。ぼくたちは呆然とするばかりだ。足の踏み場もないほどの残骸のなかから、ロウのオノを拾いあげた（**27をチェック…以後シド自身がオノを使うことができます**）。

⇩ 303へ

429

「退散！」

ロザリオをかけたレイラが叫ぶ。ふっと気配が途絶えた（**ロザリオ…1ポイント**）。

⇩ 258へ

430

墓石に大きな亀裂が生じた。金縛りは解けた（**バイブル上下…1ポイント**）。

輝きが放たれる！　だが…。

⇩ 130へ

431

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。ぐらりとゆらぐ。さらに一撃、一撃…たて続けにムチを浴びせかける。が、ムチはふと勝手な意志を持ったか、血のしたたる剣に絡みついた。じりじりと引き寄せられる。どす黒い血が生きもののようにムチを伝ってくるのを見たとき、説明のつかない恐怖が噴きだした。手を離してしまいたい…あるいはこのまま力を抜いて…。しかしぼくはどうにか踏んばった。スカルトナイトの手から剣が落ちた。と、その姿は大きな炎の塊に変わった。ぼくはふたたびムチをふるいはじめた。喘ぎながら打ちこみ続けた。突然、炎は闇に舞いあがった。そして大きくはじけて…消えた**（ムチ…4ポイント）**。

⇩336へ

432

くっつきあったいくつもの顔が、ぞっとする変貌を見せつけながら膨れあがる。ぼくはムチをふりあげる。だが青白い霊光が強まり、その一端が触手のように伸びてくる。邪気の侵食。金縛りの戦慄**（66をチェック）**。この邪悪の霊体にムチを打ちこむには、猛烈な意志と力が必要だった。

（守護カードをめくれ）

●ムチ

51にチェックがある ……⇩478へ
51にチェックがない ……⇩497へ

●オノ、バイブル、ロザリオ
38か51にチェックがある ⇩478へ
38にも51にもチェックがない ⇩497へ

●コウモリ……⇩462へ

433

じめじめした船倉だ。
上からレイラがのぞきこむ。
「シド！　大丈夫!?　待ってて、すぐ行くわ」
「大丈夫だ。こっちから階段を見つけてあがる。両方でうろうろしないほうがいい」
そう答えたあと、ふとあたりを見まわした。骸骨が転がっている。5、6体。どれも剣を手にしたままだ。戦いのあげく相果てたのか。それらが青白い光を帯びてきた。ちらりと上を見るとレイラの頭は消えている。足もとの危うい甲板のその場所を避けたのだろう。
「ま、どっちみち…」
ひとりでどうにかしなければならない。
（28と33について…）
●両方にチェックがあれば …⇩410へ
●28にだけチェックがあれば ⇩141へ

●33にだけチェックがあれば……⇩72へ
●両方(りょうほう)ともチェックがなければ……⇩278へ

434

さいわい岸(きし)はすぐそこだ。ぼくたちはもやのたつ川(かわ)に飛(と)びこんだ。

⇩310へ

435

「船賃(ふなちん)のかわりにくれてやらあ…」
ロウがオノをふりあげ、操舵室(そうだしつ)に飛(と)びこんだ。

●61にチェックがあれば……⇩326へ
●61にチェックがなければ……⇩381へ

436

(シドが手(て)にしたのは?)

●ムチ……⇩421へ
●オノ……⇩507へ
●ロッド……⇩24へ

437

メデューサ像はゆっくりと浮きあがった。それに押しつぶされるのではないか。ふとそう思った。冷たい汗とともに恐怖が…認めたくはないが…じりじりと噴き出した。それに満足したのだ。メデューサ像はふっと闇に溶けた。にやにや笑いだけが残り、いつまでも漂っているような、ひどくいやな消えかただった（**45をチェック**）。

⇩ **359へ**

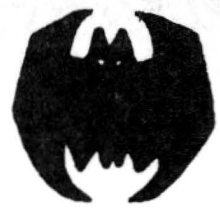
438

ぼくのまわりを飛びかっていたコウモリの影がさっと離れた。一か所にひしめきあい、もとの大コウモリにもどりかけている。あるいはここで一撃をくらわせば…。

⇩ **384へ**

439

不意に口がくわっと裂けた。龍の背後の虚空がわーんと鳴った。ぼくはムチをふりあげたまま凍りつく。血の色を帯びた輝きがぼくを射た。一瞬、闇が垂れこめる…。

⇩ **499へ**

440

「化石だ」

半分は水中に没しているのだが、一枚岩のなかに大きな骨格がうねっている。龍。しかも双頭だ。

「龍は破壊と恐怖の象徴…」

レイラが言いかけたときだ。突如、稲妻が走った。雷鳴のかわりに岩が鋭い叫びをあげる。たちまち網の目のような亀裂が全体をおおう。細かい岩のかけらが水面を打つ。岩はぼろぼろと崩れ落ち、閉じ込められた骨格がみるまにあらわになっていく。

「邪気に目覚めさせてはだめっ！」

だが頭のひとつは完全に抜け出した。解放を味わうかのようにその長大な頸椎をきしませる…。

（28と33について）

●28と33の両方にチェックがある ⇩144へ　●28にだけチェックがある ⇩11へ

●33にだけチェックがある ⇩107へ　●28にも33にもチェックはない ⇩219へ

441

雷鳴。姿なき棺の主の勝ちどきなのか。

440〜441

●440突如(とつじょ)、稲妻(いなづま)が走(はし)った！　２つの頭(あたま)のうち１つが、解放(かいほう)を味(あじ)わうかのようにその長大(ちょうだい)な頸椎(けいつい)をきしませる。

「ねえ…シド…鍵を」
ここにきて悪魔はふたたびレイラの声をつかってみせる。甘ったるく、ささやくように、くすぐるように。ぼくは怒りに震える。震えながらロザリオをはずす。あやつり人形だ。巧みに足を動かす糸がある。腕を動かす糸がある。逆らうことはできない…。
ぼくは棺の鍵をあけた（**32をチェック**）。

⇩**387へ**

442

「悪魔め！　化物め！　さっさと棺桶のなかへ帰りやがれ！」
ありとあらゆる罵声とともにムチを浴びせる。これはロウではない。姿なき棺の主の邪悪なオーラだ。何度も何度もそう言いきかせなければ、もやもやしたゆらめきのなかでもがくロウのありさまに耐えることができない。
「真正バンパイアハンターの力を…！」
ついにゆらめくものが退き、支えを失ったように倒れこむロウ。棺の上で2つめの小箱が炎と化した。残るはひとつ。
雷鳴がいっそう激しさを増してとどろきわたった。

⇩**60へ**

443

「なんと…」
闇に吸いこまれるように輝きが途絶えた。
「…くそ、全員お手上げってわけか」**(6をチェック)**
グールラビットどもはいやらしい舌なめずりの音をたてはじめた。

⇩**301へ**

444

「おお…」
ズークはうめき、はっきりと身を震わせた。彼の白い魔法の力は十字架を冒す邪悪の炎と化してしまったからだ。だれもが呆然と、十字架の一端が燃えあがるのを見あげた**(16をチェック)**。レイラのロザリオによる白い輝きの輪が揺らいでいる。

⇩**470へ**

445

輝きは血まみれの騎士を包みこみ、じりじりと膨れあがった。そのなかでスカルトナイトが剣をふりあげる。一瞬、輝きがゆらぐ。が、ズークは蒼白になりながらも、それこそ悪魔のような形相で呪文を繰り返す。見まもるぼくたちでさえ、うずまく力に圧倒される。
突然、ほとんど打ちひしがれたように、ズークはがっくりと膝をついた。しかしぼくた

ちは彼の力が邪気を断ちきったことを知った。大きな炎の塊がのたうちまわり、闇に舞いあがったとたん、はじけて消えた（**バイブル上下…6ポイント**）。

⇩336へ

446

くっつきあったいくつもの顔が、ぞっとする変貌を見せつけながら膨れあがる。ぼくはロッドをにぎりしめた。だが青白い霊光が強まり、その一端が触手のように伸びてくる。邪気の侵食。金縛りの戦慄（**66をチェック**）。この邪悪の霊体に向かって呪文を吐きだすには、猛烈な意志と力とが必要だった。

（守護カードをめくれ）

●バイブル

40にチェックがある……⇩337へ
40にチェックがない……⇩184へ

●ムチ、オノ、ロザリオ

39が40にチェックがある……⇩337へ
39にも40にもチェックがない……⇩184へ

●コウモリ……⇩307へ

447

だがぼくたちは舵手を失ったわけで…。　⇩338へ

448

死神はその黒いローブをひろげた。ズークを迎え入れるかのように。一瞬、彼は喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ズークはロッドを立てたまま自分の正面にかまえた。その頭にある小さな十字架を死神とのあいだにおくことで、自分を奮いたたせたのだ。呪文が流れる…。

（守護カードをめくれ）

●バイブル
　バイブルのポイントが12以上……⇩498へ　11以下……⇩170へ
●ムチ、オノ
　バイブルのポイントが14以上……⇩170へ　13以下……⇩217へ
●ロザリオ、コウモリ……⇩217へ

449

ようやくたどりついたのは…どうやら地下室らしい。窓もなにもなく、四方が石積みの

壁。一方の壁ぎわにへばりついたような階段が上のほうにある扉に続いている。ほかにはなにもない。
扉を調べようと階段をのぼりかけたときだ。なにか見えない力がぼくを引きもどそうとした。はっと身がまえる。
天井に黒い染みがあらわれ、広がった。それはあるものの形となった。まさか、と思ったとき、そいつがふわりと頭上を覆った。

⇩12へ

450

不意に口がくわっと裂けた。ふたたび紫色の霧が目の前を覆う。だが首は通路から退いていた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。が、しばらくしてふっと闇に沈んだ**（26にチェックがあれば、オノ上下…3ポイント、17をチェック）**。

⇩467へ

451

やがてさっきの通路の先にあったのとそっくり同じ地下室へたどりついた。窓もなにもなく、一方の壁ぎわにへばりついたような階段が上のほうにある扉に続いているだけ。ただしその扉には鍵がかかっていた。鍵穴は、もちろん、ぼくのロザリオの形と一致するに違いない。天井、壁、床…抜け目なくうかがい、ふと気づいて思わず笑った。

「ここへ入るのに邪魔するわけないか」
4つめの灰。どうするか見てろ。ぼくはロザリオをはずし、その鍵穴にさしこんだ。
⇩93へ

452

まさしく悪魔が乗り移ったロウ。なすすべもないぼくにオノをふりあげる。ひろがる邪悪のオーラがぼくを圧し、倒れこんだ頭上に…！　それをかわそうと思わず手にしたのは…聖十字だった。怒りなのか。オーラのゆらめきが激しくかき乱れた。醜くもがきながらロウは退く。が、聖十字にも亀裂が生じていた（**44にチェックがあれば57と58をチェック、44にチェックがなければ57をチェック**）。
⇩441へ

453

だがこのときムチの呪縛が解けた。ぼくは素早く跳ねた。跳ねながら大きくふりかぶり、邪悪の力にあやつられるロウに向かって叩きつけた…！

（ムチとオノのポイントについて…）
●ムチのポイントがオノ上のポイントより大きい……………⇩442へ
●ムチのポイントがオノ上のポイントより小さい、または同じ……………⇩314へ

454

2、3匹が輝きに包まれ、どう、と倒れた(**バイブル上下…1ポイント**)。残るグールラビットたちがじりじりと後ずさりをはじめる。未練げなそのうなり声もやがて闇に消えてしまった。

⇩**476へ**

455

「なんてこった…」

ロウははじき返されたオノを恐ろしいもののように蹴飛ばした。だれもが呆然と、十字架の一端が燃えあがるのを見あげた(**3をチェック**)。

⇩**470へ**

456

デーモンの姿が歪む。たて続けに打ち込む(**ムチ…2ポイント**)。ムチの炸裂する部分が腐った果実のように潰れ、汚らしい液体がどろどろ噴き出した。だがこのとき、デーモンを囲む白い輝きの輪がゆらいでいることに気がつかなかった。レイラがはっと息をのんだ。ぼくのムチは、一瞬、邪悪の気に触れた…。

(**1、14、15のうちチェックが…**)

●**どれかひとつでもあれば…⇩503へ**
●**ひとつもなければ…………⇩348へ**

457

炸裂するムチが呼んだかのように、ふたたび閃光。それはデーモンを直撃した（**ムチ…4ポイント**）。

⇩415へ

458

足もとが軽くなった。あいかわらず水は膝ぐらいまであるが、底なし沼のような泥湿地ではない。まもなく、そこが湖の浅瀬だということに気がついた。見なれぬ建築物の残骸が見えている。傾いた壁の一部。折れた石柱の列。遺跡だ。

⇩56へ

459

ズークがあえぎながら呪文を口にする…。

⇩430へ

460

ロウもまた同じ苦痛に喘いだ（**10をチェック**）。

（まだ試していないのは？）

●シド……⇩245へ
●ズーク……⇩486へ
●レイラ……⇩352へ

461

スカルトナイトは血溜りのなかに膝をついた(**オノ上下：2ポイント**)。とどめの一撃を浴びせようと、ロウは一歩踏み込んだ…。

⇩21へ

462

青白い霊光をムチが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくなった。なにものかがムチをつかみ、とてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白い霊光のなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。闇の奥から青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。

「…シド！　シド!?」

階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた。(**52をチェック**)。

⇩513へ

461〜464

463

大きく跳びあがろうと思いきり蹴ったとたん、床板が破れた。めりこんだまま足が抜けない。骸骨どもが手にした武器をいっせいにふりあげる。曲刀、長剣、レイピア、ダガー……オノをふりまわしたが、動けないのでは複数の相手を確実にとらえることなどできやしない。次々に襲いかかる苦痛にたちまち突っ伏した……。が、はっと目をあけたときにはざっくり切り裂かれたはずの肩口に傷はなく、レイピアに貫かれたはずの胸からは一滴の血も流れていない。骸骨剣士の姿も消え失せている……（**50をチェック**）。

⇩491へ

464

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ぼくは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。ぼくはオノをにぎりなおした。

（守護カードをめくれ）

●オノ……⇩249へ　**●コウモリ**……⇩508へ
●ムチ、バイブル、ロザリオ
50と63の両方にチェックがある……⇩508へ

50にも63にもチェックはない……⇩249へ

50と63のどちらかひとつにチェックがある……⇩155へ

465

ロウはオノをふりあげた。が、ぎくりとしたように立ちすくむ。彼はオノを凝視した。まるで異様なものを見るように。顔が歪み、腕がぶるぶると震えはじめた。ロウは奇妙な姿勢のまま膝をついた…。

⇩39へ

466

螺旋の階段がずっと上まで続いている…。

⇩252へ

467

崩れた壁の向こう側はかすかに水音の響く虚な闇だ。邪気は断ち切ったはずだ。が、まだあの赤い目に見つめられているような気がしてならない。その感じはずっと尾をひいた。おそらく闇の底で邪悪の主が次の策謀をめぐらせはじめた…。しかしやつの思いどおりにはさせない。

⇩298へ

468

（チェックシートの行動記号表の、アルファベットの文字AとB、BとL、LとM、MとN、NとX、XとA、FとG、GとH、HとR、RとS、SとT、TとFをそれぞれ線で結びなさい。その線で囲まれた十字型の図形が現れる。その図形内のチェックの数は？）

●9以下……⇩147へ
●10以上……⇩424へ

469

棺のなかは…まるでかすみがかかったように…よく見えなかった。レイラもいまは虚ろな目でのろのろと動くだけ。ひとつ残った小箱の中身をそそぎ、そしてぼくが蓋を閉じた…。とたんに見えない糸がぷっつり切れた。ゴミかなにかのように大きく跳ねとばされ、ぼくたちは…ロウとズークもまた同時に…はっと正気づいた。たがいに顔を見あわせ、言葉もなかった。雷鳴はいっそう激しくとどろきわたり、稲妻がその巨大な棺に祝福を与える。閃光のなか、棺はまるで違うものに見えた。脈動する異様な生きもの！

「よみがえる…」

だれかがつぶやいた。肌は粟だち、毛が逆立った。荒れ狂う風のせいではない。すぐそ

こにあるのだ、ぜいぜい鳴る喉が。息づかいが。
「…聖十字を」
レイラが喘いだ。そう、そうなのだ、やつがいかにあがこうとむだだ。聖十字のあるかぎり闇の世界にとどまるしかないのだ…。
棺の蓋がことりと鳴った。

⇩238へ

470

「ああっ」レイラがはじかれたようにのけぞった。「もう限界よ！」
デーモンを捉えていた白い輝きの輪が消えた。封じこめられていた邪気がいっきに噴き出し、ぼくたちはみな見えない手にねじふせられた。デーモンは声をたてずに笑い、十字架の炎をあおってみせた。炎はじりじりと膨れあがる。
突如、雷鳴がとどろいた。稲妻がぼくたちを凍りつかせた。あの不吉な夢の輪郭が、こんどはいっそうはっきりとよみがえったのだ。
「そう…そうよ」レイラは憑かれたように口走っていた。「あれは予告だったんだわ、わたしたちへの…あいつが…復活…ドラキュラ…」
「復活!?」
いちどは滅びた悪魔の力の持ち主、ヴラド・ツェペシュ公ドラキュラ。邪悪な魂は不滅

470

●470あの不吉な夢の輪郭が、はっきりとよみがえる。ドラキュラが…復活!?

なのか。デーモンはそれを誇示するために十字架を冒瀆してみせる。そう、やつは挑戦してきた。バンパイアハンターの血と力を受け継ぐぼくたちに、邪悪な魂が復活をかけて挑んできたのだ。なんとしてもこの不吉な伝令を倒して見せしめにしなければならない…。

「地獄へ帰れ!」

(立ちあがったのは?)

●シド……⇩134へ　●ロウ……⇩49へ　●ズーク……⇩99へ

471

「退散!」

ふたたびレイラがロザリオをかかげて叫ぶ(**ロザリオ…1ポイント**)。崩れおちた骸骨どもを飛び越え、広場を走り抜けた。

⇩30へ

472

彼もまたたて続けに呪文をとなえていた。そのロッドからほとばしる輝きに触れると、邪悪の生き物どもはたちまち形を失った。(**バイブル上下…2ポイント**)。やがてあたりはその残骸だけになった。

⇩476へ

473

墓石はますますせり出す。邪気は着々と増大している。なんとかくい止めねば！　ぼくはよろめきながらムチをふりかざす…。

●ムチのポイントが6以上なら……⇩167へ
●5以下なら……⇩151へ

474

ぼくはムチをふりあげた。

●ムチのポイントが6以上なら……⇩167へ
●5以下なら……⇩137へ

475

輝きは血まみれの騎士を包みこんだ。が、じりじりと黒ずんでいく。そのなかでスカルナイトの姿がひとまわり大きくなった（**22をチェック**）。レイラが喘ぐ。
「だめ…呪いを受けている…逆に邪悪の力を注ぐだけよ！」

（代わって攻撃するのは？）

●シド……⇩505へ　●ロウ……⇩407へ

476

教会の外壁には無数のコウモリが群れていた。ぼくたちが近づくといっせいに飛び立ち、森の闇へと溶けこんだ。ぞっとしたのはそのせいだろうか。入口にたたずみ、ぼくたちは戸惑った。いやな感じだ。とても。ひとときもこの場に留まっていたくない、すぐに立ち去りたい…そんな衝動が寒気のようにちくちくと肌を刺す。だがぼくたちは足を踏み入れた。礼拝堂の壁に大きな十字架が見えたからだ。

なかに入ると、ぞっとする感じはますます強まった。それが、長らく捨ておかれた古い建物につきもののかび臭い空気のせいでも、月光を受けたステンドグラスが落とす奇妙な陰影のせいでもないことに気がついた。

「邪気よ。とても強い…邪悪な力が…」

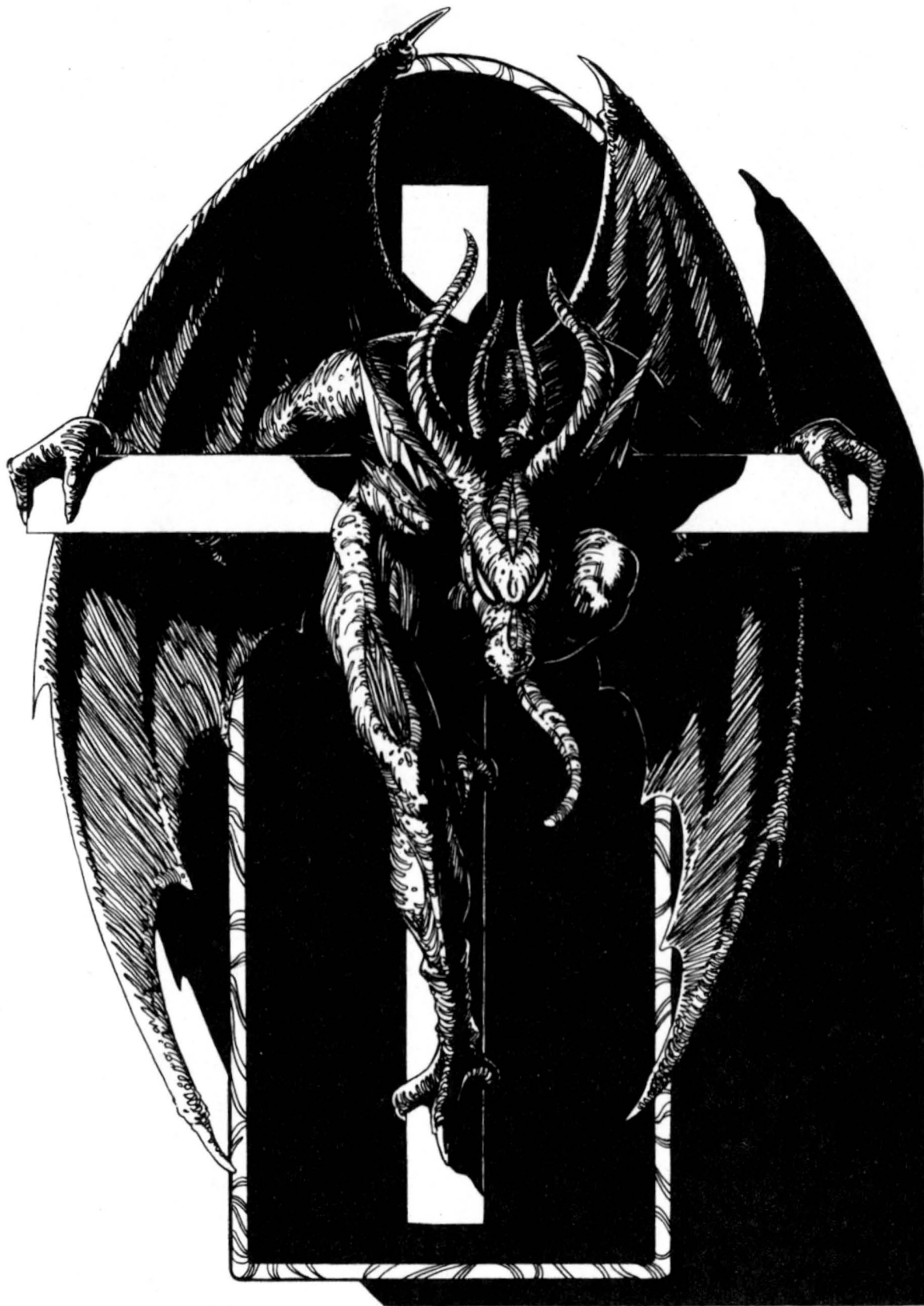
レイラの探るような視線がある場所で止まった。

「まさか」

ズークはうめいた。ロウは神経質に唇をなめながら、自分のロザリオをまさぐっていた。信じがたいことだが、教会内部にうずまく邪気の源は正面の壁にはめ込まれた十字架にあるのだ。

「おい…」

十字架がせりだした。と、くるりと反転。息をのむ。確かに…邪悪のかたまりだ。デー

476

●476翼を持った奇怪な姿のデーモンが、汚らしい唾液をしたたらせながら、十字架をなめてみせた。

モン！　十字架の裏側には翼を持つ奇怪なその姿が絡みついていた。にやにやと笑っていた。なんという眺めだ。ぼくたちは総毛立つ。
「…冒瀆だ」
デーモンは汚らしい唾液をしたたらせながら、十字架をなめてみせたのだ。それはぼくたちをぞっとさせる以上のものだった。むらむらとわきたつのは…紛れもなく…敵意。激しい憎悪。そう、ぼくたちは真正バンパイアハンターの血を受け継ぐものなのだ。
（まっさきに行動に移ったのは？）
●シド…⇩63へ　●ロウ…⇩31へ　●ズーク…⇩2へ　●レイラ…⇩270へ

477

オノは血まみれの騎士の頭上に打ちおろされた。が、ロウははじきかえされ、スカルナイトの姿はさらに大きくなった（**23をチェック**）。
⇩512へ

478

青白い霊光をムチが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。ふと、霊光がゆらめきたった。とたんに体が動かなくな

った。なにものかがムチをつかみ、とてつもない力でたぐり寄せた。ぼくは青白い霊光のなかへ引っ張りこまれた。闇だ。あるいは一瞬のことだったのかもしれない。闇の奥から青白い手がさしのべられるのを見た。ぼくの魂は凍りつく。

「…シド…シド!?」

階段の上から呼びかけるレイラの声。すっと闇が遠のいた。霊体は消え失せていた（65をチェック）。

⇩513へ

479

死神はその黒いローブをひろげた。ぼくを迎え入れるかのように。一瞬、喘いだ。死神の懐は真っ黒い闇だった。その縁に立つだけでのみこまれてしまいそうな、目もくらむ深淵だった。ぼくは自分のロザリオをまさぐっていた。いま、この圧倒されてしまいそうな力と対峙するには、そうすることが必要だったのだ。ぼくはムチをにぎりなおした。

（守護カードをめくれ）

●ムチ……⇩356へ　●コウモリ……⇩79へ

●オノ、バイブル、ロザリオ

51と52の両方にチェックがある⇩79へ　51にも52にもチェックはない⇩356へ

51か52のどちらかひとつにチェックがある……⇩295へ

480

（手にした武器は？）

●ムチ…………………………⇩400へ

●ロッド………………………⇩127へ

481

はっと気づいたときには龍の姿はなかった。そして…オノも手のなかから消えている！崩れた壁の向こう側はかすかに水音の響く虚な闇だ。が、まだあの赤い目に見つめられているような気がしてならない。その感じはずっと尾をひいた（**44をチェック**）。

⇩298へ

482

ロウが近づく。邪気のオーラがぼくをとらえる。ロウはのろのろと手をのばし、ぼくが首にかけているロザリオをひきちぎった。そしてぼくの手に押しつける…。

「ねえ…シド…あけて」

ここにきて悪魔はふたたびレイラの声をつかってみせる。甘ったるく、ささやくように、くすぐるように。ぼくは怒りに震える。震えながら棺に向かう。あやつり人形だ。巧みに

足を動かす糸がある。腕を動かす糸がある。逆らうことはできない…。
ぼくは棺の鍵をあけた（**32をチェック**）。 ⇩**222へ**

483

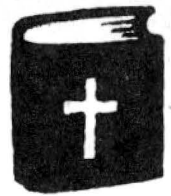
邪悪のオノを手にしたロウが飛びあがる。ぼくは正面で受けとめる。邪悪のオノは形を失った。そのまま切り裂く。ロウは…いや、ロウを包むゆらめくものが醜くもがいた。それが消えたとたん、ロウは倒れた。

●71にチェックがあれば……………………⇩**174へ**
●71にチェックがなければ…………………⇩**267へ**

484

2、3匹が輝きに包まれ、どう、と倒れた（**バイブル上下…1ポイント**）。が、残りのやつらはひるまない。いっせいに襲いかかってきた。 ⇩**301へ**

485

「この役立たず！」
ぼくは呪いの声をあげ、ムチを叩きつけた。レイラのロザリオの力で封じこめられてい

るにもかかわらず、十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらす結果になってしまったのだ（1をチェック）。

⇩318へ

486

ズークが呪文をとなえはじめた。

●バイブルのポイントが6以上なら ……**⇩430へ**

●5以下なら ……**⇩368へ**

487

「退散…ああっ！」

もはやレイラのロザリオではどうにもならない。全員が突風にあったようになぎ倒された。墓石に亀裂が走り、凄じい勢いで砕け散った。

なにかもやもやとした影が躍り出た。それがいったいなんなのか、ぼくたちは見届けることはできなかった。影はたちまち大きくのびあがり、闇に溶けた。なにものかが墓場からよみがえる…この不吉な暗示にぞっとするばかりだ。

しだいにもやは薄れていった。ぼくたちは墓場のはずれにいることに気がついた。森が迫っている。

⇩53へ

488

ムチは血まみれの騎士を捉えてはじけた。が、やはりゆるぎもしない。スカルトナイトの姿はさらに大きくなった（**12をチェック**）。

⇩512へ

489

やにわにスカルトナイトは剣をふりあげた。むろんぼくはそれを素早くかわした…が、その剣は邪悪の力を帯びていた。どす黒い血しぶきがほとばしった。それをたっぷりと浴びせられたぼくは、叫びながらのたうちまわった。焼けた硫黄のように熱かった。苦痛がじりじりと体全体にしみこむのだ（**11をチェック**）。

「…追いつめているのよ、ひるまないで…もう少しで邪気を断ちきれるわ！」

レイラが叫んでいた。だがぼくはすぐには立ちあがれない。

（ここで攻撃を受け継いだのは？）

●ロウ ……………⇩393へ　**●ズーク** ……………⇩353へ

490

「…シド…シド!?」階段の上からレイラの声。「ねえ、大丈夫？　そっちでもなにか…」

大丈夫だ、と答えかけてはっとした。そっちでも、だって!?

ぼくは階段をかけあがる。

⇩509へ

491

階段はすぐに見つかった。が、ひどい状態だ。片足をのせただけで踏み板が抜けた。船底に落ちてしまったらおしまいだ。

「シド？」

上からレイラの声。

「反対側にもうひとつあるわ。そっちのほうがまだましよ」

⇩380へ

492

死神はさらにローブをひろげた。さあ、こちら側へ…さあ、邪悪の側へ…と。

ぼくたちは凍りついた。死神はますます懐から闇をひっぱりだす。いきなり、ひび割れた髑髏がぼくたちの上をかすめ飛んだ。おそらくはほとんど一瞬のうちに、闇は通り過ぎたのだと思う。残ったのは戦慄すべき笑い声の余韻（**62をチェック**）。

しかしぼくたちは打ちのめされている暇もなかった…。

⇩338へ

493

狡猾な顔のまんなかにムチを浴びせた。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと打ち続けた。邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬いうろこは通路をこする。首はじりじりと退いているのだ。ぼくは一歩づつ踏みこむ。やがて首は完全に通路から退いた。

血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。もうムチは届かない。が、強引に虚空を切り裂いてみせた。赤い輝きが闇に沈んだ。**（ムチ…3ポイント）**。

ところが…

⇩361へ

494

そっとつついたつもりだった。ところがどういうはずみか、折り曲げていたムチがはじけ、聖十字の上にへばりついていた蜘蛛をつぶしてしまった。破れた腹のなかから、小さなやつがぞっとするほど這いだし、四方に散った**（60をチェック）**。

⇩59へ

495

（チェックシートの行動記号表の、アルファベットの文字AとB、BとL、LとM、MとN、NとX、XとA、FとG、GとH、HとR、RとS、SとT、TとFをそれぞれ線で

結びなさい。その線で囲まれた十字型の図形が現れる。
その図形内のチェックの数は？）

●0 ……………⇩149へ　●1から9 ……………⇩254へ
●10以上 ……………⇩520へ

496

ぼくはオノをふりあげる。と、なにかにぐっとつかまれた。動かない。ロウもまた邪悪のオノをふりあげていた。そのまわりでオーラが波うった。ロウがオノを投げつける…実際にぼくを襲ったのはひろがる波だ…同時にぼくの手のなかからオノが勝手に飛び出し、ロウの手におさまっていた（**44と57をチェック**）。

●71にチェックがあれば ……⇩441へ　●71にチェックがなければ …⇩343へ

497

青白い霊光をムチが引き裂いた。奇怪な顔がいっそう異様に歪み、ゆるゆるとちぎれる。だがその奥から別の顔が浮かびあがり、口の裂け目からさらにまた別の顔があらわれる。それは魂がわななくありさまだ。が、ぼくはムチを加え続ける。わななく自分の魂に挑み続ける…。ふと、霊光がゆらいだ。あとは一撃ごとに邪悪の霊体がじりじりと圧縮されて

いった。やがてかすかな光球となり、ムチの先でふっと消えた（**ムチ…3ポイント**）。

⇩490へ

498

呪文とともにロッド全体が輝きを帯びた。魔法によって凝縮されたズークの力だ。その輝きが充分に増すと、ロッドを正面に据えたまま床を打った。輝きはいくつかの光球に分かれて飛びだした。死神の闇の懐はそれをのみこむ。ズークはたじろいだ。死神はいささかのゆるぎもないように見える。さあ、こちら側へ…と、さらにローブをひろげる。さあ、邪悪の側へ…と。底知れぬ力を秘めた誘惑だ。それを断ち切ろうと、ズークはさらに挑み続ける。ますます蒼白となった。力尽きたか、ふと、ロッドにしがみつくようにして喘ぐ。そのまま崩れ落ちてしまうかに見えた。しかし彼はゆっくりと体を起こした。このとき彼の目に浮かんだ決然たるもの――。ズークは闇に向かって歩む。闇が彼をのみこむ。が、一瞬のち、ロッドをふりあげたズークの姿が稲妻のように閃いた。

ズークは闇に浮かぶ髑髏を打ち砕いた（**バイブル上下…6ポイント**）。

⇩447へ

499

はっと気づいたときには龍の姿はなかった。崩れた壁の向こう側はかすかに水音の響く

虚な闇だ。が、まだあの赤い目に見つめられているような気がしてならない。その感じはずっと尾をひいた（**42をチェック**）。

⇩298へ

500

鋭いうなりをあげたムチがデーモンの上に炸裂……！

●1にチェックがあれば……⇩177へ　●1にチェックがなければ……⇩241へ

501

一瞬のためらいの結果だった。邪悪なオーラがどよめいた。レイラは腕をつきだした。それは皮肉にもロザリオをかかげるしぐさにそっくりだった。

ぼくの体が浮きあがり、そのまま後ろに向かってまっすぐに飛んだ。ひどい勢いで背中がぶつかり、めり込むのではないかと思うほど押さえつけられた。首にかけていたロザリオがぐいとひっぱられた。目の前にだれかがいてそうしているように。首筋に鎖が食い込む。容赦なくぎりぎりと。壁に押さえつけられたまま、もがくこともできない。

鎖がちぎれた。

「ね…あけて」

ばかげたありさまだ！　ぼくは怒りに震える。震えながら目の前に浮かんでいるロザリオに手をのばす。あやつり人形だ。巧みに足を動かす糸がある。腕を動かす糸がある。壁から引きずりだされ、棺に向かってぎくしゃく歩む。逆らうことはできない…。
ぼくは棺の鍵をあけた（32をチェック）。

⇩469へ

502

「悪魔め！　化物め！　さっさと棺桶のなかへ帰りやがれ！」
ありとあらゆる罵声とともにムチを浴びせる。これはズークではない。姿なき棺の主の邪悪なオーラだ。何度もそう言いきかせなければ、もやもやしたゆらめきのなかでもがくズークのありさまに耐えることができない。
「真正バンパイアハンターの力を…！」
ついにゆらめくものが退き、支えを失ったように倒れこむズーク。棺の上で二つめの小箱が炎と化した。残るはひとつ。
雷鳴がいっそう激しさを増してとどろきわたった。

⇩60へ

503

「ちくしょう！」

ぼくは呪いの声をあげ、ムチを叩つけた。十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらしてしまったのだ（**2をチェック**）。

⇩470へ

504

ロウもまた同じ苦痛に喘いだ（**10をチェック**）。

⇩487へ

505

スカルトナイトを見据え、ムチをしごいた。

●11にチェックがあれば……⇩488へ

●11にチェックがなければ…⇩418へ

506

大きく跳びあがると同時にムチを一閃、まず曲刀をふりかざしたやつの頭蓋骨を粉砕…一体め！　返す勢いで長剣をかつぎあげたやつの肋骨を解体…二体め！　着地後すぐさま身をかがめ、レイピアを突きだしてきたやつの腰椎を分断…三体め！　ふりむきざまにダガーをかわし、背骨を砕いて四体め！　残る一体、グラディウスをふりまわしながらじりじり後退。もういちど跳んで…頭蓋を粉々！（**ムチ…2ポイント**）

⇩491へ

507

オノをふりあげ、ぼくは操舵室へ飛びこんだ。

●61にチェックがあれば……⇩357へ ●61にチェックがなければ…⇩464へ

508

オノをかまえたとたん、異様な感じがした。はっとして見つめる。重い…。なぜだ!? どんどん重さを増してくる。ぴくりともしない。腕がぶるぶると震えはじめる。投げ捨てようにも手に吸いついたように離れないのだ。ぼくはオノをふりあげたまま膝をついた…。

⇩492へ

509

甲板に出た。船首に近い。いったいなにが…? さっとあたりを見まわし、レイラに目で問いかけた。

「いたのよ、やっぱり」レイラはほとんど邪悪にさえ見える笑みを浮かべた。「とても親切な舵手が」

(13と24について…)

●13と24の両方にチェックがある ⇩327へ ●24にだけチェックがある ⇩55へ

●13にも24にもチェックがない……………………⇩200へ

510

やがてもう一方の通路の先にあったのとそっくり同じ地下室へたどりついた。窓もなにもなく、一方の壁ぎわにへばりついたような階段が上のほうにある扉に続いているだけ。ただしその扉には鍵がなかった。思わず心のなかで勝ちどきをあげそうになる。ここに聖十字があるに違いないのだ。しかし…ふと思いなおす…やつが黙って見過ごすだろうか。自分にとって唯一最大の脅威である聖十字をぼくが手にすることを。

そっと扉に手をかけた。やつは息をつめてうかがっているのか？　それともなにか別の罠でも…。

扉は簡単にひらいた。

⇩466へ

511

狡猾な顔のまんなかにムチを浴びせた。その口がふたたび裂ける前だ。紫色の霧を吐き出す暇も与えまいと打ち続けた。邪悪な目はぼくをじっと捉えたままだ。が、その硬い鱗は通路をこする。首はじりじりと退いているのだ。ぼくは一歩づつ踏みこむ。

（守護カードをめくれ）

●ムチ
ムチのポイントが20以上なら……⇩515へ
19以下なら……⇩284へ
●オノ、バイブル……⇩284へ
●ロザリオ、コウモリ……⇩439へ

512

続く攻撃はむだだった。ぼくたちは突風にあったようになぎ倒された。スカルトナイトがその巨大な剣をひとふりすると、邪悪の血がまき散らされた。するとそこから黒い影がゆらめき立って、うずまきながらひとつに溶けた。圧倒的な力でぼくたちは地に押しつけられる。黒い笑い声が闇全体を震わせた。スカルトナイトの姿は闇に紛れた。
やがてもやが消え、ぼくたちは墓場のはずれにいることに気がついた。森が迫っている。

⇩53へ

513

「シド？　ねえ、大丈夫なの？　そっちでもなにか…」
大丈夫だ、と答えかけてはっとした。そっちでも、だって!?　ぼくは階段をかけあがる。

⇩509へ

514

「死は本来邪悪なるものではない…」
ズークは僧侶らしく十字をきり、ずっと操舵室へ踏み入った。

●61にチェックがあれば……⇩**448へ**
●61にチェックがなければ……⇩**358へ**

515

やがて首は完全に通路から退いた。血の色を帯びた輝きはまだぼくを見つめている。もうムチは届かない。が、強引に虚空を切り裂いてみせた。赤い輝きは闇に沈んだ（**ムチ…3ポイント**）。 ⇩**467へ**

516

「くそったれ！」
ロウは呪いの声をあげ、はじき返されたオノを蹴とばした。十字架にまたひとつ邪悪の炎をもたらす結果になってしまったのだ（**3をチェック**）。 ⇩**470へ**

517

大きく跳びあがろうと思いきり蹴ったとたん、床板が破れた。こんどはめりこんだまま足が抜けない。骸骨どもが手にした武器をいっせいにふりあげる。曲刀、長剣、レイピア、ダガー…ムチをふりまわしたが、動けないのでは複数の相手を確実にとらえることなどできやしない。次々に襲いかかる苦痛にたちまち突っ伏した…。が、はっと目をあけたときにはざっくり切り裂かれたはずの肩口に傷はなく、レイピアに貫かれたはずの胸からは一滴の血も流れていない。骸骨剣士も消え失せている…（**51をチェック**）。　⇩**491へ**

518

ためらうな。相手はズークじゃない。異形の化物だ。ムチを…くそっ、脚をぎゅうぎゅう締めつけやがる！

●**44にチェックがあれば**……⇩**129へ**　●**43にチェックがあれば**……⇩**207へ**
●**43にも44にもチェックがなければ**……⇩**363へ**

519

あるいは罠かもしれない。だがほかにどうすべきだろうか。本館につながる橋は壊れている。もどるしかないのだ。もどって最初に行った通路の先にある、あの鍵のかかった扉

を開けるしかないのだ。マントは北側の塔へ飛んでいった。すべてはそこではじまりそこで終わるはずだ。ぼくは聖十字をにぎりしめた。

⇩28へ

520

聖十字が割れた！　棺に打ち込んだ瞬間、亀裂が走り、こなごなに砕けてしまった。なにごともなかったように、棺の蓋はしずしずとひらいた。白い指が縁をつかむ。ぼくたちはただ放心して見まもるばかり…。

やつは自らの肉体とともによみがえることはできなかった。だが魂は永遠——そう言ったのはいま棺のなかに起きあがったレイラだ。レイラのまとっている黒いマントには見おぼえがある。かつての持ち主がそうであったに違いない凍るような笑みを、レイラは浮かべた。

邪悪の主はレイラの肉体を借りてよみがえった。

END

520

エピローグ1

「…っつ！」
首筋に小さいが鋭い痛みが突き刺さった。驚いて払うと、小さな蜘蛛が落ちてきた。
「こいつは⁉」
聖十字の上にいた大蜘蛛の腹からでてきたやつだ。どさくさに紛れて服のどこかにくっついていたのだろう。
「たいへん！」レイラが迷わず踏みつぶした。「毒蜘蛛よ。刺されたのね⁉」
毒…たしかに毒なのだろう。たちまち体がしびれ、手足がなえた。ぼくを支えながらロウとズークが顔色を変えるのが見えた。
「大丈夫。すぐに毒を出してしまえば助かるわ。だからその…」
レイラは仲間を見まわした。意味を悟り、ズークはややほっとしたようにうなずき、ロウにいたってはにやつきさえした。
「なら、たのんだぜ。俺はごめんだからな。野郎の首ったまにかぶりつくなんざ。たとえ悪魔が乗り移ったって…」
感心できる冗談じゃない。だがぼくはロウに言い返すことができない。唇さえ動かない

のだ。だが、妙な感じだ。全体に熱に浮かされているようにもうろうとしはじめたのだが、頭の一部は奇妙に冴えていた。意識を失うまいと、ぼくはそこにしがみついた。つらつらと、意志を離れてさまざまなことが思い浮かぶ……ぼくたちはうまくやった。やつはよみがえることができなかった。結局、聖十字を犠牲にしたことになったが、それだけの価値はあったのだ。邪悪の魂はふたたび肉体を得ることができなかった。そうとも。やつは永遠に…永遠？　恐ろしいものがこみあげた。なぜこのことに気がつかなかったのだろう。真実は何枚もの薄膜に包まれていたのだ。一枚はがし、これこそ真実だと思ってみるとまだ薄い膜が残っていた…いや、これはいまいましい蜘蛛の毒にやられたせいだ…魂は永遠。たしかだれかがそんなことを言ったのでは？　魂が永遠なら宿るべき肉体さえあれば…。

「震えてるぜ」

「この蜘蛛の毒は妄想を生むのよ。かわいそうに」

レイラがぼくの頭をそっと抱えた。

(待て。やめろ)ぼくはもがいた。だがかすれ声さえ出ない。(やめろー!!)やつの真の目的はなんだったのか。邪悪な魂にとって最大の敵はなんだったのか。聖十字だ。やつは狡智を用いてまんまとそれを取り除いたのでは…。ぼくは最後の薄膜をはがしたと思った。

「苦しいのね。大丈夫。すぐ楽になるから」

レイラは微笑んでいた。その唇が首筋に触れた。ひどく冷たい…。

エピローグ2

「…っつ！」
首筋に小さいが鋭い痛みが突き刺さった。驚いて払うと、小さな蜘蛛が落ちてきた。
「こいつは⁉」
聖十字の上にいた大蜘蛛の腹からでてきたやつだ。どさくさに紛れて服のどこかにくっついていたのだろう。
「たいへん！」レイラが迷わず踏みつぶした。「毒蜘蛛よ。刺されたのね⁉」
毒…たしかに毒なのだろう。たちまち体がしびれ、手足がなえた。ぼくを支えながらロウとズークが顔色を変えるのが見えた。
「大丈夫。すぐに毒を出してしまえば助かるわ。だからその…」
レイラは仲間を見まわした。意味を悟り、ズークはややほっとしたようにうなずき、ロウにいたってはにやつきさえした。
「なら、たのんだぜ。俺はごめんだからな。野郎の首ったまにかぶりつくなんざ。たとえ悪魔が乗り移ったって…」
ちくしょう。こっちだってごめんだ。だがぼくはロウに言い返すことができない。唇さ

エピローグ

え動かないのだ。ひどく体が熱かった。毒のせいには違いなかったが…。
「汗かいてるぜ」ロウがふたたび笑った。「早いとこどうにかしてやれよ」
くそっ、人ごとだと思って。
レイラがぼくの頭をそっと抱えた。頬が少し赤らんでいるような気がした。
「かわいそうに。でも大丈夫よ。すぐに楽になるわ」
熱に浮かされているようにもうろうとしはじめたのだが、意識を失うまいと、ぼくは聖十字を見つめていた。ぼくたちはうまくやった。やつの邪悪な魂はふたたび肉体を得ることはできなかった。聖十字がぼくたちの手にあることが勝利の証なのだ。やつは二度と闇の世界からよみがえることはない。すべてが終わったとき、レイラがこうつぶやいた。わたしたちはこれを守り通さなければいけない、と。ぼくたちにはその意味がよくわかった。魂は永遠だ。肉体は滅び、その灰すら消滅しても、宿るべき肉体を得ればふたたび…。ぼくたちは邪悪と戦い続けなければならない。真正バンパイアハンターとして――。が、とりあえずは、このあまりかんばしくない状態では見得もきれやしない…。
ひょお、とロウが声をあげ、ズークがくすくすと笑った。ぼくの首筋に柔らかいものが触れたときだ。

チェックシート

アイテムポイント

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
ムチ																									
オノ																									
バイブル																									
ロザリオ																									

	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
ムチ																									
オノ																									
バイブル																									
ロザリオ																									

ゲームの指示するポイント数だけゲージを塗りましょう。オノ、バイブルは、「オノ上下」なら上段・下段両方を、「バイブル上」ならそれまでのチェックに続けて上段のみを塗るようにしてください。

チェックシート

行動記号

チェックシート

ステップメモ	

チェックシート

アイテムポイント

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
ムチ																									
オノ																									
バイブル																									
ロザリオ																									

	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
ムチ																									
オノ																									
バイブル																									
ロザリオ																									

ゲームの指示するポイント数だけゲージを塗りましょう。オノ、バイブルは、「オノ上下」なら上段・下段両方を、「バイブル上」ならそれまでのチェックに続けて上段のみを塗るようにしてください。

チェックシート

行動記号

チェックシート

ステップメモ	

編集部から

息つく暇もなく襲いかかってくる魔物たち。悪意に満ちた恐怖の城を冒険した気分はいかがだったでしょうか。あなたの運と努力に応じて2つのエンディングが用意してあります。一番ドキドキして感動するパターンを体験してもらえたら幸いです。

当編集部では、今後とも、ファミコン冒険ゲームブックを次々と発売していく予定です。どうぞ、ご期待ください。

つきましては、すでに発表しておりますものを含め、当シリーズに対するご意見、ご感想をお待ちしております。また、これからゲームブック化してほしい素材、ゲームブックに対する希望などもお寄せいただければ幸いです。

〈あて先〉〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号㈱双葉社「冒険ゲームブック」編集部・悪魔城伝説係

お寄せいただいた方々の中から、抽選で、ゲームブックの最新刊をプレゼントいたします。なお、おはがき、お手紙には、感想を書いていただいた本のタイトル、あなたの年齢も忘れずにお書き添えください。

企画・構成／井上尚美
制作／RECCA社
文／井上尚美
作画／松下徳昌

悪魔城伝説
真正バンパイアハンター
双葉文庫 ファミコン冒険ゲームブックシリーズ れ 01-43

著　者　井　上　尚　美
制　作　レ　ッ　カ　社
発行者　清　水　文　人
発行所　株式会社双葉社
〒162　東京都新宿区東五軒町3番28号
TEL　東京(5261)4818(営業)
(5261)4837(編集)
振替　東京8-117299
印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

ISBN4-575-76148-6　C0193 (落丁・乱丁はお取りかえいたします)定価・発行日はカバーに表示してあります

FUTABASHA GAMEBOOK SERIES

桃太郎伝説
新・鬼ケ島
ファザナドゥ
少年魔術師インディ
ヴァイケルの魔城
ファンタジーゾーン
ヘラクレスの栄光
スーパーマリオブラザーズVol.3
ドラゴンクエストII(上)
ドラゴンクエストII(下)
月風魔伝
リンクの冒険
ミシシッピー殺人事件
がんばれゴエモン！からくり道中
悪魔城ドラキュラ
ポートピア連続殺人事件
サンサーラ・ナーガ
スーパーマリオブラザーズVol.2
メトロイド
ゼルダの伝説
スーパーマリオブラザーズVol.1
次元からくり漂流記2
ドラゴンラリー2
プロ野球ファミリースタジアム
ウルティマ
ねこまんまの大逆転

悪魔城伝説

定価 430円

1990年6月26日　第1刷発行

著　者／井上尚美
制作／レッカ社
発行者／清水文人
発行所／株式会社双葉社
〒162 東京都新宿区東五軒町3―28

FUTABASHA FAMICOM GAME BOOK SERIES

悪魔城伝説

真正バンパイアハンター

ストーリー

陰鬱な森。霧をまとった古城。その中に置かれた大きな棺の蓋が、今、静かに持ち上がり、青白い指が棺の縁をつかむ……。

不吉な悪夢が４人の若者を悪魔城と呼ばれる館に呼び寄せた。シド、ロウ、ズーク、レイラの４人。かつて、彼らの祖先が封じ込めたドラキュラが、今また甦ろうとしている。あらゆる黒魔術を操り、悪魔の力でこの世を支配しようとした恐るべき人物だ。その復活を許してはならない。それを阻止するべく戦うことを、４人は運命づけられている。

ドラキュラVS真正バンパイアハンターの壮絶な戦いがこれから始まる。

定価430円（本体417円）

ISBN4-575-76148-6 C0193 P430E 双葉文庫